望むと、幷州が今は却つて自分の故郷のやうな心地がすることである。

（ロ）風勁角弓鳴。將軍獵二渭城一。草枯鷹眼疾。雪盡馬蹄輕。忽過二新豐市一。還二歸細柳營一。回看二射鵰處一。千里暮雲平。（王維、觀獵）

【解　義】北風が烈しく吹いて角弓（角で作つた弓）を鳴らし、狩獵の好時期となつたので、將軍は渭城で獵を催した。野の草は枯れ果て、鷹の目は愈々すばやくなり、雪は消えてたことゝて馬蹄も輕くなつたから、その出發は自由自在となり、忽ち遠く新豐の市街を過ぎたかと思ふと、又忽ちにして近く將軍の居る細柳の軍營に歸つて來た。さて獵を終へて細柳の軍營に歸り來て先きに鵰を射た處を振りかへつて見ると、早や既に暮方の雲が平かに千里に橫引いてゐることである。

二、大正十二年度第二次（三九回）

一、子曰、不レ憤不レ啓。不レ悱不レ發。擧二一隅一、不レ以二三隅反一。則不レ復也。（論語、述而第七）

【解　義】孔子が云はれるに、「學者が之を知らうとして未だ知り得ずして煩悶してゐなければ、その意を啓いて教へない。又學者が之を口に云ひあらはそうとして未だ口に云ひあらはさなければ、云ひあらはすことが出來るやうに教へてない。一體物の道理と云ふものは大抵類推のなし得るものである。例へば四隅あるものなら、其の中の何れか一隅を擧げて示すと、他の三隅を知り得るやうなものである。それ故若し一隅の道理を示しても他の三隅の道理を考へ合すことの出來ない樣な者には、教へる價値がないから、再び告げて教へない。

二、子產聽二鄭國之政一、以二其乘輿一濟二人於溱洧一。孟子曰、惠而不レ知レ爲レ政。歲十一月徒杠成、十二月輿梁成。民未レ病レ涉也。君子平二其政一、行辟レ人可也。焉得二人人而濟レ之。故爲レ政者每レ人而悅レ之日亦不レ足矣。

【解　義】子產が鄭國の政事を扱つて居た時、溱洧二川を徒渉する者のあるのを見て、自分の乘る所の輿に其等の人々を乘せて渡せてやつた。孟子が之を評して云ふには「子產は私の小惠を行つたのみで、本當の政治を知らぬ。毎年十一月には徒歩で行くべき小橋が出來上り、十二月には又車輿を行るべき大橋が出來上る。それ故多忙になつたとて、人民は決して川を徒渡する樣な困難はない。君子（有位の者）が其の政治を公平に行ひさへすれば、道を行く時、往來の人をおしひらいて道を避けさせてもよい。どうして人々を自分の輿に乘せて川渡しをさせるやうな事が出來得やうぞ。それ故政事を爲す者は、若し一人毎に私惠を施して一人も殘らず之を悅ばせようとしたならば、人は多くて日は足らず、到底間に合はぬのである」と。

三、下レ馬登二鄴城一。城空復何見。東風吹二野火一。暮入二飛雲殿一。城隅南對レ望二陵臺一。漳水東流不二復回一。武帝宮中人去盡。年年春色爲レ誰來。（岑參、登古鄴城）

【解　釋】馬から下りて鄴城跡に登つた。城は跡方ばかりになつてゐて何一つとして昔の面影を留めたものはない。たゞ東風が物凄い野火を吹き、暮方に飛雲殿に入つて來るのみである。城の南隅は望陵臺即ち昔の銅雀臺に對し、漳水は昔のまゝに東流して復回らぬ。當時武帝の宮中に仕へた美人等はすべて去つてしまつたのに、さて年々の春景色は一體誰の爲に來るのであらうか。も早や武帝もその當時の人々も居ないのに。

四、趙孝成王、德下公子之矯奪二晉鄙兵一而存上レ趙。乃與二平原君一計以二五城一卦二公子一。公子聞レ之意驕而有二自功之色一。客有レ說二公子一曰、物有レ不レ可レ忘。公子忘レ之也。且矯二魏王令一奪二晉鄙兵一。以救レ趙於レ趙則有レ功矣。於レ魏則未レ爲二忠臣一也。公子乃自矯而功レ之竊爲二公子一不レ取也。於レ是公子立自責、似レ若二無レ所レ容者一。（史記、信陵君列傳）

【解　釋】趙の孝成王は公子之が命令を僞つて晉鄙の兵を奪つて趙を存したことを德とした。そこで平原君と計つて、五城を以て公子を封じた。公子は之を聞いて心に慢じて自ら功があると

する顏色をして居た。然るに客の中に公子に說く者があつて云ふには、「物には忘れてはならぬ物と、忘れなければならぬ物とがあります。夫は公子に德を施して居る。公子は之を忘れてはならぬ。次に公子が人に德を施した事は忘れなければならぬ。且つ魏王の命令を矯めて晉鄙の兵を奪ひ趙を救ふた。この事は趙に於ては功があるが、魏に於ては未だ忠臣とは云はれません。然るに公子は自ら誇つて功があるとするのは、自分は公子の爲に竊に遺憾に思ひます」と。是に於て公子は大いに自ら後悔して如何とも出來ない樣な風であつた。

三、大正十三年度第一次（四〇回生）

一、小人間居爲二不善一。無レ所レ不レ至。見二君子一而后厭然、揜二其不善一而著二其善一。人之視レ己、如レ見二其肺肝一然。則何益矣。此謂レ誠二於中一形二於外一。故君子必愼二其獨一也。（大學）

【解　釋】不德の小人は、獨り閑暇無事で居ると惡いことをして至らぬ所はない。然しながら小人と雖も、其の本心には善を爲し惡を去らねばならぬことを知つて居るが故に、一たび道を行ふ君子を見れば俄かに驚き恐れて、其の不善を藏ひかくして、うはべに其の善行を表はし示すのである。然しながら他人が自分を見拔くことは恰も腹の中の臟腑迄も見えるが如くである。それ故、たとへその樣にうはべを飾つたとて何の益があらうか。是れが則ち心中に誠があれば

自然に形となつて外面に著はれると謂ふのである。それだから君子たる者は、必ず自分一人居て誰も見て居ない獨居の時を愼み注意するのである。

二、孟子曰、廣土衆民、君子欲レ之、所レ樂不レ存焉。中二天下一而立、定二四海之民一、君子樂レ之、所レ性不レ存焉。君子所レ性、雖二大行一不レ加焉。雖二窮居一不レ損焉。分定故也。君子所レ性、仁義禮智、根二於心一。其生レ色也。睟然見二於面一、盎二於背一、施二於四體一、四體不レ言而喩。

【解　義】　孟子が云ふに「土地が廣くて人民が多いと云ふ事は、君子は固より之を欲するけれ共未だ以て樂む所までには至らない。又天下の中央に君臨して立ち、四海の民を平定する事は、之れ又君子の樂む所ではあるが、未だ以て其の本性とする所迄には至らない。一體君子の本性とする所は、如何に自分の道が天下に行はれた所で加はるゝものでもなく、又反對に如何に困窮しても決して減損するものでもない。是れ君子の本性は先天的に其の分量が定つてゐるからである。然らば君子の本性とする所は何であるかと云ふに、それは卽ち仁義禮智であつて、之れは固より君子の心に根ざして居るものである。從つて其の心に根ざして居る仁義禮智の本性が外顯色にあらはれるや、その睟然とした德容が、或は其の面面に見はれ、或は其の背後に盎れ、或は又其の四體である手足までに行き渡る。さて手足は固より言語を發しないけれ共、他人が一見して忽ち其の德性の存する所を曉つてしまふのである」と。

三、昔聞洞庭水。今上岳陽樓。吳楚東南坼。乾坤日夜浮。親朋無二一字一。老病有二孤舟一。戎馬關山北。憑レ軒涕泗流。

【解　義】　昔から洞庭湖の景色の好いことは聞いて居たが、今始めてその湖畔にある岳陽樓に登つて見ると、實に聞きしに勝さる絶景である。吳と楚の兩國は遙か東南の方にひらけて居り、又湖面は洋々として際涯もなく廣大であるから、丁度天地日月もその中に日夜浮いてゐる樣である。さて自分は今此の天下の絶景に對してはからずも故鄕の事を思ひ出したのであるが、その故鄕である親朋からは一字の音信さへもない。剩さへ老病の此の身は僅か一葉の孤舟に乘つて漂泊して居るのみで、誰一人として賴る人がない。當にそればかりでなく、京都は大いに亂れ、關山の北方は今や戰爭の眞最中であるから、中々故鄕へは歸られない。それを思ひ彼を思ふと何となく悲しくなつたので欄の軒に憑つたが、止めやうもなく涙が出て袖を絞つた事である。

四、古之聖愛レ日以求レ治、辨レ色而視レ朝、苟少安焉。而至二於日出一則終日爲レ之不レ給。以レ少而言レ之。一日而廢二一事一。一月則可レ知也。一歲則事之積者、不レ可レ勝レ數矣。欲二事之無レ繁、

則必勞於始而逸於終。昃興而晏罷。「天子未退則宰相不敢歸安於私第。宰相日昃而不退則百官莫不震悚盡力於王事。而不敢宴游、如此。則纖悉隱微莫不舉矣」、天子求治之勤、過於先王。而議者不稱王季之晏朝、而稱舜之無爲。不論文王之日昃而於論始皇之量書。此何以率天下之怠耶。臣故曰、厲精莫如自上率之。則壅蔽決矣。

（蘇軾、決壅蔽）

【解　釋】古の聖天子は一日の光陰を愛して政治を務め、天下の善く治まらんことを求め、朝はほの暗い中から朝廷に出て、一寸休息して後、又日が出てからは終日即ち晩まで之をなしても未だ充分とせず、少しの事を以て之を言ふも、一日に一事を廢すれば一月中に廢する事は之を推知することが出來る。それ故一年となれば事の積れるものは數へる事が出來ない程である。それ故、事の多くないことを欲するならば、初めに骨折つて終りに樂む方がよい。又朝は早く起きて夜は晩くやめるがよい。「天子が未だ朝廷から還御ない時は、宰相は敢へて私宅へは歸らない。宰相が日が傾いても退朝しない時は、其他の百官も力を王事に盡さないものはなく、從つて宴游する者もない。若し政治の事が此の樣であれば、小さな事、目に立たぬ事も皆運ばれないことはない。」天子が其の政治に勤めることは先王に過ぐるも、議者は王季の晩く入御せしことを稱讃しないで、舜の無爲なるを稱讃し、文王の日傾くまで繁忙なりしことを稱讃しないで、始皇の書を量つた事を稱讃する。此の如くであるならば、どうして天下の怠惰を率ゐて之を引立てることが出來ようか。それ故臣は敢へて精を勵ますのは、上天子より之を率ゐるに越したことはないと思ふのである。此の樣であるならば、塞つて居る所も自然に開かれるであらう。

四、大正十三年度第二次　（四一回豫）

一、子貢曰、如有博施於民而能濟衆。何如。可謂仁乎。子曰、何事於仁。必也聖乎。堯舜其猶病諸。夫仁者已欲立。而立人。已欲達、而達人。能近取譬。可謂仁之方也已。（論語、雍也）

【解　釋】子貢が云ふには「もしこゝに人があつて、博く人民に恩惠を施して、天下の衆人を濟ふならば、其の德は如何でせうか。仁と申されませうか」と問ふた。孔子の云ふには、「どうして仁どころか、其のやうな人であるならば、必ず聖人と謂ふべきである。而して此の如きは彼の堯舜の如き大聖人でさへ猶之を難しとして憂へて居たのである。一體仁者と云ふ者は、自分が立たうと欲して人を立てゝ、自分が達せようと欲して人を達せしめる。それ故仁の道を求めようとするならば、たゞ近く己の欲する所を以て他人の心に引きくらべ、他人の欲する所も亦

この様であると思つて、己の欲する所を推して、他人に及ぼすのが仁を求める方法であると謂ふことが出來るのである」と。

二、明道先生教レ人自レ致レ知至二於知一レ止。誠レ意至二於平一天下一、灑掃應對至二於窮一レ理盡レ性、循循有レ序。病三世之學者、捨レ近而趨レ遠、處レ下而闕レ高。所二以輕自大一而卒無レ得也。（小學、善行第六）

【解釋】明道先生が人を教へるには、高い方では知識を推し極めることから善の至極に止るに至るまで、心を誠にすることから天下を平かに治めるに至るまで、又低い方では、年少者が掃除することや、來賓者と應接することから道德上の理を窮め、人間の本性である信義禮智等をつくすに至るまで、整然として順序が立つてゐる。そして當時の世の學者が、卑近な事を捨てゝ高遠な事に心を走らせ、程度の低い學級に居ながら高尚な事を窺ひ、その結果自ら輕々しく志大なりとして、遂に何の得る所のないことを憂ひて居られた。

三、（イ）避レ賢初罷レ相、樂レ聖且銜レ杯。爲問門前客、今朝幾個來。（唐詩選・罷相作李適之）

【解釋】賢者の爲に左相の役を避けて家に歸り、專ら聖人の道を樂み、一方では又清酒でも飲んで呑氣に餘生を送る。さて一寸尋ねて見るが、以前自分が左相の役を勤めて居た時には、アノ様に門前市をなして尋ねた來客も、今朝は果して幾人來たであらうか。さて〳〵人情の輕薄なことであるわい。

（ロ）秦時明月漢時關。萬里長征人未レ還、但使二龍城飛將在一。不レ教三胡馬度二陰山一。（同上・從軍行王昌齡）

【解釋】匈奴を征伐に行く關門を、秦の時代には明月關、漢の時代には玉門關と、名前は時代に依て變つたけれ共、矢張り匈奴の侵入は今も昔と變りはなく、萬里の遠い匈奴を征伐に行つた人々は未だ歸つて來ない。唯だ昔彼の龍城に於て大功を立てた飛將軍の如き良將をして守らしめたならば、胡馬をして陰山を渡つて來冠せしめる樣なことはなからうに、さて〳〵殘念なことである。

四、昔余少年從二子瞻一遊。有二山可一レ登有二水可一レ浮。子瞻未レ始不二蹇レ裳先一レ之。有レ不レ得レ至。爲レ之悵然移レ日。至下其翩然獨往。追二遙泉石之上一、槪二林卉一拾二澗實一。酌レ水而飲上レ之。見者以爲レ仙也。蓋天下之樂無レ窮、而以レ適レ意爲レ悅。方二其得一レ意。萬物無二以易一レ之。及二其既厭一未レ有下不二洒然自笑一者上也。譬二諸飲食雜一陳於前一。要レ之一飽而同委二於臭腐一。夫孰知二得失之所一レ在。惟其無レ愧二於中一、無レ責二於外一而姑寓焉。此子瞻之所二以有一レ樂二於是一也。

右ハ讀方ノミ解釋ヲ要セズ。

五、大正十四年度第一次（四二回卷）

一、堯舜帥二天下一以レ仁、而民從レ之。桀紂帥二天下一以レ暴、而民從レ之。其所レ令反二其所一レ好、而民不レ從。是故君子有二諸己一而后求二諸人一。無二諸己一而后非二諸人一。所レ藏二乎身一不レ恕、而能喩二諸人一者、未二之有一也。（大學）

【解　義】堯舜は天下の人民を率ゐるのに仁を以てしたので、人民は之に從つた。桀紂は天下の人民を率ゐるのに暴虐を以てしたので、人民は之に從つた。上の好む所、下必ず之に倣ふことはこの通りである。桀紂の好む所は暴虐であつて、其の命令する所は善を爲し惡を禁ずるにある。故に人民は其の命令する所に從はないで、其の好む所に從ふのである。されば君子たる者は、已に仁讓の德を具有して、然る後人民も亦仁讓の德あらんことを求め、已に暴虐の行なくして、然る後人民に暴虐の行ある者を非るのである。已に仁讓の德がなくて、能く人に喩す者は未だないのである。

二、孟子曰、覇者之民、驩虞如也。王者之民、皞皞如也。殺レ之而不レ怨。利レ之而不レ庸。民日遷レ善、而不レ知二爲レ之者一。夫君子所レ過者化、所レ存者神。上下與二天地一同レ流。豈曰レ小レ補之一哉。（孟子盡心上）

【解　義】孟子が云ふに「覇者は恩惠を施すから、その人民は喜び樂しむ。併しそれだけの話で永續きがしない。之に反して王者は其の恩澤が廣大であるからその人民は其の德を感じない。從つて王者の人民は廣大にして自得してゐる樣である。王者が若し已むを得ずして人民を殺しても決して怨まない。又王者が人民の利益をはかるやうなことをしても、人民はそれを王者の手柄とも思はない。其の廣大なる恩德は自然と人民を感化して、人民は日毎に善良に遷つて行くが、さて人民は誰がその樣にさせるのやら知らない。一體君子の天下に君臨して經過して行く所の者は、總べてを感化し、其の存する所の者の不思議なこと誠に神の如くである。其の德化の盛なことは、上は天、下は地と流行を同じくして極まる所がない。されば之をどうして彼の覇者の如きものが、私惠小德を行つて缺漏を少しばかり補足するのと同一であらうと云へようか、決してそのやうなものではないのである。

三、范文正公、爲二參知政事一時、告二諸子一曰、「吾貧時、與二汝母一養二吾親一。汝母躬執レ爨、而吾親甘旨未レ豐。充也。今而得二厚祿一、欲二以養一レ親、親不レ在矣。汝母亦已蚤世。吾所二最恨一者忍

令ニ若曹享ニ富貴之樂一也。』吾輿中宗族甚衆。於レ吾固有ニ親疎一也。然　吾祖宗親レ之、則均レ是子孫。固無ニ親疎一也。苟祖宗之意無ニ親疎一、則饑寒者吾安　得レ不レ恤也。自ニ祖宗一來積レ德百餘年、而始發ニ於吾一得レ至ニ大官一。若獨享ニ富貴一而不レ恤ニ宗族一、異日何以見ニ祖宗於地下一、今何顏入ニ家廟一乎。（小學、外篇嘉言）

右ハ讀方及「」內ノ字句ノ解釋ノミヲ記スベシ。

【字句ノ解釋】○執レ爨　炊爨で飯をかしぎ、食物を調理すること、卽ち炊事をとること。○甘旨　美味又は滋味の義。○蚤世　蚤は早、若か死に。○所ニ最恨一　何より殘念に思ふ所。○若曹　汝等。

聞、（イ）鄰家玉笛暗飛レ聲。散入ニ春風一滿ニ洛城一。此夜曲中聞ニ折柳一。何人不レ起ニ故園情一。

（唐詩選、李白春夜洛城聞笛）

【解　義】　隣の家か知らんが、玉笛を吹いてゐる者があつて、其の聲が暗の中から聞えて來る。そして其の音が春風に吹き散らされて洛陽の城一杯に廣がつてくる。さて今夜自分は色々の曲を聞いたが、其の中に折柳の曲（折楊柳のことで、別離の時に吹く曲の名。漢の李延平が傳へた橫笛二十八曲の一）があつたが、此の曲を聞いては、誰か自分の故鄕を思ふの情を起さぬ者があらうか。恐らく皆悉く起したことであらう。

（ロ）獨在ニ異鄕一爲ニ異客一。每レ逢ニ佳節一倍思レ親。遙知兄弟登ニ高處一。遍揷ニ茱萸一少ニ一人一。

（同上、王、維九月九日憶山東兄弟）

【解　義】　自分獨り異鄕にあつて異客となつてゐるから、日夜兄弟のことを思ひ出さぬ日とてはない。けれどもとりわけ、佳節に逢ふ度毎に一層其の思ひが甚だ切である。さて今日は九月九日の重陽の節句であることなれば、故鄕では兄弟姉妹相揃つて高い處へ登つて、各々に茱萸（グミのことで、其の枝を折つて頭に揷すと惡氣を拂ふといふ）を頭に揷ざして、菊花の酒を酌みかはして居ることゝ思ふが、兄弟等は「此の中に自分が一人缺けてゐるのが殘念である」と話合つて居ることゝ思ふ。さて〳〵なつかしい次第である。

六、大正十四年度第二次　（四三回生）

一、（イ）子曰、不レ患ニ無レ位。患レ所ニ以立一。不レ患レ莫ニ己知一。求レ爲レ可レ知也。（論語、里仁第四）

【解　義】　孟子が云ふに「世人は位のないことを患へるが、自分は位のないことは患へないで、其の位に立つだけの學問道德等のないことを患へる。又世人は人から知られないことを患へるが、自分は他人が知らないことは患へないで、他人に知られるだけの學問道德等を我が身に備

へようと求める」と。

（ロ）子夏曰、日知二其所一レ亡、月無レ忘二其所一レ能、可レ謂レ好レ學也已矣。（同上、子張第十九）

【解　釋】子夏が云ふに「もしこゝに人があつて、其の人は日毎につとめ勵んで未だ其の知らざる所、行はざる所を知り、又月毎に自ら省みて其の既に知り、既に行ひ得た所を忘れないならば、其の様な人は寸時も學問から離れないのであるから、本當に學問を好む者であると謂つてよい」と。

（ハ）孟子曰、教亦多レ術矣。予不レ屑二之教誨一也者、是亦教二誨之一而已矣。（孟子、告子下）

【解　釋】孟子が云ふに「教へる方法も色々澤山ある。たとへば自分が教誨することを屑しとしないで拒絶する方法も、是れ亦一種の教誨を施してゐるものである。蓋し拒絶することに依て其人をして反省せしめ、悔悟すれば、それが立派な教誨になるからである。」

二、象牙珠玉怪玲之物、有レ悦二於人之耳目一。而不レ適二於用一。金石草木絲麻五穀六材。有レ適二於用一。而用レ之則弊。取レ之則竭。悦二人之耳目一。而適二用一。用レ之而不レ弊、取レ之而不レ竭。賢不肖所レ得、各々因二其才一。仁智之所レ見。各々隨二其分一。才分不レ同。求無レ不レ獲者。惟書乎。

（唐宋八家文、蘇軾、李氏山房藏書目記）

【解　釋】象牙や犀角や珠玉其他怪しく珍しい物は、人の耳目を悦ばせる事はあるが、實用には適しない。金石や草木や絲麻や五穀（稻、麻、粟、麥、豆）や六材（土、金、石、木、獸、草）は實用には適するが、之を用ゐるとやぶれ、之を取れば竭きる。然るに賢者も不肖者も各々其の才に應じて得、仁者も智者も各々其の分に隨つて見、たとひ才と分とに不同があつても、之を求めて何等かの利益を獲られない事のない者は、唯だ書物だけであらうか。

三、子房未二嘗狙一破レ產不レ爲レ家。滄海得二壯士一。椎レ秦博浪沙。報レ韓雖レ不レ成。天地皆震動。滍匿遊二下邳一。豈曰レ非二智勇一。我來二圮橋上一。懷レ古欽二英風一。唯見二碧水流一。曾無二黃石公一。嘆息此人去。蕭條徐泗空。（唐詩選、李白、經下邳圮橋懷張子房）

【解　釋】子房（即ち張良）が未だ漢の高祖に仕へない時、彼は其の家產を蕩盡して家の事などは一構顧みなかつた。其の頃丁度東方の滄海君から一壯士を投けられたので、彼はその男に百二十斤もある大きな鐵槌を持たせて、秦の始皇を博浪沙中で擊つたが、不幸其の計畫は韓國の爲めに仇を報じて成就しなかつた。併し之に依て天地は皆悉く震動した。それから彼は身を匿して下邳に遊んだ。その様な遣り方はどうして智勇でないと謂つてよからうか。さて自分は今圮橋の上に來て、當時のことを憶ひ、子房の英れた德望風采等を欽仰したことであるが、昔に

變らぬものはたゞ碧水の流れるばかりで、曾つて子房に兵書を授けたと云ふ黄石公の姿も見えぬ。昔の英雄子房の死んだ後は、物寂しく徐泗の水のみが空しく流れるのを見てたゞ嘆息するばかりである。

七、大正十五年度第一次（四四回豫）

一、君子尊德性。而道問學。致廣大。而盡精微。極高明。而道中庸。溫故而知新。敦厚以崇禮。（中庸）

【解　釋】此の一節は德を修め道を成すの方法、即ち修養の方法に就いて述べたものである。元來君子は天性の德を尊敬捧持して之を失はない樣にすると共に、他方では學問に由つて知識を得、又廣大を致して心胸を開拓し、彼れ此れの別をなくすると共に、他方では精細微妙を盡くして萬遺憾なきを期する。又高明を極めて心を萬物の表に超然たらしめると共に、中庸の道に由つて過不及の誤のない樣にし、更に又既に學んで熟知せるものは復た時に習ふて忘れない樣にすると共に、一方では日々未だ習はずして新しい事を知ると共に、生得素質の淳厚なものは愈々之を敦うすると共に、一方では禮儀を崇んで修飾する樣にして、決して一方に偏せしめないで兩々相俟つて修養するのである。

二、子曰、不憤不啓。不悱不發。擧一隅不以三隅反。則不復也。（論語、述而第七）

【解　釋】大正十二、第二次、三九、參照。

三、滕文公爲世子、將之、過宋而見孟子。孟子道性善。言必稱堯舜。世子自楚反。復見孟子。孟子曰、世子疑吾言乎。夫道一而已矣。成覸謂齊景公曰、彼丈夫也。我丈夫也。吾何畏彼哉。顏淵曰、舜何人也。予何人也。有爲者亦若是。公明儀曰、文王我師也。周公豈欺我哉。

【解　釋】滕の文公が未だ太子であつた時楚國へ行かうとして、宋國に立寄つて、當時宋國に滯在して居た孟子に會つた。所が孟子は自分の持論である性善說を述べ、人の本性は善良なものであるから、其の本性を發揮さへすれば、何人と雖も堯舜の如き大聖人になるべしと云つて、何時も話す度毎に堯舜の道を稱揚して、以て文公をして堯舜の如き明君たらしめんことを希望した。太子が楚國に行つて歸りに又孟子に會つた。孟子が云ふには「貴下は私の言ふことを御疑ひになるのですか、一體道に二つはありません。昔齊の勇者の成覸と云ふ者が、其の君景公に云ふには「彼も一個の男子であり、私も一個の男子であります、それ故私がどうして彼を畏れませうか」と。又孔子の弟子の顏淵も云ふには「彼の昔から聖人とも君子とも云はれる舜は

如何なる人間でせうか。それは云はずと知れたこと、舜も私も同じ之れ一個の人間ではありませんか、従つて苟くも大いに爲す所あらんとする努力さへあれば誰だつて舜の如き大聖人になれないと云ふ事はありません」と。又魯の公明儀と云ふ賢者も「文王は我が師とすべき人であるから、學ばゞ其の地位に至る事が出來るし、周公の言は何れも信實であつて、決して我れを欺く者ではなく、以て我が法則として學ぶに足る」と云つた。

四、李沆爲レ相時。王旦甫參政。沆喜レ讀二論語一。嘗曰。爲二宰相一。如二論語中節一。用而愛レ人。使レ民以レ時兩句。尙不レ能レ行。聖人之言。終身誦レ之可也。沆曰。敢二四方水旱盜賊一奏レ之。旦謂細事。不レ足レ煩二上聽一。沆曰。人主少年。當レ使レ知二人間疾苦一。不レ然血氣方剛。不レ留二意聲色犬馬一。則土木甲兵賂詞之事作矣。吾老。不レ及レ見。此參政他日之憂也。（十八史略）

右讀方ノミ解釋ヲ要セズ。

五、東郡趨レ庭日。南樓縱レ目初。浮雲連二海岱一。平野入二青徐一。孤嶂秦碑在。荒城魯殿餘。從來多二古意一。臨眺獨躊躇。（唐詩選、杜甫、登二州城樓一）

【解　釋】東郡に父を歸省した序でに、州城の南樓に登つて始めて目を縱まにして四方の景色を眺めた。その時東海や岱山の方には浮雲が一面に連つてをり、袞州の平野は青徐兩州に入つて如何にも遠大であり、又一方鄒嶧山の方を見ると、孤嶂のほとりには秦の始皇の石碑が依然として存在してをり、又有名な靈光殿も荒城の中に殘つて居る。從來此の地は人をして懷古の情を起さしめるのであるが、自分も亦此處に登つて往時を追想し、感慨無量獨り躊躇して去る事が出來なかつたのである。

八、大正十五年度第二次　（四五回生）

一、(イ)　子曰、二三子以レ我爲レ隱乎。吾無レ隱二乎爾一。吾無レ行而不レ與二二三子一者。是丘也。（論語、述而第七）

【解　釋】孔子が云ふに「諸君は我れが隱してゐて殘らず教へないと思つて居るのであるか。我れは諸君に隱しては居ないのである。我れの日々の動作は諸君に示さない事はない。之れが孔丘の孔丘たる所である」と。

(ロ)　子曰。法語之言。能無レ從乎。改レ之爲レ貴。巽與之言。能無レ說乎。繹レ之爲レ貴。說而不レ繹。從而不レ改。吾末レ如二之何一也已矣。（同上、子罕第九）

【解　釋】孔子の云ふには「法語の言（酵を嚴しく理を正しくして人の法とすべき話）は言葉を嚴肅に道理を正して過失を言ふのであるから、誰でも能く之に從ふものである。しかし從つたのみではよくない。之に依て

己の過失を改めるのが貴いのである。巽與の言（したがひくみする意、即ち人の心に逆はず、己も又賛成するが如く婉曲に說いて導く語）は、言葉を穩和に婉曲に過失を言ふのであるから、誰でも之を聞いて喜ばないものはない。併し喜んだのみではよくない。之に依て微意のある所を繹ね求めるのが貴いのである。喜んで眞意を繹ね求めず、從つて改めないならば、吾れは之を如何ともすることが出來ないのである。

二、蘇子曰「客亦知夫水與月乎。逝者如斯而未嘗往也。盈虛者如彼而卒莫消失也。蓋將自其變者而觀之。則天地曾不能以一瞬。自其不變者而觀之。則物與我者無盡也。而又何美乎」。且夫天地之間、物各有主。苟非吾之所有。雖一毫而莫取。惟江上之淸風。與山間之明月。耳得之而爲聲。目遇之而成色。取之無禁用之不竭。是造物者之無盡藏也。而吾與子之所共適。（蘇軾、前赤壁賦）

右ハ讀方及「　」內ノ字句ノ解釋ノミヲ記スベシ。

【字句ノ解釋】○逝者如斯而未嘗往也。逝者とは水、論語に「子在川上曰、逝者如斯夫」とある。此の樣に夜も晝も流れ〳〵て盡きない意。○盈虛者如此而卒莫消長也。盈虛者とは月、月は滿つたり缺けたりするが、月其物の本體は損益消長する時がない意。○蓋將自其變者而觀之云々。單に一部分について觀察する時は、天地間に於ける神羅萬象時々刻々に變化して寸時も同一狀態に止ることがないが、而も其全體上より觀察する時は、天地間の神羅萬象少しも變化がないとの意。例へば日月星辰鳥獸草木等について云へば、常に盈虛あり、盛衰あり、流動、生死等があるも、全體上より大觀する時は皆依然として舊態を改めないが如くである。

三、昔者先王之爲天下。必使天下欣然常有無窮之心。力行不倦而無自棄之意。夫惟自棄之人則其爲惡也。甚毒而不可解。是以聖人畏之。設爲高位重祿以待能者。使天下皆得踴躍自奮板援而來。其才之不逮。力之不足。是以經不能至於其間。而非聖人塞其門絕其塗也。夫然。故一介之賦吏、閭閻之匹夫。無不奔走於善。至於老死而不知休息。此聖人以御驅之也。（唐宋八家文、蘇軾無沮善）

右ハ解釋ヲ要セズ。

四、（イ）尙有綈袍贈。應憐范叔寒。不知天下士。猶作布衣看。（唐詩選、高適詠史）

【解釋】須賈は始め范叔を惡んだが、其の窮困したのを見て綈袍即ち綿入の着物を贈つた。之れは范叔が已に天下の士即ち秦の宰相となつて今を時めいて居ることを知つて贈つたのではない。矢張り以前のやうな一布衣即ちつまらぬ一平民であると思つて、范叔の一寒を憐んでのことである。

（ロ）　客舍併州已十霜。歸心日夜憶咸陽。無端更渡桑乾水。却望併州是故鄉。

（同上・賈島、渡桑乾）

【解　義】　大正十二、第一次、三八回讀參照。

九、昭和二年度（四七回讀）

一、禹・稷當二平世一、三過二其門一而不レ入。孔子賢レ之。顏子當二亂世一、居二於陋巷一、一簞食、一瓢飲、人不レ堪二其憂一、顏子不レ改二其樂一。孔子賢レ之。「孟子曰。禹・稷・顏回同レ道。禹思二天下有一溺者一、由二己溺一レ之也。稷思二天下有一飢者一、由二己飢一レ之也。是以如レ是其急也。禹・稷・顏子、易レ地則皆然。今有二同室之人鬪者一、救レ之、雖二被髮纓冠而救一レ之、可也。鄉鄰有二鬪者一、被髮纓冠往救レ之、則惑也。雖レ閉レ戸、可也」（孟子、離婁下）

右ハ讀方及括弧内ノ文章ノ解釋ヲ記スベシ。

【文章ノ解義】　孟子の云ふに「禹・稷と顏回とは其行つた跡方は全く違つて居るが、其實道に於ては同一である。何故ならば、禹は天下に一人でも溺るゝ者があれば恰も自分が之を溺らすも同樣であると思つてゐたのである。而して稷も亦、天下に一人でも飢える者があれば、恰も自分が之を飢えしめるも同樣であると思つて居たのである。之等は何れも己の職責を十分に盡さうと思へばこそ、この樣に水を治め民を教へることに急であり、家を顧る暇はなかつたのである。然るに顏回に於ては、全くこの樣な責任はない。故に獨りを修めて道を樂しむと云ふことになるのである。されば若し禹・稷をして顏回の地位に居らしめたならば、必ずや顏回と同一の態度に出でたであらうし、反對に顏回をして・禹稷の地位に居らしめたならば、之又必ずや禹・稷と同一の態度に出でたに相違ない。卽ち禹・稷・顏回・地を易へれば皆然りである。尙此の事を分り易くする爲に、一例を擧げると、今こゝに同室の者で互に喧嘩を始めたとせんにこの樣な場合には、たとへ髮を束ねる暇もなく散ばら髮で、其上に冠を戴せ纓を結んだまゝ走り出て仲裁してもよい。之に反して同鄉中で互に喧嘩を始めた場合には、散ばら髮に冠を戴せ纓を結んだまゝ走り出て仲裁したならば、それは其處置を誤つたものである。何故ならば同室と違つて、この樣な場合には、仲裁すべき責任者は他にあるから、自分は戸を閉ぢて引込んでゐてもよいからである。禹・稷が天下を救ふのに急であつたのも、顏回が獨り自ら樂しんで居たのも全く之と同一の關係である」と。

二、隗囂嘗遣二馬援往二成都一、觀二公孫述一。援與レ述舊。謂、嘗二握レ手歡如二平生一。時述已稱レ帝四年矣。援訖至。盛陳二陛衛一以延レ援。援謂二其屬一曰、「天下雌雄未レ定。公孫不二吐レ哺迎一國士一。

反修飾ニ邊幅一。如ニ偶人形一。此何足ニ久稽ニ天下士一乎。」因辭歸。謂レ囂曰、子陽井底蛙耳、而妄自尊大。不レ如ニ專ニ意東方一。（十八史略、光武紀）

右ハ讀方及括弧內ノ文章ノ解釋ヲ記スベシ。

【文章ノ解釋】「天下の雌雄は未だ定らない。それ故天下に名を成さうとするならば豪傑と交りを結び味方に取入れる筈である。而も公孫述は食事中に哺を吐いて國士を迎へると言ふ程の熱心さがない。却つて外面ばかりを飾り立てゝ居る。恰度木偶人形のやうである。こんな事で、どうして久しく天下の英傑を自分の許に留めて置くことが出來やうか出來ないに決まつてゐる」と。

三、雞鳴ニ紫陌一曙光寒。鶯囀ニ皇州一春色闌。金闕曉鐘開ニ萬戶一。王階仙仗擁ニ千官一。花迎ニ劍佩一星初落。柳拂ニ旌旗一露未レ乾。獨有ニ鳳皇池上客一。陽春一曲和皆難。

（唐詩選、岑參、和賈至舍人早朝大明宮之作）

【解釋】雞が紫陌で鳴く頃參內すると東天には曙光も見えず曉氣は身に泌みて寒いことであるが、帝都では鶯が盛に囀つてゐるのを聞くと、春も早や既に酣である。さて宮中の曉鐘が鳴り渡ると、禁裡の千門萬門が一時に開かれる。やがて文武の千官が參朝すると、玉階の兵仗は左右に並んで嚴重に擁護する。又宮殿の花が千官の劍佩を迎へる頃には、天上の星も始めて落つて夜は全く明け放され、青鎖門頭の柳は千官儀衛の旌旗を拂ふが、まだ日の光を受けないことゝて露は乾かずして宿つてゐる。大明宮に於ける早朝の有樣は大體以上の樣であるが、さて鳳凰池上の客である賈至舍人の詩は誠に陽春の一曲にも譬ふべき傑作であるから、到底自分等の如き者の眞似ることが出來ない。

一〇、昭和三年度（四九回豫）

一、子路問レ強。子曰、南方之強與。北方之強與。抑而強與。寬柔以教。不レ報ニ無道一、南方之強也。君子居レ之。衽ニ金革一、死而不レ厭一、北方之強也。而強者居レ之。故君子和而不レ流。強哉矯。中立而不レ倚。強哉矯。國有レ道、不レ變レ塞焉。強哉矯。國無レ道、至レ死不レ變、強哉矯。

（中庸）

【解釋】子路が孔子に強を問ふた。孔子の云ふには、「凡そ強には三種ある。汝の問ふのは、南方の強か、北方の強か、それとも汝が行ふべき強か。寬緩にして柔和、以て人に及ばない者でも教へ導き、道理に反した非禮を仕向ける者があつても仕返しをせず、人の忍び難い所を忍ぶので、之は風俗氣質の柔弱は南方人の強である。寬厚な君子は之を以て己が取るべき強い態度

として居る。金革を枉とし、たとへ戰つて死すとも厭はないのは、人の爲し難いのを爲すもので、之は風俗氣質の剛強な北方人の強である。血氣にほこる勇者は之を以て己が取るべき強い態度としてゐる。此の二つは汝の取るべき強ではない。夫故盛德の君子は、人と相和するけれ共、さりとて其の和に流れて己の節操を失ふ樣なことはない。之れこそ強なるかな眞の強い強である。卓然として中庸の中を守つて立てゐて何れにもかたよらない。之れこそ強として眞の強い強である。國家に道が行はれて、自分が相當の地位に達しても、未だ其志を得なかつた時守つた節操を變じないで、富貴も其初志を變動することの出來ない態度は、これこそ強としての強い眞の強である。國家に道が行はれず、自分も志を得なくて困窮しても、たとひ死に至るも其節操を變じないで、勢威も武力も其節操を屈しない態度こそ、これこそ矯として強い眞の強である。而して以上の四つこそ、汝の當に務むべき強である。

二、微生畝謂二孔子一曰、丘何爲二是栖栖者一與。無乃爲レ佞乎。孔子曰、非二敢爲一レ佞也。疾レ固也。（論語、憲問第十四）

【解　義】微生畝が孔子に云ふには、「丘（孔子の名）よ、お前はどうして諸國の君に未練を殘してゐるのか。卽ちうまいことを言つて人を悅ばせ一道を以て世に用ひられようとするのではないか」と。孔子が答へて云ふには「自分は決してうまいことを言つて人を悅ばせて世に用ひられようとするのではない。一道に凝り固つて融通のきかないのを惡むのである」と。

三、沅湘流不レ盡。屈子怨何深。日暮秋風起。蕭蕭楓樹林。（唐詩選、張叔倫、三閭廟）

【解　義】屈原は高潔の怨みを呑んだ人であるから、その怨みは沅湘の水が流れて、何時迄もつきないが如く、實に深く盡きないであらう。況して夕方日が暮れてあたりがホノ暗い頃、秋風が吹き荒れ蕭前の楓樹林を動かすのを見る時は、如何にも物寂しく感ぜられることである。

四、孝章皇帝、襲二明帝察察之後一、知二人厭一レ苛切一、事從二寬厚一。文レ之以二禮樂一。嘗議二貢舉法一。章彪議曰、國以レ簡レ賢爲レ務、賢以二孝行一爲レ首。求二忠臣一必於二孝子之門一。上然レ之。廬江毛義以二行義一稱。張奉侯レ之。府檄適至。以レ養守二安陽令一。義捧レ檄入。喜動二顏色一。奉心賤レ之。後義母死、徵辟皆不レ至。奉乃歎曰、往日之喜、爲レ親屈也。上下レ詔褒二寵之一。（十八史略、東漢孝章紀）

右讀方ノミ解釋ヲ要セズ。

一一、昭和四度度（五一回生）

一、（イ）子在レ陳曰、歸與歸與。吾黨之小子、狂簡斐然成レ章。不レ知レ所二以裁一レ之。

（論語、公冶長）

【附　録】　孔子が陳に居られた時に云ふには「もう歸らう。もう歸らう。魯に居る我が弟子達は志は大きいが物を粗略にし、美しい錦の樣に色彩や物の觀るべきものがあるが、之を裁つて衣にする術を知らない」と。卽ち彼等は道に進むべき素質は充分に持つて居るが、さて之を裁つて正しく齊へることを知らないから、歸つて之を教育して中正の道に合する樣にしよう」と。

（ロ）　子曰、君子不レ可二小知一而可二大受一也。小人不レ可二大受一而可二小知一也。（同上、衞靈公）

【附　録】　孔子が云ふには「君子は小事をさせては共人物は知ることは出來ないが、大事を任せば之を引受ける力量がある。小人は之と反對で、大事を引受ける事は出來ないが小事をさせると共人物が分かる」と。

二、孟子曰、伯夷、聖之清者也。伊尹聖之任者也。柳下惠、聖之和者也。孔子聖之時者也。孔子之謂二集大成一。集大成者、金聲而玉振レ之也。金聲也者、始二條理一也。玉振レ之也者、終二條理一也。始二條理一者、智之事也。終二條理一者、聖之事也。智譬則巧也。聖譬則力也。由レ射二於百歩之外一也。其中レ非二爾力一也。（孟子、萬章下）

【附　録】　孟子が云ふには「伯夷は衆人中の清める者である。伊尹は聖人の任（天下を治めることを以て己の責任とする意）なる者である。柳下惠は聖人中の和（誰とでも調和してゆく意）なる者である。孔子は聖人中の時（清も任も和も何れも時の宜しきに應じて之を出す意）なる者である。されば孔子は以上三聖人の衆德を一身に集めて大成したものと謂ふべきである。集めて大成すと云ふのは、たとへば音樂で云へば、八音合奏の時、先づ鐘を打鳴らしてそれを合圖に音樂を始め、最後に玉磬を擊つて音樂を終るのである。さて始めて鐘を打鳴らすのは、此の一聲で衆音の條理を始めるのであり、終りに玉磬を擊つて終るのは、衆音の條理を終へ止める譯である。而して條理を始めるのは智のはたらきであり、條理を終へるのは聖の力である。弓術に譬ふれば、智は弓を引く技巧の樣なもので、聖は弓を引く力の樣なものである、卽ち百歩もある遠距離から射るものゝ樣で、其の矢が的にあたるのは全く技術によるので其の者の力に依るのではないのである。

そこで以上三聖人は、何れも其の力に於ては充分的に達することが出來たのであるが、智卽ち技巧に於て幾分足らぬ所があり、從つて何時も的に中るとは限らなかつたのである。然るに孔子は聖、智卽ち力も技巧も充分具つて居たが故に、時に從つて宜しきを得、決して道卽ち的に外れる樣なことはなかつたのである。之れ孔子が集大成と謂はれる所以である。換言すれば

他の三聖人は力が餘つて智が足らないから聖人ではあるが、其徳が清、任、和等の一方に偏してゐる。然るに孔子は力と智とを兼備してゐるので、三聖人の衆徳を一身に集大成した大聖人となつたのである。

三、八年曹彬圍二金陵一急。李煜遣二徐鉉一入貢、求レ緩レ兵、鉉言。煜以レ小事レ大如二子事一レ父。其說累二數百一。上曰、爾謂二父子一爲二兩家一可乎。鉉不レ能レ對還。尋復至、奏言二江南無一レ罪、辭氣益厲。上怒按レ劒曰、不レ須レ多言、江南亦有二何罪一。但天下一家。臥榻之側、豈容二他人鼾睡一乎。鉉惶恐而退。（十八史略、宋太祖紀）

【解　義】開寶八年に、曹彬が金陵（南京）を圍んで急に攻めた。李煜は徐鉉を使とし、貢を奉つて兵を緩められんことを願つた。鉉が曰ふには「小國の江南が大國の宋に事へるのは、恰度子が父に事へるのと同一で何の過失もない」と。其の辯解の說を滔々と數百言も述べ立てた。帝の云ふには「お前は今父子であると云つたが、父子ならば一家をなすべきであるのに兩家に分れて居るがそれでよいと思ふか」と言つた。鉉は返答に窮して其儘歸つた。然るに又來て、奏上して云ふには「我が江南は罪がないから討伐せられる理由がない」と、其の語氣が益々勵しく銳かつた。そこで帝は怒つて劒を按じて云ふには「多言は無用である。江南の罪の無いことは分つて居る。たゞ天下は一家である可き筈である。一家の中で寢臺の側で大鼾をかいてゐる者をそのまゝ許して置けると思ふか」と言つた。鉉は恐入つて退出してしまつた。

四、（イ）西向二輪臺一萬里餘。也知鄕信日應レ疎。隴山鸚鵡能言語。爲二報家人數々寄レ書。（唐詩選、岑參、赴北庭度　思家）

【解　義】自分は今西の方輪臺に向つて萬里の遠い旅路に赴くのであるが、定めて今後は故鄕からの音信も疎遠になることゝ思ふ。ついては此の隴山には鸚鵡と云ふ鳥が澤山ゐる。鸚鵡は能く物を言ふ鳥であるから、一つお前に賴むが、我が故鄕の家人に度々手紙を呉れる樣に傳へてくれ。

（ロ）霜落荊門江樹空。布帆無レ恙挂二秋風一。此行不レ爲二鱸魚鱠一。自愛二名山一入二剡中一。（同上、李白秋下荊門）

【解　義】荊門江の邊りには秋が酣となり霜が降つて江樹は落葉して物寂しいことである。自分は今秋風に帆をあげて無事に行くのである。併し自分の今度の旅行は彼の昔晉の張翰が鱸魚の鱠を思出して致仕して歸つたのとは違つて、唯だ自ら名山の風景を愛して剡中に入るだけのことである。

第二、昭和五年度（五三回豫）

一、曾子曰、以能問於不能。以多問於寡、有若無、實若虛。犯而不校。昔者吾友嘗從事於斯矣。（論語、泰伯第八）

【解釋】曾子が云ふには「才能があり乍ら、未だ足らないと思つて才能のない者に問ひ、見聞が多いのに、まだ足らないと思つて見聞の少い人に問ひ、道理を悟つてゐ乍ら、何も知らないと思ひ、德が充實してゐ乍ら空虛である樣に思ひ、他人から非道なことをされても彼等の曲直を比べて爭はない。この樣なことは物我の差別を忘れた至德な者でなければ出來ないことであるが、むかし自分の友に此の樣なことを勉めた人があつた」と。

二、孟子曰、不仁者可與言哉。安其危而利其菑、樂其所以亡者。不仁而可與言、則何亡國敗家之有。有孺子歌曰、滄浪之水清兮、可以濯我纓。滄浪之水濁兮、可以濯我足。孔子曰、小子聽之。清斯濯纓。濁斯濯足矣。自取之也。夫人必自侮、然後人侮之、家必自毀、而後人毀之。國必自伐、而後人伐之。太甲曰、天作孽猶可違、自作孽不可活。此之謂也。（孟子、離婁上）

【解釋】孟子が云ふには「不仁の人とは與に善言を語ることが出來ない。何故なれば、不仁者は其心が私慾の念に蔽れて居るから、其の危いのを却つて安いとし、其の菑となるべきことを利として行ひ、結局其の亡ぶる所以のものを樂むからである。されば不仁者でも與に善言を言ふことが出來れば、どうして國を亡ぼし、家を敗ることがあらうか。決してその樣なことはないのである。昔一人の子供があつて歌つて云ふには「滄浪の水が清んだ時には我が冠りの紐を濯ふが、濁つた時には我が足を濯ふ」と。孔子が此を聞いて弟子達に誡めて云ふには「お前達此の歌をよく聞くがよい。「清めば冠の紐を濯はれるが、濁らば足を濯はれる。之は水それ自身の取るのであつて、決して他のせいではないのである」と。凡そ人事上のことも亦かくの如くである。卽ち他人が自分を侮るのも、畢竟自分自らが侮る樣なことをするからであり、他人が自分の家を毀るのも、畢竟自分自らが毀る樣なことをするからであり、他人が自分の國を伐つのも、畢竟自分自らの國を伐つ樣なことをするからである。されば書經の太甲篇にも「天の作せる災害はその方法さへつくせば猶之を免れることが出來るが、自分でなした災害は之をさけて活きることが出來ない」とある。之は全く以上の「自ら取る」ことの意味を述べたものである。

三、唐莊宗皇帝名存勗、沙陀人也。本姓朱邪、先世立功。賜姓李。父克用、有勇略。一目微

眇。號二獨眼龍一。爲レ唐平二黃巢一。立二大功一。王二于晉一。與二朱氏一爲レ仇。暮年頗爲レ所レ蠱。憂形二於色一。存勗幼進言曰。「朱氏窮レ凶極レ暴。人怨神怒。極將斃矣。吾家世襲二忠貞一。大人當三邇養時晦一。以待二其衰一。奈何輕爲二沮衄一。使二天下一失レ望乎。」克用說。臨レ終立爲レ嗣。謂二其下一曰。此子志氣遠大。必能成二吾事一。年十七。嗣二晉王位一。卽擧レ兵破レ梁。解二潞圍一。自レ是連勝。梁祖歎曰。生レ子當レ如二李亞子一。吾兒豚犬耳。（十八史略、五代唐紀）

右讀方及括弧內ノ文ヲ解釋スベシ。

【文ノ解釋】朱氏は凶惡なことを此の上なく行ひ、橫暴を極めて居る。その爲め人は怨んで居り神迄も怒つて居る。今は凶暴の極點であるから早晩斃れるであらう。然るに我が家は代々忠義で貞節を受繼いで來た。父上は時に從つて勢力を養ひ言行をくらまして行つて、そして朱氏の衰ふるのを待たれよ。どうして輕々しく意氣を沮喪せしめて天下の望を失はうてよからうか」と。

四、（イ）三戍二漁陽一。再度レ遼。騁弓在レ臂。箭横レ腰。匈奴似レ欲レ知二名姓一。休レ傍二陰山一。更射レ鵰。（唐詩選、裴伷素塞下曲）

【解　說】三たび漁陽を守り、再び遼河を渡つた經驗のある老將である。その姿を見れば赤ぬりの弓を脇にはさみ、腰には矢を橫へて誠に勇しそうである。それ故匈奴はその老將が誰であるかその姓名を知りたい樣である。併し匈奴にねらはれてはいけないから、陰山のほとりで鵰を射つて遊ぶことをやめよ。

（ロ）燕趙悲歌士。相逢劇孟家。寸心言不レ盡。前路日將レ斜。（同上、錢起、遊俠者）

【解　說】燕國や趙國の慷慨悲憤の者が劇孟と云ふ人の家で一緒になつて、互に自分の抱負を語つて大氣焰を擧げたが、さてその中の一人が云ふには、自分の心はこゝにそれを云ひつくすことが出來ない。何故かと云へば自分は最早や年がよつて餘命いくばくもなく、從て俠者としての力强さを實現することが六ケ敷いからであると。

一三、昭和六年度（五五回生）

一、佛肹召子欲レ往。子路曰。昔者由也聞二諸夫子一。曰。親於二其身一爲二不善一者。君子不レ入也。佛肹以二中牟一畔。子之往也如二之何一。子曰。然。有レ是言一也。不レ曰レ堅乎。磨而不レ磷。不レ曰レ白乎。涅而不レ緇。吾豈匏瓜也哉。焉能繫而不レ食。（論語、陽貨十七）

【解　說】佛肹が孔子を召んだ。孔子は之に應じて往かうとした。子路が之を止めて云ふには、「以前に先生から承りました。それは親ら其身に於て不善を爲す者には、君子は其の仲間に入つ

て汚される様なことはしないものである。佛陀は今中卒に於て呼いて居ます。然るに先生の往かれやうとせられるゝのはどういふわけがらでございますか」と。孔子の答へられるには「その通りである。以前にその様に云つたことがある。しかし諺に「堅いものを云ふではないか。どんなに磨いても磷くならぬ」と。又「白いものを云ふではないか。どんなに涅めても緇くならぬ。修養の十分に積んだ人間も其通りだ、それ故たとへ我れは彼の仲間に入つたとて、決して汚される心配は毛頭ない。その上我れは人であつて匏瓜ではない。どうして匏瓜の様に一處に繋つて人に食はれない様に、世間に無用の長物となつて徒らに日送りをしようか。ひとつ行つて世の用とならうと思ふ」と。

二、孟子曰、孔子登二東山一而小レ魯。登二大山一而小二天下一。故觀二於海一者、難レ爲レ水、遊二於聖人之門一者、難レ爲レ言。觀レ水有レ術必觀二其瀾一。日月有レ明。容光必照焉。流水之爲レ物也。不レ盈レ科不レ行。君子之志二於道一也。不レ成レ章不レ達。（孟子、盡心上）

【解　釋】孟子が云ふには「孔子が東山に登つて、魯の國を小いと云れたが、他日又太山に登つて天下をさへ小いものとされた。之れ高處へ登れば登る程、その見下す所のものが小さく見えるからである。その様なわけで一度海の大を見たものは、池沼河川等天下の他の水は皆小さく見えて、別段水として論ずる價値がなくなるのである。同様に一度聖人の門に遊ぶ者は、揚量等天下の外の言論は皆つまらぬものに見えて、別段言論なりとして云々する價値がなくなるのである。

凡そ水を見るのに方法がある。卽ち其の波瀾の大小を觀て水の大小を知る。之れ水の大なるもの程其の波瀾が大きいからである。それから又、光の明暗を觀るのも同様で、物の隙間から入つて來る光の如何に依て、其の明暗の程度が分かる、之れ日月の如き光の明かなるもの程其の隙間を照す光が明かであるからである。而して君子の道も之れと同一で、其の大なるもの程及ぶ所が大且明で、恰も大水には大波瀾があり、日月の光は如何なる隙間も必ず照すが如きものである。

さて流水の本質は漸次に進んで行つて、穴があればそれを順次に滿して然る後進み行くもので、決して一足飛びに穴を飛びこえて行くものではない。君子が道に志し學問をするのも之と全く同様で、一段々々と德を進めて行つて最後に目的を達する事が出來るもので、決して初めから聖人の大道に飛び入ることの出來るものではないのである。

三、太史公曰、傳曰、其身正不レ令而行、其身不レ正雖レ令不レ從。其李將軍之謂也、余睹二李

將軍悛悛如鄙人。口不能道辭。及死之日天下知與不知、皆爲盡哀。彼其忠實心、誠信於士大夫也。諺曰、桃李不言、下自成蹊。此言雖小可以諭大也。

（史記、李將軍列傳贊）

【解釋】太史公が云ふには「古への傳說に、其の身が正しかつたならば、別段彼是と命令しなくても行はれて行く。其の身が正しくなかつたならば、たとへ命令しても行はれない」と。之れは實に李將軍のことによく當はまる。自分が李將軍を見るのに、其の人物はあわてゝ田舍者の樣であり、言語もろくに云へない。然るに其の死んだ日には、李將軍を知つてゐる人も知らない人も、皆將軍の爲めにひどく哀痛した。之は將軍の忠實心が誠に士大夫に信ぜられてゐたからである。諺に「桃や李は物を言はぬが、花が美しい爲に、人がそれを慕つて其の樹下に自づと小徑が出來る」と。此の言葉は小さいけれ共、之で李將軍の大きな德行に喩へることが出來る。

四、（イ）玉帛朝回望帝鄉。烏孫歸去不稱王、天涯靜處無征戰。兵氣銷爲日月光。

（唐詩選、常建塞下曲）

【解釋】胡國の烏孫王は玉帛（束帛に玉を加へて、贄として君主に渴える時に用ゐる）を奉じて入朝して歸つてからは、帝鄉を望んで臣の禮をとり敢へて王などの稱號を云はない。此の樣に遠い天の涯まで靜かな世となつて征戰と云ふこともなくなり、忌々しい兵氣は全く銷え失せて今や日月の光が遍く四海を照す樣になつた。

（ロ）二十餘年別帝京。重聞天樂不勝情、舊人唯有何戟在。更與殷勤唱渭城。

（同上、劉禹錫與歌者何戡）

【解釋】自分は左遷されて二十年餘りも長い間京師に分れて居たが、今日漸く召し還されて再び宮闕の音樂を聞いたが、昔の事も想ひ出されて實に感慨無量である。當時の知人は或は死亡したり、或は地方に往つたりして居ないが、其の中に唯だ友人の何戡が殘つて居るだけである。君は自分の爲に、懇に渭城の曲を歌つて呉れたが、それこそ二十餘年の昔友人等が自分を送つて呉れた時に歌つて呉れた曲であることを思ふと、一層當時のことが偲ばれてならぬ。

一四、昭和七年度（五七回豫）

一、所謂平天下在治其國者、上老老而民興孝、上長長而民興弟。上恤弧而民不倍。是以君子有絜矩之道也。所惡於上、毋以使下。所惡於下、毋以事上。所惡於前、毋以先後。所惡於後。毋以從前。所惡於右、毋以交於左。所惡於左。毋以

交於右。此之謂絜矩之道。（大學）

【解　釋】所謂天下を平にするは、其の國を治むるにありとは、上にある人君が老者に事ふる道を以て、家にありては老者を尊べば人民も之に倣つて其の父母に孝行をつくす。人君が長者に事ふる道を以て、家にあつて長者を敬へば、人民も亦之を見倣つて其の子弟に弟をつくす。人君が孤兒を憐へば、人民も之を見倣つて重厚にして背かない。そこで君子は己を推して人を度る所即ち絜矩の道といふものがあるのである。

上人君たる者が我を使ふに無禮なことを惡くむならば、必ず之を以て下の心を度つて下を使ふのに敢へて無禮を以て使つてはならぬ。前後左右何れも之と同一である。之を絜矩の道といふ。

二、孟子曰覇者之民、驩虞如也王者之民皞皞如也。殺之而不怨利之而不庸民日遷善而不知爲之者夫君子所過者化所存者神上下與天地同流豈曰少補之哉。（孟子、盡心上）

【解　釋】大正十四年第一次、四二回豫參照。

三、范文正公少有大節。其於富貴・貧賤・毀譽・歡戚、不一動其心。而慨然有志於天下。嘗自誦曰、「士當先天下之憂而憂、後天下之樂而樂也。其事上遇人、一以自信、不擇利害爲趨捨。其有所爲必盡其方曰、爲之自我者、當如是。其成興否。有不在我者、雖聖賢不能必。吾豈苟哉。」（小學、善行第六）

右讀方及括弧內ノ文ノ解釋ヲ記スベシ。

【文ノ解釋】「士と云ふは、天下の人の憂ふべきことを先づ慮つて之を自分の憂として憂ひて此の憂を除くためにつとめ、天下を安んじて天下の人の樂んだ後に始めて自分も樂むべきである。其の上人君に事へて人を待遇するのに、專ら自信の念を以て疑はず、利害をえりわけてその爲に去就をなさず、其の行ふべきものがあれば其の方法をつくして云ふには、之をなすこと自分よりするものは、皆かくの如くしなくてはならぬ。そして其の成ると否とは凡べて天命にあるのであつて我が力の上にはないのである。聖人や賢人でも實力の及ばない所は其の事は成就することが出來ないのである。然らば自分が正しいとすることを粗略にしてよいであらうか」と。

四、昔聞洞庭水今上岳陽吳楚東南折乾坤日夜浮親朋無一字老病有弧舟戎馬關山北憑軒涕洒流。（唐詩選、杜甫、登岳陽樓）

【解　釋】大正一三、第一次、四〇回豫、參照。

第二　國語解釋

（甲）豫備試驗

一、大正十二年度第一次（三八回）

一、左の文を解釋せよ。

一年入道殿（道長）の大井川の遊逓せさせ給ひしに作文の船管絃の船とわかたさせたまひてその道にたへたる人々をのせさせ給ひしに此の大納言殿（公任）のまゐりたまへるを入道殿かの大納言いづれの船にかのらるべきとのたまはすれは和歌の船にのり侍らんとのたまひてよみ給へるぞかし。

をぐら山あらしの風の寒ひければもみちのにしききぬ人ぞなき

申しうけ給へるかたありてあそばしたりな御みづからものたまふなるは作文の船にはのるべかりける。さてかばかりの詩をつくりたまひしかば名のあがらんこともまさりなましくちをしかりけるわざかな。さても殿のいづれにとかおもふとのたまはせしになんわれながらこゝろおごりせられしとのたまふなる一事のすぐるゝだにあるにかくいづれの道にもぬけいで給ひけんは古も侍らぬ事なり。（大鏡）

【解　義】　或年道長公が山城國大井川で舟遊びをなさられた時に、詩を作る船、音樂を奏する船、和歌を作る船と、お分けになつて、其道に堪能な人々をお乘せになられた時に、此の大納言公任の來られたのを御覽になつて、道長公が「あの大納言はどの船にお乘りなさいますか」と仰せられた所、「私は和歌の船に乘りませう」と仰せられて、およみになつたものだと申すことである。その歌の意は

秋も次第に深くなつて肌寒く風が吹くから小倉山に散る紅葉の錦を着ないものはない。之れ吹く風に小倉山の紅葉の散りかゝるのを、秋の肌寒い折りであるから、錦の衣を着るにとりなして、やがて散るさまの美しいのを形容したのである。

和歌の船に乘らうと望まれた甲斐があつて、上手に作られた事である。他人は勿論公任自身も云はるゝには「和歌の船には乘らないで、詩を作る船に乘る筈であつた。そうして小倉山の歌に匹敵するやうな詩を作つたならば名聲の擧がらんことも和歌よりは遙かに立勝ることであつたであらうに、殘念なことをしたことであるわい。併し道長公がどの船にのり給はんと思ふか

と仰せられた時に、「自分ながら得意に思はれてゐた」と云はれた。一つの物事について人に立勝ることさへ稀であるのに、況してこの公任公のやうに萬事について人よりぬけ出でゝ堪能なのは昔にもないことである。

二、左の歌を解釋せよ。

(イ)　まきあぐるしののすだれのさらさらにおもひもかけぬ今朝のはつゆき。(香川景樹)

(ロ)　一人あるたかきを求め走りきぬくみすることの空しきを知り。(與謝野寛)

【解　釋】(イ)　朝起き出でゝ篠竹で作つたスダレを何とも思はずさら〳〵と巻上げた所が、意外にもそこら一面に眞つ白い雪が降つて居た。而もそれは初雪で、こんなに今朝雪が降らうとは少しも思はなかつたのにの意。

(ロ)　どうせそんな人たちの仲間入りをしたとて無益であると知つて、自分一人或る高い望みを求めたいと思つて、こゝへ走つて來たことである。

三、左の文の要旨を記せ。

(勇士)私は人を殺したことは數限ないが、人から傷つけられたことは一度もない。(聖人)私は人から殺されたことはあるが、人を傷つけたことはない。(勇士)あなたはいくじなしだ。(聖人)私は萬人に愛せられた。(勇士)あなたは愛せられて殺されたのか。(聖人)殺されて愛された。(勇士)私に手向ふ者は誰もゐなかつた。(聖人)私に手向ふものは私の精神を世界に輝かした。あなたは手に血をぬらさなければ、あなたを生かすことは出來なかつた。私は手に血をぬらしては自分を生かすことの出來ない人間だつた。(勇士)一體お前と俺とどつちが偉いのだ。一つ勝負しよう。(聖人)私は勝負は嫌ひだ。打ちたければぶつがいゝし、殺したければ殺すがいゝ。(勇士)わしは勇士だ。亂暴者ではない。手向はないものをぶちはしない。おどろかないがいゝ。(聖人)私は少しもおどろかない。(勇士)これでもか。(切る眞似をする)(聖人)おどろかない。殺されるのは殺すのではない。殺すことは恥ぢるが殺されることは恥ぢない。(勇士)お前は可笑しな奴だ。お前のやうな男に逢つたことはない。お前はどうして死がこはくないのだ。(聖人)死はこはくない。天命を知つてゐるものは死を恐れない。來るべき時に來るものを恐れない。(勇士)本當か。(聖人)私は守護してゐるものを知つてゐる。(勇士)それでもお前は殺された人間ぢやないか。俺は何度死にかけたか知れないがそれでも不思議に傷一つうけずに生きた人間だ。(聖人)しかしお前は死んだぢやないか。(勇

士）天壽を保つて病氣で死んだのだ。（聖人）それをあなたは自慢にしてゐるのか。（勇士）だから俺の方が神に守護されてゐる人間だ。（聖人）よろしい。本當のことを見せてあげよ。死神出て來い。（死神）はつ（出て來て聖人の前に跪く）。（聖人）お前はこの方とわしとどつちが本當に強い人間か知つてゐるか。（死神）（勇士を見くだし）お前は俺に手向ふことは出來ても、おれに勝つことは出來ない男ちやないか。お前は俺の手さきにつかはれてゐる時だけ威張れるのちやないか。俺はお前の主人であつてお前は俺の奴隷だ。（勇士）俺はお前の奴隷ぢやない。（死神）それならかうすればどうだ。お前は俺の二本指にも叶はない人間だ。（勇士）この人だつてさうだ。（死神）大ちがひだ。私はこの方にも死んでいたゞく時があるが、その時はかうして俺がこの方の前に跪いて神の御命令でございます。お苦しいでせうが人間のために暫くおしのび下さい。そうしてこの方の足に口づけするのだ。貴樣とはわけがちがふ。貴樣は死んでも後光は出ない。この方が死ぬ時は世界中に光がみちわたる。お前達の目には見えないかもしれないが。（勇士）この方は何とおつしやる方ですか。（死神）何かさゝやく。（勇士おどろいて聖人の前に跪く）。（勇士）あゝ、あなたでしたか。私は何も知りませんでした。私はあなたの爲に働いてゐるつもりでをりました。（聖人）まあ立つがいゝ。私の敎は地上では餘分歪にされてゐると聞いて居る。しかしわかる時はわかると思つてゐた。あなたも誤解してゐた一人だ。私に逢つて私に氣がつかない一人だ。まあ氣にしないがいゝ。しかし人を殺したことを自慢にはしないがいゝ。（勇士）恐れ入りました。（一本の枝）

【解　答】　要旨　聖人と勇士との對話を書いた一種の諷刺文である。即ち勇士はどこまでも徹底的な腕力主義者であり暴力主義者であるに、聖人は之れ又徹底的な無抵抗主義者である。勇士も死神に對し、天命に對しては忽ち屈服してゐるが、聖人の無抵抗主義に對しては流石の死神も全く跪付いて其使に任せてゐる。勇士の猪突的な勇氣はたゞ現實界に於てのみ有効で幽明界に於ては何等の効果もない。然るに聖人は之れと正反對であることを說いて居る。

二、大正十二年第二次（三九回）

一、左の文を解釋せよ。

この花山院は風流者にこそおはしましけれ御所つくらせ給へりしさまなどよ御車やどりにはいたじきを奥は高くはしはさがりて大きなるつま戸をせさせ給へるゆゑは御車の裝束をさながらたてさせ給ひておのづからとみの事のをりにとりあへず戸おしひろがばから〳〵と人の手ふれぬさきにさしいだされんがれうとおもしろく思しめしたる事ぞかし御調度どもなどのけうらさ

こそ之もいはず侍りけれ六宮のたえいり給へりし御誦經にせられたりし御硯の箱見給ひき海賦に蓬萊山手長足長などこがねしてまかせ給へりしこそかばかりの箱のうるしつき蒔繪のさまくちおかれたりしやうなどのいとめでたかりしなり。（大鏡）

【解　釋】　此の花山院はみやびたる物好きの御方でいらせられた。御所を御造り遊ばされたさまなどのおもしろい御考よ。御車を引入れて置く所は、床の板敷の處は、奥の方は高くし前の方を低くして、大きな開戸を御作りになつたわけは、御車に御裝束したまゝ、車宿へお立て遊ばして自然至急のあつた場合に、とりあへず其の開戸を御開きになれば、自然人のふれない前にから〳〵と出てくる樣にせられたのでおもしろい御考である。御道具などの清らかなことは譬へやうもない位である。六宮の御病氣で御氣絶なさつた時、御誦經の布施にせられた御硯箱を拜見致しました。海藻や貝などの模樣に蓬萊山、手長足長を、黄金の泥、箔などを以て蒔繪になさつてあつた。これ程小さい箱の漆の塗り具合でも、箱の蓋と身と合ふ處の上下の付緣でも蒔繪にせられた樣なことなどの實に立派なことであつた。

二、左の批評の要旨を文中の和歌俳句に引當てゝ說明せよ。

春の野に菫つみにとこし我ぞ野をなつかしみ一夜ねにける。（赤人）

かきわけて折れば露こそこぼれけれ淺茅に交る撫子の花。（西行）

山路來て何やらゆかし菫草。（芭蕉）

赤人は自然の素朴な戀人であつて、自然との融合が自らできる。これが平安朝の感傷的な詩人ならば眠り得ないであらう。西行の愛は感傷的であるものを捉へようとするがそれは露のやうにこぼれてしまふ。その露も彼には淚として感じられる。美は彼の心を憬れしめ誘つて行くが、捉へ得るものでなく、いつまでも滿足を與へない。芭蕉の心は西行の抱いてゐた如き感傷的な愛の否定を經てきた。この否定は個物に對する執着の否定であつて、愛そのものを殺したのではない。今彼の心には對象のない曠やかな愛が動いてゐる。彼はもはや菫を摘まうとも、撫子を折らうともせぬ。彼は菫を透して普遍を眺める。そして彼の愛は菫草に一刹那の間依存してゆかしさの漣波を起す。その漣波が俳句の表現である。（文學序說）

【解　答】

赤人の批評　赤人は野をなつかしく思つて一夜ねた。卽ち自然に深く融合した。

西行の批評　西行は感傷的に愛の對象卽ち撫子の花を捉へ樣とするが、それは露の樣にこぼれてしまふ。撫子の花の美は彼の心を憬れしめ誘つて行くけれ共捉へられて露の如くおちる。

恰度涙として感ぜられる。

芭蕉の批評　芭蕉の愛は感傷的な愛の否定を經て居る。愛がないのではない。愛は心の中に燃えてゐる。それは對象のない曠やかな愛である。或る事物を透して普遍を眺める。それが一刹那或る者に依存した時俳句となつて現れて來る。

三、大十正三年度第一次　（四〇回）

一、四月の末つ方より法皇（後宇多）御惱み重くならせ給へば天下のさわぎ思ひやるべし御門もいみじくおぼしなげき御修法どもいとこちたくまた〳〵はじめ加へさせ給へどしるしもなくて日々におもらせ給へば夜晝となくいかに〳〵ととぶらひ奉らせ給ふ若き上達部などは直衣に柏ばさみして夜中曉となく遙けき峨嵯野を寮の御馬にて馳せありき給ふめり今はむげにたのみ少きよし聞こゆれば大覺寺殿へ行幸あり萬の事ども聞こえさせ給ふうへの一つ御腹の二品法親王性圓と聞こゆるをいとかなしきものに思ひ聞こえさせ給ひて此の大覺寺にそこらの御莊御牧などをよせ給ふ法のあるじとしておはしますべくおぼしおきてけりさやうの事など見給へざらむあとうしろめたからぬさまなどぞ聞こえさせ給ひける。（增鏡）

【解　釋】　四月の末頃から後宇多法皇には御病氣が重くおなり遊ばされたから、天下中の者の騷ぐことは想像されるであらう。御醍醐天皇も非常に御歎きなされて御修法なども大變仰山に又々行ひ加へられるが、その効能もなくて一日々々と重くならせられるから、夜となく晝となく「如何ですか、如何ですか」と御見舞申上げる。年の若い殿上人などは直衣に柏挾みをして夜半となく、曉となく、遠い嵯峨野を、馬寮の馬に乘つて馳せ歩くやうである。今は此の上なく賴み少い趣きを奏上するから、主上は大覺寺へ御行幸なさる。法皇は主上に萬のことなどを御話しに相成る。法皇は御醍醐天皇の御同腹の二品法親王性圓と申す方をば、非常に可愛いものに御思召されて、此の大覺寺へ澤山の御莊園や御牧などを御寄附なされる。そして法親王性圓を大覺寺の法主としてあらせられる樣に御定めになつて置かれた。その樣な事など御崩御の後も御氣かゞりでない有樣などを御物語なされた。

二、（イ）　袖にふけさぞな旅ねのゆめもみじ思ふ方より通ふ浦風（和歌所にてをのこども旅の歌つかうまつりしに、藤原定家）

（ロ）　神なびの山をすぎゆく秋なればたつた川にぞぬさはたむくる（神なびの山を過ぎて龍田川を渡りける時に紅葉の流れけるをよめる、清原深養父）

【解　釋】　（イ）　自分の思つてゐる方から吹いて來る浦風よ、せめて袖にでも吹いてくれ。遠い

旅路にゐて思ふ方の事を夢にも見ないで寂しくてたまらないから。

（ロ）神なびの山を通つて行く秋であるから、成程立田川に紅葉が流れて恰度錦の幣を手向けてゐる様である。

四、大正十三年度第二次（四二回）

一、或人いはく人の世にある習憍慢を先としてよく穏便なるは少なしあるひは自由の方にておだやかならすこれは我が涯分をはからすさしもなき身をかた〳〵思ひあげて主をかろしめ傍輩をも下るなり或は偏執の方にてかたくなりこれぬなり或は折節に似ぬをこありこれは内々よくなれにしかばと思ひて晴に出でゝ人をならしもしはうちとけ遊ぶ所に交りて我は未だみだれぬまゝにことうるはしう紐さしかためて人をしらかし其の座をさますなり。

【解　釋】或人が言ふに、人が此の世にある時の習ひとして、おごりたかぶることを第一としてよく穏やかに事をなす者は少い。或は自分の涯分の思ふまゝに振舞うて穏やかでない。これは我が身の程もわきまへず豪くもない身を高く思ひたかぶつて、主人をも輕んじ仲間の者をも見下すのである。或は固意地になつて頑固になる。之は自分の思つたことをよいことゝして他人の云ふことを用ひぬものである。或は今の世にかはつて居る振舞がある。之は昔のことをよいと思つて、今の世に從はないのである。或は其の時節々々に似ない馬鹿がある。之は内輪でよく馴れて親しんで居るからと思つて公けの場所へ出でゝ、人を無遠慮にし、又は打ちとけて遊ぶ所に出でゝ、自分は未だ鹿爪らしく殊更立派に紐などをしつかり結んで居て、折角打解けて居た人達も感情が損ねて興が覺めるのである。

出所　十訓抄第二　憍慢を離るべきこと。

二、（イ）いく世もあらじわが身をなぞもかく蟲のかるもに思ひみだるゝ

（ロ）なげきをばこりのみつみてあしびきの山のかひなくなりぬべらなり

（ハ）過ぎてゆく秋のかたみにさをしかのおのが鳴く音も惜しくやあるらむ

【解　釋】（イ）我が身はいく世迄も生きながらへるとも思はないのに、どうしてまあ此の様にまで心が思ひみだれるのであらうかの意。「蟲のかるもに」は海人の刈る藻の義で思ひみだるゝを云はんがための序である。

（ロ）自分は最早や長い間歎いてゐたが、その歎きは此の様に澤山積つて、結局何の甲斐もない様に思はれる。

「あしびき」は山の枕詞、「山のかひ」は山の峡と甲斐との兩義をかく。

（八）　過ぎ去つて行く秋の形見であるから、自分の鳴く音も鹿に取つては惜しいのであらう。

アンナに鹿になつて行くのは「さをしか」の「さ」は接頭語、牡鹿の義。

五、大正十四年度第一次（問二題）

一、ついでなき事には侍れど物怪と人の申しゝ事どものさせる事なくてやみにしはさきの一條院の御即位の日大極殿の御裝束すとて人々集りたるに高御座のうちに髪つきたるものゝ頭の血うちつきたるを見つけたりけるあさましくいかゞすべきかはとて大入道殿にかゝる事なむ候ふと何がしのぬしゝて申させけるをいと眠たげなる御氣色にもてなさせ給ひて物も仰せられねばもし聞しめさぬにやとて又御氣色給はれどうちねぶらせ給ひてなほ御答へなしいと怪しくさまでおほとのごもり入りたるとは見えさせ給はぬにいかなればかくおはしますぞと思ひてとばかり御前にさぶらふにうち驚かせ給ふさまにて御裝束は果てぬるやと仰せらるゝにきかせ給はぬやうにてあらむと思召しけるにこそと心得て立ちたまひけりげにかばかりの記の御事また今日になりてとまらむも忌々しきにやをらひきかくしてあるべかりける事をこゝろざまなく申すものかなといかに思召しつらむと後にぞかの殿も

いみじく悔やしがり給ひける事なりしかな。（大鏡）

【解　説】　前々のことゝは、別のことではあるが、物怪などと人の申すことなどの、さほど不審のこともなくて濟んだ事は、先きの一條院の御即位禮の日、大極殿の御裝束をすると云つて、人々が集つてゐた時に、天皇の玉座の中に、髪の毛のついたもので、頭に血のついたものを見附け出した。驚きあきれて行事ども、その處置に思ひ煩うて、かほどの事を隱してよいであらうかと、攝政兼家公に「この樣な事がございます」と、何某の主をやつて申させた所、兼家公は非常に眠たげな御樣子に振舞はれて、何とも仰せられないから、何某の主はお眠りになつてゐられて、事の由を御聞きにならないのではないかと思つて、又くりかへして御樣子を御伺ひ申したが、お眠りになつてゐて矢張り御返答がない。誠に不思議で、その樣にまで御寢入りなされてゐられるとも思はれない樣子であるのに、何故にこの樣に眠りたるさまをなされるのであらうかと思つて、少しの間、御前に侍つてゐる中に、ふとお目覺めになつた御樣子で「御殿の御裝束はもう出來上つたか」と仰せられるに、何某の主の思ふには「兼家公の御寢入り遊ばされた御樣子を裝はれたのは、この怪異の事を御聞きにならぬ事にし、知らん顏して大禮を行はせられんとの御思召であつたのであらうと合點して御前を立去つた。まことにこの樣な大切な

御祝事を、又今日になつて停めるは不祥であるので、ソット引きかくして置いてゐてもよいのに、小膳にも告げて來るものであるわい。どんなにか何某の主をば才覚もなく臆病者であるよと、兼家公も思召されたことであらう」と後になつて何某の主も非常に後悔をした。兼家公のこの様な御振舞は當然の事である。その様に御取計ひになつたればこそ、御大體も無事にすんで、別段異狀もなかつたのを見ると、其の御取計らひは却つてよいことで、之に依て物の怪と云つても恐るべきものではないのである。

二、(イ)　水の面におふるさつきの浮草のうきことあれや根を絶えて來ぬ。(友だちの久しうまでござりけるもとによみて遣しける。凡河内躬恒)

(ロ)　春深くたづねいるさの山の端にほの見し雲の色ぞのこれる。(百首の歌奉りし時。藤原良經)

【解　義】(イ)「水の面に生えてゐる五月頃の浮草の様に憂き事があるからして、その浮草の根の無い様に、近頃は去つぱり御出でがない、ちと御出で下さい」との意。

(ロ)　春暁く、いるさの山に奥深く尋ねると、ほるかに見えた花は最早や散果てゝ、たゞ眞の雲だけが山の端にかゝつて居る。「いるさの山」は但馬國にあつて、尋ね入るの「いる」と「いるさの山」の「いる」とにかけた。

六、大正十四年度第二次　(四三圓)

一、およそみめよく品高けれども怪しくいやしきが能あるに立ち並ぶをりはその品そのみめも必ず思ひけたるゝものなりたとへば花のあたりのときは木はうち見るにたとへしなくさめたれども春の日數くれ峯の嵐過ぎたる後に綠ばかり殘りてかりの匂留まらざるが如しされば桃李は一旦の榮華なり松樹は千年の貞木なりといへりいみじくありて身の能なきが一人あるを見るだに能あるを思ひ出づるならひなり況や能に並ぶ折のけじめをやいかに況や同じ様なるが一人は能ありて一人は能なきをや中にも世の中の變り行く様昔よりは次第に衰へもて行くにつけつゝ道々の藝能も又父祖には及び難き習なれば藍よりも青からむことは誠に稀なりといへども形の如くなりとも箕裘の業をつがざらむくちをしかりぬべし。

【解　義】一體顏かたちがよくて人品が高いけれ共、顏かたちが怪しく人品の卑い者が、才能のある人に立ち並ぶ時は、其の人品も顏かたちも必ず引け落されてしまふものである。たとへば花のそばの常綠木は一寸見た時は、たとへ様なく興覺めたものであるが、春の日數がくれ、峯の嵐も吹き過ぎた後に、綠ばかりが殘つてゐて前にあつた美しい匂が留らない様である。それだ

から桃李の花の美しいのは、それは誓しの間の榮花である。然るに松の木は千年立つても少しも緑の色の變らぬ。節操正しい木であると云はれる。貴くあつて身に才能のない人が一人あるのを見出すのさへ才能ある人を思出すといふならひである。況して才能ある人と立ち並ぶ時の差はどれ程であらうか。わけても、同樣な人が一人は才能があつて、一人は才能がない場合はどんなであらうか。中にも世の中の變つて行く有樣は、今は昔より次第に衰へて行くにつけて道々の藝能も又父祖には及ばぬと云ふ習であるから、藍よりも青くならうと云ふことは本當に稀であるとは云ひながら、せめて形の樣にでも父祖の業(箕裘の業)繼がないことは殘念なことである。

出所　十訓抄第十　可庶幾才能藝能事

二、(イ)　すみよしと雲はつぐともながめすなひとわすれ草生ふといふなり。(古今集、壬生忠岑)

(ロ)　あすか川ふちにもならぬわがやどもせにかはりゆくものにぞありける。(同　伊勢)

【解　釋】(イ)　住吉はすみよい所であると海人は云つても、決して長居してはなりませんぞ。何故ならば、彼の住吉には人を忘れると云ふ忘草が生えると人が申しますから。「すみよし」は地名の住吉に「住みよい」ことをかけ、「ひとわすれ草」は人を忘れると忘草とをかけた。

(ロ)　飛鳥川の淵は、よく〳〵瀬に變ると云ふことを聞いてはゐたが、その飛鳥川の淵でもない自分の家は、瀬に變つて行くものであつたわい。殘念なことであるよ。「せにかはりゆく」の「せに」は淵と瀬とをかけた。

七、大十正五年度第一次　(問四問)

一、或人城外やし給へりといへば遠國にはまからず和泉の國にて貫之のぬしの御任に下りて侍りしかありとほしをば思ふべしやはと詠まれたりし族のともにも候ひき雨の降りしさまなど語りしこそふる草子にあるを見れば程へたる心ちし侍るに昔にあひにたるこゝちしてをかしかりしがこの侍もいみじう興じて繁樹が女どもこそ今少しこまやかなることゞもは語られめと言へばわれは京人にても侍らず高き宮仕などもし侍らず若きより此の翁にそひて候ひにしかばはかばかしき事をも見給へぬものをはと應ふればいづれの國人ぞと問ふ陸奥の國安積の沼にぞ侍りしといふいかで京には來しぞと問へばその人とはえ知り奉らず歌よみ給ひし北方おはせし守の任にぞのぼり侍りしといふに中務君にこそと聞くもをかしくなりぬといたきことかな北方をたれとか聞こえしよみ給ひけむ歌は覺ゆやといへばその方に心もえで覺え侍ちすたゞのぼり給ひしに遙坂の關におはしてよみ給へりし歌こそ所々おぼえ侍れとて

都には待つらむものを逢阪の
　　關まで來ぬと告げややらまし

などいとたど〳〵しげに語るさままことに男にたとへしなし。（大鏡）

【解　釋】　或人が繁樹に向つて、あなたは他國へ旅行をなされたことが御座いますかと尋ねた。すると遠國へは參りませんが、和泉の國へは、紀貫之朝臣が國司となつて赴任された時に、又同じ朝臣が紀州から上京の途中「かきくもりあやめもしらぬ大空にありどほしをば思ふべしやは」と詠まれた時の旅のともに參りましたなどゝ云つて、その時雨の降つた有樣など話されたのは、いつか見た古い草子に書いてあるのを見た時は、多くの年月を經た心地がしたのに、今その話を聞いては、その時にあふ樣な心地がして面白かつた。此の侍も種々の話を聞いて興にのつて繁樹の妻などは婦人であるから今少し些細な珍しい事などをも語られるでありませうとそゝのかすと、繁樹の妻の云ふには「私は京生れの者でもなく、又高貴の宮仕へもしないで早くからこの翁の妻となりましたので、確とした事も見聞しません」と答へると、侍の曰く「どこの國の人ですか」と問ふ。「陸奥の國安積の沼です」と答へた。「それではどうして京へ來ましたか」と尋ねると「何の某とその人は知りませんが、歌よみを北の方に持つた國守の任期が終つて歸京せられる時に附いて參りました」といつたので、侍は早くも心の中で「其の歌をよく詠み給ふ北の方と云ふのは中務の君だらう」と思ふにつけても、何か面白き歌ばなしでもあらんかと何となく面白くなつた。「甚だ面白い話でございますな。さて其の歌を詠むと云ふ北の方の名は何と申されましたか、また詠まれた歌は覺えてゐられますか」と尋ねると「私はその樣な歌などの方には心得のないものですから覺えてゐませんが、たゞ京へ上る途中、蓬坂の關で詠まれた歌ばかりは所々覺えて居ます」と云つて、次の歌を歌つた。その歌は

「都の方では自分の歸るのを待つてゐる人もあるであらうものを、さればその人に自分が今この蓬阪の關まで來たと云ふ事を知らせてやりたいものだ、さうすれば屹度喜んで迎へに來るであらう」

と云ふ歌をよくも覺えず不十分に迫るやうにして話をする樣は、實に翁たちのよく物語るのに比べて、たとへ樣なくあはれであつた。

二、（イ）　ひさかたのなかに生ひたる里なれば光をのみぞ頼むべくなる。
（ロ）　松もひき若葉もつまずなりぬるをいつしかさくらはやも咲かなむ。
（ハ）　もしほくむ袖の月影おのづからよそにあかさぬ須磨の浦人。

【解　釋】（イ）此の里は、月の中に生えてゐる桂の里であるから、月の光だけを只管に頼むべきであつたのにと云ふ意で、自分は中宮様の御内にゐたもの故、中宮様をのみ只管お頼りにせうと云ふ意を述べたものである。「ひさかた」は月又は天の枕詞。

（ロ）松も引いたり、若葉も摘まない様になつたのに、いつの間にか早や櫻も咲くであらう。「ア、早く咲いてくればよいのに」の餘意がある。

（ハ）藻鹽汲む須磨の浦人は、袖が海水にぬれてゐるから自然と月が袖に宿る。それだから須磨の浦人は月をよそにしては暮さず。何時も月と一緒に暮してゐる。

八、大正十五年度第二次（四五回）

一、年のはに一とせうち月ごとに上の弓張より居まちの頃まで空はれぬれば夜ごとに心を業ましめ目を悦ばしむる事さらに數なしことさら三秋の間折々のいみじき光を年ごとに心にまかせて見る事まことに幸おほき此世なりおよそ天が下の君はやすみをしろしめして天地はみな其の領し給へる國の内なれど賤しきわが身まで天つみ空に唯ひとつかゝれる月を己がものとして恣にあふぎ見るもいとをかしく身にし餘りていみじき幸なり宿わかず賤しき巷をも同じく照せるいとめでたし年々に月と花とをあくまで見るはまことに思出おほき此世なりと云ふべしあたら夜の月なれば同じくは心知られんと共に見んこそ本意なれ李白は今人は古人の月を見ずといへどもむかし世々の人の眺め來しも此月なれば古人のかたみとなれるも昔おぼへて忍ばし古今の人の世をさり行くは流水の行きてかへらざるが如し唯月の光のみ古今かはることなきこそよなうめでたく貴ぶべけれ月の梧桐の上にいたり鳳の楊柳の邊に來るは心を洗ひ興をもよほしてえもいはぬ快き折ふしなり四時ともに思出おほき此世なれ取りわき秋の月は見ざらゝむ後の世の光までも思ひやられ侍る。

【解　釋】年毎に一年の中、月毎に上弦の月から十八日の頃迄、空が晴れたならば、夜毎に心を業ませ、目を悦ばせることは數限りなく多い。わけても秋三ケ月の間、折々の美しい光を、年毎に心のまゝに見る事の出來るのは誠に仕合せの多い此の世である。一體天下の君は八隅即ち四方八方を平かに治めて、天地は皆其領有せられる國の内であるけれ共、賤しい我等まで天の空に唯だ一つ懸つてゐる月を自分のものとして、思ふがまゝに仰ぎ見るも大變捉れ多く、身に餘つて非常に仕合である。家などの區別も分たず、賤しい巷までも同じ様に照せるのは非常に結構なことである。年々に月と花とを飽くまで見るのは、本當に思出での多い此の世であると云つてよい。惜しい夜の月であるから、同じいことなら心を知り合つに友と共に月を眺めるの

が本意であるのに、それが出來ないのは惜しいことである。李白は今人は古時の月を見ないと言つたけれども、昔し昔々の人々の眺めて來たのも此の月であるから、古人の思出での種となつてゐるのも昔の事が思はれて忍ばれる。古今の人の世を去つて行くことは、恰度流れてゐる水の過ぎ去つてかへらないやうである。然るにたゞ月の光だけは、古今かはることのないのは此の上なく結構なことで貴いことである。月が青桐の上に照り、鳳が楊柳の邊に來るのは、心を洗ひ興味を催して、何とも言はれぬ快よい季節である。春夏秋冬ともに思出での多い此の世ではあるが、中でも秋の月は見ないであらう。後の世の光までも思ひやられるのである。

二、（イ）枕とていづれの草にちぎるらむ行くをかぎりの野べの夕ぐれ。

（ロ）み吉野の彼方のあらましもかゝる憂世はかひなかりけり。

【解　釋】（イ）吾が枕にと云つて、今夜はどこの草に契るであらうか、こうして旅から旅へと行かれるだけ行つて旅寢をする我が身は、野邊に日も夕ぐれとなつたが。

（ロ）吉野山のズット向うの方に自分はありたいものであるわい。此の様な憂き世ではとても生きてゐる甲斐がないから。

九、明和二年度（西七篇）

一、やよひの十日あまりの頃同じ心なる友だちあまたいざなひて初瀬に詣りしついでによきたよりに寺めぐりせむとて大和のかたに旅ありき日ごろするに路遠くて日もあつければ木陰に立ちよりて休むとて群れゐる程にみづはさしたる女の杖にかゝりたるがめのわらはの花がたみにわらび折りいれてひちにかけたるひとり具してその木の下にいたりぬ遠き程にはあらねど苦しく成りて侍ればおはしあへる所はゞかしけれど都のかたよりものし給ふにやむかしも戀しければしばしもなづさひたてまつらむといふけしきもロすげみわななくやうなれども年よりたる程よりも昔おぼえてにくげもせず此のわたりにおはするにやなど問へばもとは都に百とせあまり侍りてその後山城の狛のわたりにいそちばかり侍りきて後ぞもひもかけぬ草のゆかりに春の野のわたりに住み侍るなりすみかのとなりかくなりし侍るもあはれにといふに年のつもり聞くほどに皆驚きてあさましくなりぬ。

【解　釋】　春暖三月の十日過ぎの頃、親しい友だちを澤山誘ひ合はして初瀬に詣つたついでに、よい機會にお寺めぐりをせうと云ふので、大和の方へ幾日か旅行をしてゐる中に、今日は豫定の路も遠く日もあつかつたから木蔭に立寄つて休むと云ふので、集つてゐる程に大變年のよつた女が杖によりかゝつて、女の子供の花籠に蕨を折入れて居に懸けたのを一人つれて皆の休ん

でゐる木の下へ來た。その人の云ふには「私はさほど遠方では御座いませんが、疲れて苦しくなつて來ましたので皆さんのお集りの所は恐れ多う御座いますけれども、京の方から御出でなさつたので御座いますか、京と申すと、若い時の事が思ひ出されて昔がなつかしう御座いますから、暫くの間でも御休息の御仲間入をさせて戴きます」と云ふ樣子を見ると、齒もぬけてまばらになり、髮もふるふやうではあるが、年がふけてゐる割合よりは、どこかに昔の樣子も見えて普通の老人の樣に憎氣もしない。「アナタは此の附近で御座いますか」などと尋ねると「最初には京都に百年餘り居りまして、その後山城の狛のあたりに五十年ばかり居りました。さてその後は、意外にも一寸した緣で大和の國の春日野のあたりに住んで居ります。この樣に私の住家は色々と移り變りました。面白いことで御座います」と、百何十年と云ふ年の數を聞いて皆びつくりしてあきれてしまつたのである。

二、(イ)　うき世には門させりとも見えなくになどわが身のいでがてにする。(つかさとけて侍りける時よみける)

(ロ)　山里の雪のまがきのへたてずばをちかた人のそでもみてまし。

【解　義】(イ)　自分は今つかさはとけて役所にこそは出てゐないが、未だ浮世には門を閉ちてはゐないつもりでをるのに、まあどうして世間は自分の出家遁世することをしにくくさうにすることであらうかの意で、妻子などの繋絆のために世を捨て棄ねる心境を率直に詠んだものである。

(ロ)　自分の住む山里には雪が一面に立籠めて向うが見えない。アヽあの雪のかきがなくて兩方を隔てないならば、遠方にゐて自分のために別れを惜しんで振つてゐる人の袖も見たいものを、さてヽ見られないのが殘念なことであるよの意。

出所　(イ)古今集、雜八下、平貞文　拾遺集、卷第八雜上。(ロ)古今集、雜八上。

一〇、昭和三年度　(四九回)

一、法皇(後白河)は城南の離宮にして多も半過ごさせたまへば射山の嵐の音のみはげしくて寒庭の月ぞさやけき庭には雪降り積れども跡踏みつくる人もなく池にはつらヽとち重ねてゐれども鳥も見えざりけり大寺の鐘の聲遺愛寺の閒を驚し西山の雪の色香爐峯の望を催す夜霜に寒けき砧のひゞきかすかに御枕につたひ曉氷をきしる車の跡遙の門前に橫はれり巷を過ぐる行人征馬の忙がはしげなるけしきうき世をわたる有樣もおぼしめし知られてあはれなり宮門を守る蠻夷の夜警警衞をつとむるも前の世のいかなる契にて今緣を結ぶらむと仰せなりけるぞかたじけな

きおよそものに慣れ事に随つて御心を傷ましめずといふことなし。

【解　義】後白河法皇は、城南の離宮即ち鳥羽殿で、冬も半分以上お過しなさると、野山の嵐の音ばかり烈しく、凍つた庭には月の光が冴え渡る。庭には雪ばかりが降積るが、雪を踏みつけて訪ねる人もない。池にはつらゝが閉ぢ積つて、かつては集つてゐた鳥も見えない様である。大寺の鐘の聲は、白樂天の詠んだ、遺愛寺のそれかと思はれ、西山の雪景色ば香爐峯を偲ばせる。夜は霜の結ぶ頃、更に寒さを思はせる砧の響が、幽かに御枕邊に聞え、朝は氷の上をきしる車の跡が、遥に門前に横つてゐる。巷を行き過ぐる人や、旅立つ馬のいそがしさうな様子など、浮世を渡る辛い生活の有様もお偲りになつて哀れである。御門を守る卑しい武士が、夜となく晝となく、警護に勤めてゐるのも前世でどんな約束で今縁を結ぶのだらうと仰せられたのも勿體ない。このやうに何事につけても大御心を傷められないことはない。

出所　平家物語　卷三　城南離宮

二、（イ）われを君なにはのうらにありしかばうきめをみづのあまとなりにき。

（ロ）このせにも沈むときけば淚川ながれしよりもぬるゝ袖かな。（遠き國に侍りける時おなじさまなるものどもことなりてのぼるときこえける時このうちにもれにけりと聞きて

都の人に遣はしける）

【解　義】（イ）あなたは私を何のお前をと、有るかないかに冷遇されましたから、私は大變つらい目を見て、とうゝ〳〵難波の三津寺の尼となつてしまひました。

○なには　難波に何を、○うきめ　憂目に浮海布を、○みつ　見つに三津を、○あま　海人に尼を各々かけた。

（ロ）此の度、外の人が都へ上るのに私だけが漏れて獨り此地に留まればならぬと聞いたので以前に流された時にも増して悲しんで泣いたので、袖がぬれることでございますよ。

○せ、淵む、ながれ、は何れも川の緣語である。

一一、昭和圖年度（五〇回）

一、大將殿法師（西行）を見おこせ給ひて昔は薪姑射の山の御宮づかへせし人の世を儚なきものに思ひしみて身を黒くやつしたれど月花の歎のほまれは物の心なき吾妻人さへ聞き知りたるぞ文學の數だに歌とのみ思ひしもかうさし向ひては武士の負けじ心もあらずなりぬるぞ八百日ゆく濱の眞砂の中には玉とて拾ひ收めたらむかたりて聞ゆべく仰たうぶいみじくかしこまりて思がけず大樹の御蔭に參り侍ればいとゞやかしきにそたゞ夢路たどるやうに侍りて聞え奉るべ

きことも侍らずさとき御まなこに見現はされ侍るこそいとゝもありがたけれ伊勢の海ちひろの濱におり立ちならひ侍れどかひあることゝもうち出で侍らぬにはこれとて捧げ奉るべくもあらず君にもかねて挙ばせ給ふと漏り聞き奉る天の下まつりごち給ふ御うつはものゝ大いなるにおぼしよらせ給ふにはかけても及ぶまじきをさへ思ひ知り侍る大空に羽うちつけて飛ぶたづの聲霜枯の淺茅かもとの蟲のいかで敢なめて聞ゆべきあなかしこしと申す。

【解　釋】大將殿はこちらを見おこしなされて、「昔は仙洞御所に御宮仕へした人の、世の中をつまらぬ物と深く思ひしみなされて、身は黒く墨染の衣にやつしてゐるけれども、月に花に詠じた歌の譽は、物の情合もわからぬ關東の田舍者までも聞いて知つて居るぞ、自分も三十一と云ふ詞の數だけ並べて、それを一概に歌とばかり思つて居たが、斯う向ひ合つては武士のまけじ心もすつかりなくなつて了つたぞ。長い〳〵旅の中には、色々感興を詠じた歌もあらう。それを語り申すがよい」といふことの仰せを賜つた。

西行は仰せを承り畏つて云ふには「今日思ひもよらず將軍樣の御前に參りまして誠にお耻かしうて唯だ夢路を辿つて居ります樣で申上げる事も御座いません。御英敏な御目にとまつて私が見あらはせられましたのはありがたいことで御座います。廣い日本國中をあちらこちら歩き

遍つては居りますが、詠み甲斐ある樣な歌も詠んでゐませんので、別段之と申して差上げる樣な歌も持合せてゐません。さて將軍樣に於かれましても以前から歌をお作りになつてゐられること漏れ承つてます。そうして天下の政治をなさいます御人物の偉大な御心でお感じになることをお詠み遊ばされる御歌に對してどうして私如きものが及ぶことが出來やうかと思つてゐます。「大空に翅うちつけて飛ぶたづの聲」と云ふお歌と、「霜枯れ淺茅がもとの虫の音」と云ふ私の歌とは、どうして取並べて申上げられませう。ア、長多いことであるわい」と申した。

出所　藤葉冊子、銀の猫

二、(イ)　月すめばよものうき雲空に消えてみ山がくれをゆくあらしかな。(新古今集)

(ロ)　大原やせがゐの水のにごりなき心をくまぬかみはあらじな。(神樂、柿園詠草)

【解　釋】(イ)　月が愈々澄みわたると、四方にむらがつてゐた浮雲が、大空の中に、いづことなく消えて行つて、山々の木立の中を、嵐がゴーゴーと吹いて行く。さながら實況に臨んでゐるやうは感じがする。

(ロ)　大原にあるせがひの水のやうに、きれいに澄み切つてゐる清い心を御嘉納して下さらない神樣がないであらうか、決してない。

○大原やせがゐの水の　はにごりなきの序。○汲む　は水の縁語。

一二、昭和五年度（五三回）

一、朱雀院も優におはしますとこそはいはれさせ給ひしかども將門が亂など出できて恐れ過ぐさせおはしましゝ程にやがてかはらせたまひにしぞかしその程の事こそいと怪しう侍りけれ母后の御もとに行幸せさせたまへりしをかゝる有樣の思ふやうにめでたく嬉しき事など奏せさせたまひて今は東宮ぞかくて見聞えまはしきと申させたまひけるを心もとなくいそぎ思召す事にこそありけれとて程もなく讓り聞えさせ給ひけるに后宮はさも思ひても申さゞりし事をたゞたゞ末の事をこそ思ひしかとていみじく歎かせたまひけりさておりさせ給ひて後人々の歎きけるを御覽じて院より后宮に聞えさせたまへりし圖讖の日

　日の光いでそふ今日のしぐるゝはいづれの方の山邊なるなむ

后宮の御かへし

　白雲のおりゐる方やしぐるらむおなじみ山のゆかりながらに

などぞ聞え侍りし。

【解　義】　朱雀院もやさしい御門であると、人に云はれられたのに、平將門の亂などが出て來て恐れ過ぐさせおはしましゝ程にやがてかはらせたまひにしぞかしその程の事こそいと怪しう侍りけれ母后の御もとに行幸せさせたまへりしをかゝる有樣の思ふやうにめでたく嬉しき事など奏せさせたまひて今は東宮ぞかくて見聞えまはしきと申させたまひけるを心もとなくいそぎ思召す事にこそありけれとて程もなく讓り聞えさせ給ひけるに后宮はさも思ひても申さゞりし事をたゞたゞ末の事をこそ思ひしかとていみじく歎かせたまひけりさておりさせ給ひて後人々の歎きけるを御覽じて院より后宮に聞えさせたまへりし圖讖の日

　日の光いでそふ今日のしぐるゝはいづれの方の山邊なるなむ

后宮の御かへし

　白雲のおりゐる方やしぐるらむおなじみ山のゆかりながらに

などぞ聞え侍りし。

恐れ憚んで過ぐされて御出になつてゐられたが、間もなく御位を東宮に讓られたと申します。そしてその御讓位の時のことは誠に不思議であつた。御母后が、その有樣を御覽になつて、自分の思ふまゝになつてめでたく嬉しいことであるなどゝ樂し給ひて、今は又東宮をも、この樣に十善の君となして見奉りたいと申上げたのを、天皇は御母后のしか申された御心をとりたがへて、東宮の天位にのぼり給はんことを待遠うに思ひ給はれて、我に位を下りよと御催促せられるのだと御合點遊ばされて、程なく御位を讓り給ふたのであるが、御后宮は之を御聞きになつて、我はその樣には思ふては申さなかつたのに、たゞ〳〵行末に東宮もかくてゐはしまさんを見奉りたいと後々の事を申上げたのであると仰せられて非常に御歎きになつた。さて朱雀院は天皇の御位を下りさせ給ひて後、人々の歎いたのを御覽じて、朱雀院より御母后のもとへ左の歌を申上げた。その歌は

「東宮が新しく皇位にお即きになつて、日の光りも今一層照りまさりたる今日であるに、時雨のするのは、一體どこの山邊の日の光が至らないのであらうか」と。

之に對して、御母后の御返事は左の如き歌であつた。

「何處の山邊も、日の光は同じけれども、白雲のおりゐて日の光をかくしてゐる方が、時雨

ゝのであらうと、新帝の御後盾の光は至らぬくまもなく同じけれども、院の御方の人々ばかりが蔓りがちに打沈んで歎くのであらう」

などゝ申上げた。

●出所●　大鏡　古物語

二、(イ)　こりすまに又もなき名は立ちぬべし人にくからぬよにしすまへば。(古今和歌集)

(ロ)　燈火の夜をかぞへて少女子が明日のよきさがうらへつるかな。(詞藻集)

【解　釋】(イ)　以前にないことを世人から彼之と云ひ立てられてアノ人と一時疎々しくして居たが、どうしてもアノ人を憎めない。此の世に住んでゐる以上、又もや私の心が動いて、そして以前の噂さに懲りもしないで、又々アノ人と親しくして無い名が立ちそうである。

(ロ)　更けて行く夜、而も深窓の下に座す花耻しい少女が燈火に咲く花卽ち丁子頭を數へて、明日は屹度よい事があるに相違ないと獨り頬笑み乍ら、明日の祥運をうらなつたことであるよ。少女の面影が眼前に見える樣である。●

一三、昭和六年度　(五五回)

一、さる程に先帝は出雲の三尾の湊に十餘日御逗留あつて順風になりにければ船人讌を解いて御

讌して兵船三百餘艘前後左右に漕ぎ並べて萬里の雲に浙る時に滄海沈々として日西北の浪に浚し雲山遐々として月東南の天に出づれば漁船の歸る程見えて一燈柳岸に幽なり暮るれば蘆岸の煙に船を繋ぎ明くれば松江の風に帆を揚げ浪路に日數を重ぬれば都を御出であつて後二十六日と申すに御船隱岐の國に著きにけり佐々木隱岐判官貞清國府の島と云ふ所に黒木の御所を作つて皇居とす玉扆に咫尺して召し仕はれける人とては六條少將忠顯頭大夫行房女房には三位殿の御局ばかりなり昔の玉樓金殿に引き替へて憂き節茂き竹條涙隙なき松の壇一夜を隔つる程も堪へ忍ぶべき御心地ならず雞人讌を唱ふる聲普固の武士のとのゐを催す聲ばかり御枕の上に近ければ夜のおとゝに入らせたまひても露まどろませたまはず萩の戸の明くるを待ちし朝政なけれども曉ごとの御勤北辰の御拜も忘らず今年いかなる年なれば百官罪無うして愁の涙を配所の月に滴らし一人位を易へて宸襟を他鄕の風に惱ましたまふらむ天地開闢より以來斯る不思議を聞かすされば天にかゝる日月も誰のために明らかなる事を耻ぢざらむ心なき草木もこれを悲しみ花開く事を忘れつべし。

【解　釋】　そのうちに先帝後醍醐天皇は、出雲の國三尾の湊に十日餘り御逗留遊ばされて、順風になつたから船頭は纜を解いて御船御出發の用意をして、軍船三百餘艘を御船の前後左右に漕

ぎ並べて、遠い萬里もある心地がする雲と天と接觸した所へと進んで行く。その時は廣々とした大海原はシンとして靜まりかへり、日は西北の浪の間に隱れ、雲か山か遙かにかすむあたり月は今しも東南の天に出ると、漁船の港に歸るのも見えて、一つの燈火が柳の生えてゐる岸に幽かに見える。日が暮れると又蘆の生えてゐる岸邊に御船を繫ぎ、夜が明けると松の生えてゐる入江の風に帆を揚げ、波の上で日數を重ねたので京都を御出發になつてから二十六日目にして御船は隱岐の國に到着した。佐々木判官貞清が國府の島と云ふ所に、質素な丸木のまゝの御所を造つて皇居とした。御座所近く召使仕れる人と云つては、六條少將忠顯、藏人頭大夫行房女官では三位の局だけである。昔の九重の奥深く御立派な玉の高樓、黄金の御殿に變つて、辛い事の多い竹の椽（節は竹の緣語）それを見て涙隙きなく落ちる松の墻、さういふ粗末な御住居で、一夜を凌ぐ間でさへ、堪へ忍ばれそうな御心でない。曉を報ずる官人が合圖の聲や、警固の武士の宿直を促す聲だけが、御枕邊に近く聞えて、御寢室に入らせられても、少しも御眠り遊ばせられない。以前のやうに清涼殿の萩の戸の開いて、夜の早く明けるのを待つて御勤みになつた朝政はないけれ共、曉毎に石灰の壇上で伊勢皇太神宮へ向つての御勤行は勿論、北極星を拜ませられることもお怠りにならない。あゝ今年は一體どういふ惡い年であるのか、多くの官吏は罪もないのに配所の月を眺めて悲歎の涙を流し、長くも一天萬乘の天子樣は御位を退かれて大御心を他鄕の風に惱まし給ふのであらう。天地が開けて此の方、この樣な不思議なことは聞かない。それ故、天にある日や月も、誰の爲めに其の明らかな光を輝やかすことを恥ぢないであらうか。それから又心のない草木も之を悲しんで花を開くことも忘れてしまふであらう。

出所　太平記卷四

二、（イ）故里へ歸らむことは飛鳥川渡らぬさきに淵瀨たがふな。（初瀨に詣でゝ歸さに飛鳥のほとりにやどりて侍りける夜よみ侍りける。（新古今集）

（ロ）河橋をひきしは遠き昔にて騷がぬ水を汲む世なりけり。（字治川の水を汲むといふことを）（千々廼屋集）

【解　釋】（イ）故鄕へ歸るのは愈々明日である。さて昔から飛鳥川の淵瀨はよく變るといふが如く、今夜中にどんな變事があるかも知れない。ついては自分が明日飛鳥川を渡つて故鄕へ歸る以前に變事がない樣に祈る。此の歌は古今集雜の『世の中は何が常なる飛鳥川、きのふの淵ぞけふは瀨になる』と云ふ古歌を心の中に思ひ浮べて詠んだものである。「飛鳥川」に明日を云ひかけてゐる。

（ロ）宇治川の橋を引いて源平互に鎬を削つて戰つたのは遠い日のことで、今は天下泰平、宇治川の波も騒がず、人々其業に安んじて御惠みの水でも飲んで世を過ごすとは誠に有難いことである。此の歌は平家物語卷四、橋合戰の條に、先陣が「橋を引いたるぞ、あやまちすな、橋を引いたるぞ、あやまちすな」とあるを思ひ浮べて、昔の亂世に比べて現世の泰平を謳歌したものである。

一四、昭和七年度（五七回）

一、秋の日數も殘りすくなうなり侍りにたるを都のすまひよ如何にあかしくらしたまふぞ此の遠のみかどは大方に山いと遙かに靄霧の心おそきならひに侍れば立田姫のすさみもはかばかしうも侍らすなむさるは都の空のみゆかしう思ひやられ侍るが中に況して塵に染みたまはぬあたりは何の山里くれの古寺御心ゆくかたぞ多かりなむ。

都人何れの山のにしきをかこと葉の色にたぐへて見る。

此の頃は御手染のめづらかならむこそ多からめ風のたよりをわすれたまはでしめしたまはゞ下照るかげに伴はれ侍らむこゝちせむは嬉しきわざなるべしあなかしこ立つ霧にな隔てたまひそや。（伴蒿蹊におくる。村田春海）

【解　釋】秋の日數もだいぶんたつて後に殘すところも少くなりましたのに、都に住んでゐられるあなたさまには今日此頃どんなにせられて御暮し遊ばされていらつしやいますか。御尋ね申上げます。私の住んで居ります此の江戸は、大抵は違つて遲い例でございますから、風の吹き荒れることもはかばかしうも御座いません。それについても都の方ばかりがたゞ何となくなつかしいやうに思はれますが、中にも俗世界を離れたあなたの御邊は、何の山里、何の古寺などと申して、御心のゆく所が澤山ございませう。

「都の人たちは此の秋に一體どこの山のもみぢ葉を眺めて、それを材料として歌や詩を作つてゐられるであらうか。さて〳〵羨しいものである」

ついては此の頃は御創作のお珍しものが澤山御座いませうが、どうぞよいお序が御座いますれば、御忘れにならないで御見せ下さいませ、そう致しますと、私もあなたの御立派な御創作を拜見して、あなたと同じ樣な心地が致しますれば誠に嬉しいことでございます。左樣なら。どうぞお心安く御願ひ申上げます

○遠のみかど　遠い所にある政を行ふ役所、こゝでは作者の居る江戸を指す。○霧霧　うすい霧の裝。○立田姫　大和國平群郡に鎭座せる秋の女神。○其の外、本文には「御手染」、「下

照かげ」、「立つ霧にな隔つ」等の句が澤山あるが、凡べて通釋の樣に解して置いた。

二、（イ）山里に契りし庵や荒れぬらむ待たれむとだに思はざりしを。（和歌所に述懷の心を、前大僧正慈圓）

（ロ）夏の夜の月の霜にも撓むらむまだうらわかき竇のなよ竹。（竹亭夏月、橘手蔭）

【解　釋】（イ）自分がズツト以前に山里に作つておいた庵も、年月のふるまゝに定めし大變荒れてゐるであらう。勿論自分はその庵が自分を待つてゐるであらうとは思はないが。すぐにも往くつもりであつたものをの意。契りし待たれるは、すべて、庵を人に擬へた語である。

（ロ）今夜は如何にもよく月の冴えてゐる夜である。それではアノ窓ぎはに植ゑてあるまだ若いなよ竹は、撓むであらうに、さて〳〵可愛いそうなことであるよの餘意がある。

（乙）本　試　驗

一、大正十二年度第一次（三八回）

一、職におはしますころ八月十日あまりの月あかき夜右近の內侍に琵琶彈かせて端近くおはしますこれかれ物言ひ笑ひなどするに廂の柱によりかかりて物もいはでさぶらへばなどかう音もせぬものいへさうざうしきとおぼせらるればたゞ秋の月のこころを見侍るなりと申せばさもいひつべしとおほせらる御方方君たちうへ人など御前に人いと多くさぶらうへば女房とものがたりして居たるに物を投げてたまはせたるあけてみれば思ふべしや否や第一ならずばいかがと書かせたまへり御前にて物語などするついでにもすべて人には一に思はれず更に何にかせむたゞいみじう憎まれあしうせられてあらむ二三にては死ぬともあらじ一にてをあらむなどいへば一乘の法なりと人々笑ふことのすぢめなめり筆紙たまはりたれば九品蓮臺の中には下品といふともと書きてまゐらせたればむげに思ひくんじにけりといとわろしいひそめつることはさてこそあらめとのたまはすれば人にしたがひてこそと申すこれがわろきぞかし第一の人にまた一におもはれむとこそ思はめとおほせらるもいとをかし。（枕草子）

【解　釋】中宮が職に居られた頃、八月十四日餘りの月の輝いてゐる夜に、右近の內侍に琵琶を彈かせて端近く居られた。色々と物を言つたり笑つたりなどしてゐる中に、私は廂の柱によりかかつて物も言はないで待つてゐると、「何故そんなに音もしないのか、少しは物を言へ、淋しいから」と仰せられたので、「たゞ秋の月の心を見て居ります」と申上げると、「それもよからう」と仰せられた。中宮の御妹の方々、御兄弟の若殿、殿上人などが中宮の御前に大勢御出でになるので、自分は廂の柱によりかゝつて、他の女房と話をしてゐると、中宮が何か物を投げて下つた。開

いて見ると「可愛がつてやらうか。どうか。第一番に可愛がらないならばどうか」と。お書きになつてある。之は自分が御前などで話をする序でにも「凡そ人には第一番に可愛がられないならば、たとへ可愛がられても何にしよう。その位なら、ひどく憎まれ悪しくあひしらつてゐやう。三番目、二番目などでは死んでも可愛がられまい。第一番に可愛がられやう」などと云ふと、他の女房達が「それでは一乘の法である」と笑ふ事の筋を思召されて仰せられるのであらう。筆と紙とを下つたから「九品蓮臺に生れるならば、たとへ下品でも結構です」と書いて差上げた所が「ひどく意氣地がない。それは甚だよろしくない。お前の云ひ出したことはそんなことであらうか」と仰せられるから「それは人に依てでございます」と申上げる。「それが悪いのである。第一の人に又第一番に可愛がられようと思ふがよい」と仰せられるのも甚だ面白い。

○一乘の法、法華經方便品にある語で、此の經が煩惱の海に浮沈してゐる衆生を濟度して、彼岸に導く唯一無二の經典であるので、少納言が日頃「すべて人には一におもはれずば云々」と云ふのを譬へて云ふ。乘は運載の義。○九品蓮臺、極樂淨土の往生には九等の階級がある。上・中・下の三品等に分れ、更に各品等上・中・下の三生等に分かる。さて極樂には往生した者の座す蓮臺があるといふので、九品淨土の果を九品蓮臺と云ふ。こゝでは中宮に可愛がれる事を極樂往生に、中宮に可愛がれるならば、その中の下位でもよいとの意である。

●出所●　枕草子　八十四段。

二、しらくものたつたの山のつゆじもにいろづく時にうち越えて旅ゆく君は五百重山いゆきさくみあだ守る築紫にいたり山のそきみよと伴のべを分ちつかはしやまびこのこたへむきはみたにぐくのさわたるきはみくにがたをみしたまひてふゆごもり春さりゆかばとぶとりのはやくきまさねたつたちのをかべのみちにつゝじのにほはむ時にさくらばな咲なむ時にやまたづのむかへまゐでむ君が來まさば

反　歌

ちよろづのいくさなりともことあげせずとりて來ぬべき壯夫とぞおもふ。

（萬葉集、藤原宇合卿遣西海道度使之時、節高橋連蟲麻呂作歌）

【解　釋】　龍田の山が冷たい霜のために、色づく頃に山を越えて旅立たれた君は、幾重にも重つてゐる山路を踏み分けて、防備の任に當たる筑紫の國に行かれたならば、山のはて、野のはてまでも殘る所もなく見よと。部下の兵士をさし遣はし、又自分自らは山彦の響く果てまでも、蝦蟆（かはづ）の行く隅々までも、國土の狀況を視察せられて、そうして來年の春が來たならば早く歸つ

て御出でなさい。その時は最早や春のことゝて、龍田越の間道の路にはつゝじが咲き匂ひ、櫻花が咲き亂る頃にお迎へに參りませう、君が御歸りになれば、

（千萬の歌）「たとへ千萬人の敵兵が襲うて來ても、乾度あなたはとやかくと噪ぎ立てないで、容易に征伐して歸つて來る、たのもし丈夫であると私は確く信じてゐます。

○しらくま　は龍田の立つの、多ごもり　は春の、飛ぶ鳥の　は早の、山たづの　は迎への何れも枕詞、○鋒矟　は薄い霜、○伴の部　節度使の部下の兵士、○ことあげせず、漢語の揚言に當り、言葉に出してとやかくと噪ぎ立てないこと。出所　萬葉集　卷六。

二、大正十二年度第二次（三九回）

一、出雲の國の多藝志の小濱に天のみあらかをつくりて水戸の神のひこ櫛八玉の神を齋夫として、天の御饗たてまつる時にねぎ申して櫛八玉の神鵜になりてわたの底に入りて底のはにをくひいでて天のやそびらかをつくりてめのからを刈りて燧臼につくりこものからを燧杵につくりて火を鑽りいでて申しけらくこのあが燒れる火は高天の原には神産巢日御祖の命のとだる天の新巢のすすの八拳たるまで燒きあげ地の下は底つ岩根に燒きこらして栲繩の千尋繩うちはへ釣らせる海人が口大の尾翼鱸さわさわにひきよせあげてさきたけのとををとををに天の眞魚咋たてまつらひと申しき。（古事記）

【解　說】出雲の國の多藝志の小濱に神殿を作つて、水戸の神の孫櫛八玉の神を御膳を掌る人として、神饌を獻る時に壽詞を白うして、櫛八玉の神が鵜になつて海の底に這入つて、海底の泥土を咥ひ出でて、物を盛る器を作りて、海藻類の塞の塞で火を鑽り出す杵を作つて火を鑽り出でて申すには「此の我が燒れる火は、高天の原には神產巢日御祖の命の新しい御舍の煙出しの如く、地の下は底の岩根に燒きつけ、栲の皮の纖維で作つた長い繩を引延ばすが如く、釣つた海人が大口の鯖の細い鱸をさら〳〵と引上げる時のやうに、破つた竹を撓む程、魚を奉りませう」と。

二、（イ）蜉蝣の山千代の古道あととめてまた尋わくる望月の駒。（後白河院栖霞におはしける駒引の引分の使にてまゐりて、藤原定家）

（ロ）世の中の晴れゆく空に降る霜のうき身ばかりぞおきどころなき。（五十首歌奉りし時、慈圓）

（ハ）みどり子のはひたもとほりあさよひにねのみぞわがなくきみなしにして。（大納言大伴卿薨之時歌、金明軍）

第二　國語併傳

【解　釋】（イ）嵯峨の山に、千代までに道のあとをとめて、霧を踏み分けて、望月の頃に駒を引き渡した。

（ロ）世の中の、晴れゆく空に、霜の如く、年老い果てた我が身程果敢いものは、置き所もない程である。

（ハ）君が死んでしまつたので、丁度自分は小さな子供のやうに、朝晩はひまはつて君を探して泣き叫んでゐる。誠に悲しいことである。出所　萬葉集　卷三

三、大正十三年度第一次（四〇回）

一、雲間もなく明け暮るゝ日數に添へて京の方もいとゞおぼつかなくかくしながら身をはふらかしつるにやと心細うおほせどかしらさし出づべくもあらぬ空のみだれにいでたちまゐる人もなし二條院よりぞあながちにあやしき妻にてそぼち參れるみちかひにてだに人か何ぞとだに御覽じわくべくもあらずまづおひはらひつべき賤の男のあはれにむつまじう思さるゝも我ながらかたじけなうくしにける心のほど思ひしらる御文にはあさましくをやみなき頃の氣色にいとゞ空さへ閉づる心地してながめやる方なくなむ。

浦風やいかに吹くらむ思ひやる袖うちぬらす浪間なき頃

あはれに悲しきことゞもを書きあつめたまへりひきあぐるよりいとゞみぎはまさりぬべくかきくらすこゝちし給ふ。（源氏物語、明石）

【解　釋】雲の晴間もなく明け暮れる日數が重なるにつれて、京都の方の事も一入氣が氣でなく此のまゝ自身は死んでしまふのではないかと心細くお思ひになるけれ共、非常な雨風なので頭をさし出されそうにもないので、出かけてやつて來る人もない。二條院からは、强ひてみすぼらし養笠姿で、びしよ濡れになつて使が來た。途中ですれ違つても、餘りの姿なので人か何かとさへも見分けが附かぬ。先づ追つ拂つてしまひさうな賤しい男が、懷しく親しく感ぜられるのも自分ながら自分に對して勿體なくて、どんなに意氣地がなくなつたかゞ思ひ知られる。さて紫上よりの御手紙には「あきれる程晴れ間のない今日此の頃のお天氣に、一入空までが閉ぢる樣な氣がして、眺めてやる方なくなりました。そして次の樣な歌が添へてあつた。その歌は「あなたの居られる須磨は、どんなに强く浦風が吹いて居ることでせう。都にゐてそれを思つてゐる私は、涙のために何時も袖を濡らせて暫くも絶間がありません」

哀れに悲しい事を澤山に書いてあつた。それ故お手紙を引き開けるより、涙のために一入水が增つて了ひさうで心が暗くなるやうな氣持がなさるのであつた。

二、やすみししわがおほぎみのたかしらすやまとの國はかみろぎの神のみよゝりしきませる國にしあればあれまさむ御子のつぎ〳〵天の下しらしまさむと八百萬千年をかねてさだめけむ平城のみやこはかぎろひの春にしなれば春日山御笠の野邊に櫻花このくれがくり貌鳥はまなくしば鳴き露霜の秋さりくればいこま山飛火が岡に萩の枝をしがらみ散らしさをしかは妻よびとめよ山見れば山もみがほし里みれば里も住みよしものゝふの八十伴男のうちはへて里なみしければ天地のよりあひのきはみ萬世に榮えゆかむと思ひにし大宮すらを恃めりしならの京を新世の事にしあればおほぎみのひきのまにまに春花のうつろひかはりむら鳥のあさたちゆけば刺竹の大宮人のふみならし通ひし道は馬も行かず人も行かねば荒にけるかも。（萬葉集、悲寧樂故京郷作歌）

【解　釋】　わが大君が治め給ふ所の日本の國は、皇祖の神の御代以來、お治めになつてゐる國であるから、お生れ遊ばされる御子が、つぎ〳〵に天下に君臨ましまさうとして、幾千萬年後までもかけて、都と定められた平城の都は、春になると春日の御笠山の麓の野邊に、美しく咲き亂れた櫻花の木の葉の蔭げに、かんこ鳥がかくれて絶間もなく鳴き渡り、薄露の結ぶ秋が來ると、生駒山の飛火が岡に、萩の枝を靡け散らす牡鹿の妻を呼ぶ聲がそこらに響き渡る。山を見ると山も面白く、里を見ると里も住みよいので、文武百官はそこら一面に人家を並べて造るので、天地のあらん限り何時までも榮えて行くであらうと思つて居た大宮所であつたのに、そして又あれ程頼みにしてゐた平城の都であつたのに、盛大な御代のことゝて、大君がお引連れになつて行かるゝまゝに、皆々新京をさして移つて行くので、今までの大宮人の踏みならし平らかにした都大路は、馬は通らず人も通らない樣になつたから荒れてしまつたことである。

○やすみしし　は君の、かぎろひ　は春の、露霜　は秋の、ものゝふの　八十伴のをの、春花の　ばうつろふの、むら鳥の　朝立つの、何れも枕詞である。出所　萬葉集、卷六。

四、大正十三年度第二次　（四一回）

一、たまきはるうちのかぎりは平らけく安くもあらむをこともなくもなくもあらむを世の中のうけつらけくいとのきて痛き瘡にはからしほをそそぐちふが如くますますも重き馬荷にうはにうつといふことのこと老いにてあるわがみの上に病をら加へてあれば晝はも歎かひくらし夜はも息づきあかし年長く病みしわたれば月かさねうれへさまよひことことは死ななとおもへどさばへなす騷ぐこどもをうつてては死には知らず見つゝあれば心はもえぬかにかくに思ひわづらひねのみしなかゆ。（萬葉集　老身重病經年辛苦及思兒等歌）

【解　釋】　命のある限りは無事に安心して生きたいものであるのに、又何事もなく、わざはひも

ない様にありたいのに、世の中のいとつらひことには、諺にもある様に、痛い瘡には辛い鹽を振りそゝぐ様に、又重い荷を背負つてゐる馬に更に上荷をつけると云ふ様に、たゞさへ年が寄つて不自由なわが身の上に、病氣までつけ加へてゐるので、晝は晝で歎き暮らし、夜は夜で歎息して、永年の間わずらひ通しでゐるので幾月も幾月も心配したり迷つてゐる。それでこんな事ならば一層の事死んでしまふたならばよからうかと思ふが、八ケ間敷く云つて立さわぐ子供をさし置いてはよくも死ぬことも出來ず、それかと云つてそれ等の子供を見て居れば、心は煩悶して燃える様に思はれる。それで、あれやこれやと思案を決し兼ねて、とう〳〵聲を立てゝ泣くばかりである。

○たまきはる　は命の、さばへなす　は騷ぐの枕詞。○ことごと　は契沖の云ふが如く、悉くの意ではなく、異事の義である。卽ちいとけない子を殘して置く外の辛苦の餘りには死なうと思ふけれどもと云ふ意である。出所　萬葉集、卷五

二、月まち出でて出でたまふ御供にただ五六人ばかり下人もむつまじき限りして御馬にてぞおはする更なる事なれどありし世の御ありきに異なり皆いと悲しう思ふ中にかの御禊の日假に御隨身にて仕うまつりし右近の尉の藏人得べきかうぶりもほどすぎつるを絶に御簡けづられてつかさも取られてはしたなければ御供に參るうちなり賀茂の下の御社をかれと見わたすほどふと思ひ出でられて下りて御馬の口をとる。

ひきつれて葵かざししそのかみを思へばつらし賀茂のみづがき

といふを實にいかゞと思ふらむ人よりげに花やかなりしものをと思すも心ぐるし君も御馬より下りたまひて御社の方を拜みたまふとて神に罷申したまふ。

うき世をば今ぞわかるゝとどまらむ名をばただすの神にまかせて　（源氏物語、須磨）

【解　義】月の出るのをお待ちになつてお出かけになる。御供にはたゞ五六人程で、召使も親しい者だけをお連れになつて、御馬に召されてお出でになる。申すまでもない事であるが、以前の御外出の時とは異つて居る。一同非常に悲しう思つてゐる中に、かの賀茂齋院の御禊の日、臨時に任命された隨身として御供を申上げた右近尉の藏人が、當然從五位下に叙せられる筈の處、其の叙位の時期も過ぎたのに、とう〳〵除籍され、役も免ぜられて、具合が悪いものだから、君の御供に登つてゐる。賀茂の下の社を、あそこであると御覽になる時に、ふと御禊の日の事が思ひ出でられて、馬かり下りて御馬の口を取つて次の様な歌を申上げた。その歌は

賀茂のみづがきを見るにつけても、行列をつくつて、葵を頭に挿して練つて歩いた御禊の日

の當日を思ふと、賀茂の神樣迄が怨しい。（そのかみに神をかけた。）

と云ふのを君はどのやうに思ふだらう。あの禊の日は、人より本當にすぐれて立派であつたものをとお思召すにつけても心苦しいことである。源氏の君も御馬からお下りになつて御社の方をお拜み遊ばさるゝと云ふので、神樣に御暇乞ひを申された。その時の御歌は

「私は唯今憂き世に別れて須磨の方へ參ります、ついては私の名の正しいか正しくないかは偏へに下賀茂神社の神樣にお任せ致します。」と。（たゞすは正すと糺神社の糺とをかけた）

五、大正十四年度第一次（四二回）

一、宮に始めて參りたる頃物のはづかしき事數知らず涙も落ちぬべければ夜々まゐりて三尺の御几帳うしろにさぶらふに繪など取り出でゝ見せさせ給ふだに手も得さし出づまじうわりなしこれはとありかれはかゝりなどのたまはするに高坏に參りたるおほとなぶらなければ髪のすじなどもなか〳〵畫よりはけそうに見えてまばゆけれど念じて見などすいとつめたき頃なればさし出でさせ給へる御手のわづかに見ゆるがいみじうにほひたる薄紅梅なるは限なくめでたしと見知らぬさとび心ちにはいかゞはかゝる人こそ世におはしましけれと驚かるゝまでぞまもり參らする曉にはとくなど急がるゝ葛城の神もしばしなど仰せらるゝをいかですぢかひても御覽ぜられむとて臥したれば御格子もまゐらず女房參りてこれはなたせ給へといふを女房聞きてはなつを待てなど仰せらるれば笑ひてかへりぬ。（枕草子）

【解　釋】中宮の御殿へ初めて御奉公に上つた頃は、恥しいことが澤山あつて、泣きたい位であつたから、晝は引込んでゐて夜だけいつも出仕して、中宮の御側にある三尺の御几帳の後で待つてゐると、中宮が繪などを取出されて御見せ下さるのでさへ、私は手もさし出せぬ程無暗に耻かしい。中宮が「この繪はこうであり、あの繪はこうである」などと仰せられるのに、高坏に灯したる燈火であるから、髪の毛筋なども晝間よりはズツトはつきりと見えてまばゆく恥しいけれ共、我慢して見たりなどする。非常に寒い頃であるからお出しになつてゐる御手が一寸見えるが、大層お美しい薄桃色であるのは此の上なく立派である。此の樣な高貴な御方を見馴れない田舍者の心には「どうして、このやうなお美しい方が世の中に御出でるのであらうか」と、びつくりする程まで見つめてゐた。曉になると早く歸りたいと急ぐ。中宮が「葛城の神樣も今暫く」などゝ仰せられるのを「何とぞして筋違ひにでも御覽に入られやう、恥しいから」と思つて、片方によつて臥してゐると、御格子をもまだ開けず、女官が來て「此の御格子をお上げなさいませ」と云ふのを、外の女房が聞いて開けるのを、中宮が「待て」などゝ仰せられ

るとその女房は合點して笑ひながら立去つた。

二、(1)　わがさかりまたをちめやもほとほとに寧樂のみやこを見ずかなりなむ。

(2)　家さかりいますわぎもをとゞめかぬ山がくりつれともなし。

(3)　大伴のなにおふゆぎおびてよろづよにたのみし心いづくかよせむ。

【解　釋】(1)　我が盛りの年はもう一度やつてやようか、やつては來ない。して見ると自分はこの太宰府で老果てゝ、なつかしいならの都を見ないやうになるであらう。

(2)　我が家を離れて行く我が妻をとゞめかねて、遂に葬式をしてしまつたので我が利心もなくなつた。

○やまがくりつれ、つれ「ば」のばを省いたもの「山隱」は葬式をいふ。

(3)　大伴氏の名に負かず、矢壺を帶びて何時の代までもいそしみ御仕へ申し奉らんと思つてゐた皇子の命がおかくれになつたので、今より後は何處にか心をむけてお憑み申うさうか、今はお憑み申すべき方もない。

出所　萬葉集、(イ)卷三、師大伴卿歌五首ノ一、(ロ)卷三、悲緒未息更、作歌五首ノ一(ハ)卷三、反歌作歌五首ノ一

六、大正十四年度第二次（四三回）

一、廣陵といふ手をあるかぎり彈きすましたまへるにかの岡部の家も松の響波の音にあひて心ばせある若き人は身にしみて思ふべかめり何とも聞きわくまじきこのもかのもしわぶる人どももすずろはしくて濱風をひきありく入道もえ堪へで供養法たゆみて急ぎまゐれりさらに背きにし世の中も取り返し思ひ出でぬべく侍る後の世に願ひ侍る所のありさまも思ひたまへらるゝよの有樣がなんとなくめで聞こゆわが御心にも折々の御遊びその人かの人の琴笛もしは聲の出でしさま時々につけて世にめでられたまひしありさま帝よりはじめ奉りてもてかしづきあがめられ奉りたまひしを人の上もわが御身の有樣も思し出でられて夢のこゝちしたまふまゝにかき鳴らしたまへる聲も心すごくきこゆふる人は涙も留めあへず岡部に琵琶箏琴取りにやりて入道琵琶の法師になりていとをかしうめづらしき手一つ二つ彈き出でたり箏の御琴まゐりたれば少し彈きたまふもさま〴〵いみじうのみ思ひ聞えたりいとさしもきこえぬ物の音だに折からこそはまさるものなるを遙々と物の滯なき海面なるになか〳〵春秋の花紅葉の盛りなるよりはたゞそこはかとなうしげれる陰どもなまめかしきに水雞のうちたゝきたるはたが門さしてと哀れにぞおぼゆ。

【解　釋】　廣陵と云ふ曲を澄み通る音色で全體お彈きになつたので、入道の娘のゐるあの岡部の家も、松の響や波の音などに和して才氣のある若い女房たちは身に泌々と感じてゐるだらう。音樂を聞く耳などを持つてゐない、あちらこちらの賤しい人もそは〳〵と浮き立つて、濱風を引いて歩いてゐる。入道も我慢がしきれないで、勤業中の供養法を中止して、急いでやつて來た。「一旦捨てゝしまひました世の中も、又とり返して思ひ出しましたやうです。後の世に願つて居ります極樂淨土の有樣も、想像が出來る樣な夜の有樣でございますよ。」と泣く泣く御話し申上げる。源氏の君御自身の御心の中にも、折々の管絃の御遊び、何がしくれがしの奏する琴や笛、さては又よい聲で歌つた事、御自身がその時その時に、世間の稱讃を博くせられた御有樣、帝を始めとして人々から大事に崇め申された事、その等色々の事、人の身の上の事も、御自分の上の事も自然とお思ひ遊ばされて、夢の樣な御心地せらるゝに、お掻鳴らしになる聲も心凄く聞える。入道は涙をも止めることが出來ないで、岡部の家へ琵琶と箏の琴とを取りにやつて、自分は琵琶法師となつて、非常に面白い珍しい曲を一つ二つ彈き出した。さて箏の御琴が參つたので、源氏の君は少しお彈きになつたが、入道は源氏の君が何事につけても御堪能でいらせられる事とのみ思ひ申上げた。そんなに上手にも聞えない樂器の音でさへ、場合に依てはすぐれて聞えるのに、況して遙々と何の邪魔物もない海面であることゝて、却つて春の花、秋の紅葉の盛りである頃よりは、たゞ何となく繁つてゐる木蔭の方が艶しい所へ、水雞が戸を叩くやうな聲で鳴いてゐるのは、誰が一體門を閉じたのかと思はれる。

出所　源氏物語　明石

二、たまきはるうちのかぎりは平らけく安くもあらむこともなくあらむをよの中の憂けくつらくいとのきて痛き瘡には辛鹽を灌ぐちふがごとくます〳〵も重き馬荷にうはにうつといふことのごと老いにてあるわが身の上に病をら加へてあれば晝はも歎かひくらし夜はもいきづきあかし年長く病みしわたれば月かさねうれへさまよひこと〴〵は死なゝとおもへどさばへなす騷ぐこどもをうつてゝは死にはしらず見つゝあれば心はもえぬかにかくに思ひわづらひねのみしなかゆ。（萬葉集）

【解　釋】　大正一三、第二次、本、參照。

七、大正十五年度第二次（四四回）

一、その頃世に數まへられ給はぬ古宮おはしけり母方などもやむごとなくものし給ひて筋異るべきおぼえなどおはしけるを時移りて世の中にはしたなめられ給ひけるまぎれになかなかいとな

ごりなく御後見なども物怨めしき心々にてかたがたにつけて世を背き去りつゝ公私によりどころなくさし放たれ給へる様なり北の方も昔の大臣の御女なりけり哀に心細く親だちのおぼしおきてたりし様など思ひいで給ふにたとしへなきこと多かれど深き御契のふたつなきばかりを憂き世の慰にてかたみにまたなく頼みかはし給へり。（源氏物語）

【解　釋】　其の頃、世間から仲間に入れられない老親王八宮が御出でになつた。母方なども身分が高くいらせられて春宮にお立ちになる程の名望などもおありになつたのであるが、時勢が移りかはつて、世間に對して具合の悪い目にお會ひになつた騒ぎにまぎれて、却つてまるで昔の名殘りもなく落ちぶれて、御後見の人なども色々と口實を設けて、暇を貰つて出て行つて、親王は公け私ともにお頼り申す方がなくなつて見放された様である。此の親王の奥方も昔の大臣の娘であつた。哀れに心細く、親たちが親王が春宮にお立ち遊ばされたならば、娘も后位に上るであらうなどゝ自分の將來について豫定して置かれた有様などを思出しなさるにつけても、たとへやうのない事が澤山にあるけれ共、御夫婦間の類のない深い御契を辛い世の御慰とせられて、お互に又となく御依頼されあつてゐられた。

出所　源氏物語、宇治十帖、橋姫

二、うぐひすのかひこの中にほとゝぎすひとりうまれてしがちゝに似てはなかずしがはゝに似ては鳴かず卵の花のさきたる野邊ゆ飛びかけり來なきとよもし橋の花をゝちらしひねもすになけどきゝよしまひはせむ遠くなゆきそわがやどの花橋にすみわたれ鳥。

反　歌

かきくらし雨のふる夜をほとゝぎすなきてゆくなりあはれそのとり。（萬葉集）

【解　釋】　ほとゝぎすは鶯の卵の中に混つて獨り生れて來て、その父に似ては鳴かず、又その母に似ては鳴かず、卵の花の咲いた野邊を飛びかけて來ては鳴き響かし、橋の花を羽で散らせては、朝から晩まで鳴きつゞけてゐても面白く聞かれる。どつさり御禮をするから、遠方へは行かずに我が家の橋の花に住んで、そのよい聲で鳴いてくれ。時鳥。

（かきくらしの歌）空がかき曇つて雨さへ降つてゐる夜であるのに、アレあんなに時鳥が鳴きながらとんでゐる。時鳥は誠に面白い鳥であるよ。

出所　萬葉集　卷九　詠鶯公鳥一首並短歌

八、大正十五年度第二次（四五回）

一、出雲の國の多藝志の小濱に天のみあらかをつくりて水戸の神の孫櫛八王の神を聘夫として天

の神變幸る時に鵠ざ白して榛八玉の神鵠に化りて海の底に入りてそこの埴土を咋ひいでて天の八十毘良迦をつくりて海布のからをかりて燧臼につくり海蓼のからを燧杵につくりて火を鑽りいでて申しけらくこの我が鑽れる火は高天原には神産巣日御祖命のとだる天の新巣の凝烟の八拳垂るまで燒きあげ地の下は底つ石根に燒き蕨らして栲繩の千尋繩うち延へ釣らせる海人が大口の尾翼鮪さわさわにひきよせ鵜げてさきたけのとををとををに天の眞魚咋奉らむと申しき。

（古事記）

【解　題】　大正一二、第二次、三九回參照。

二、春の日霞める時に墨の江の岸にいでゐて釣船のとをらふみれば古への事ぞおもほゆる水の江の浦島の子が堅魚釣り鯛釣りほこり七日まで家にもこずてうなさかをすぎて漕ぎ行くに海若の神のをとめにたまさかにいこざひかひてあひ誂ひことなりしかばかきむすびとこよにいたり海若の神の宮の內の隔の細なる殿に携はり二人入りゐて老いもせず死にもせずしてとこしへにありけるものを世のなかのしれたる人の吾妹兒に告りて語らく須臾は家に歸りて父母にことをものらひ明日のごとわれは來なむといひければ妹がいへらくとこよべにまたかへり來て今のごとあはむとならばこの賣ひらくなゆめとそこらくにかためしことを墨の江にかへりきたりて家見れど家もみかねて里みれど里もみかねて惟しとそこにおもはく家ゆでて三歳のほどに墓もなく家失せめやと此の筥をひらきてみてばもとのごと家はあらひと玉匣すこし披くに白雲の嶺よりいでてとこよべにたなびきねればたち走り叫び袖振りこいまろびあしすりしつゝたちまちに情消失せぬ若かりしはだも皺みぬ黒かりし髮も白けぬゆなゆなはいきさへたえて後遂にいのちしにける水の江の浦島の子が家どころ見ゆ。（萬葉集卷九）

【解　題】　春の日の霞んでゐる時に、墨の江の岸に出て、釣船が波にゆられてゐるのを見ると、古い物語が思出される。水の江の浦島子が鰹釣りや鯛釣りに得意になつて、七日までも我が家に歸つて來ないで、海のはてをズン〳〵と漕いで行くと、海神の少女に偶然にも漕ぎ合つて、互に語り合つて事が成就したので、夫婦の契を結んで、その少女の住む常世の國に行つて、海神の宮殿の大奥の立派な御殿に行つて、二人連立つて年もよらず、死にもせずして、永い間あつたのに、世にも愚な此の浦島子は、自分の妻である女に語つて云ふには、「暫くの間、我が家に歸つて、父母に事の樣子を話して、すぐ樣あすにでも歸つて來ませう」と云つた所が、その妻である女の云ふには「此の常世の國に再び歸つて、今までの樣に私と連立つて暮さうと思ふならば、決して此の櫃をお開きなさるな」とくれ〴〵も云ひ含めて渡したのに、浦島子は墨の

江に歸つて來て、家を見たが家は見得ずして、里を見たが里も見得ずして、之は不思議である
と思つて「自分が家を出て僅に三年間であるに、このやうに埋もなく、家もなくなると云ふ理
由はないと、もし此の籠を開いた見たならば、以前の様に家はあるであらう」と、其の籠を少
し開くと、白雲が其の中から出て常世の國の方へ棚引いたので、浦島子は、あはて狂つて走り
廻り、聲を限りに袖を振つて叫んで、打ちころび足ずりをしながら、すぐさま氣を失つてしま
ひ、それと同時に、若かつた肌には皺がより、又黒かつた髪も眞白になつた。そして息が絶え
て、とう〳〵後には死んでしまつた。その浦島子の家のあつた所が、アレあそこに見える。

九、昭和二年度（四七回）

一、宮の御前に內の大臣參り給へりし御草子をこれに何を書かましうへの御前には史記といふ文
をなむ書かせ給へるなどのたまはせしを枕にこそはし侍らめと申しゝかばさば得よとて賜はせ
たりしをあやしきを故事や何やと書きせずおほかる紙の數を書きつくさむとせしにいと物覺え
ぬことどおほかるや大かたこれは世の中のをかしき事人のめでたしなど思ふべき事なほえり出
でて歌などをも木草鳥蟲をもいひ出したらばこそ思ふほどよりはわろし心見つなりともそしら
め唯心ひとつにおのづから思ふことをたはぶれに書きつけたれば物に立ちまじり人なみなみな
るべき耳をも聞くべきものかはと思ひしにはづかしなども見る人はのたまふなればいとあやし
くぞあるやげにそれもことわり人のにくむをも善しといひ譽むるをも惡しといふは心のほどこ
そおし量られ唯人に見えけむぞねたきや。（枕草子）

【解　義】中宮の御前に內大臣殿が奉つた御草子を、中宮が「此の草子に何を書きませう。主上
には史記と云ふ文を御書きになつた」などゝ仰せられたのを、私が「枕草子に致しませう」と
申上げると、「それならば上げやう」と云つて下さつたのを怪しい事を古事や何かと限りなく、澤
山ある紙のある限りを書きつくさうとしたのに、甚だ物おぼえぬ事ぞ多くある。大體この草子
は、世の中の面白い事、人のめでたいなどゝ思ふ事、その外選り出して歌などをも、木草鳥蟲
をも云ひ出したならば「思つた程よりは惡い。少納言の心も分つた」ともそしられるであらう。
唯一心に自分が思ふ事を戯れに書きつけたから、外の物語や草子などゝ一緒にして、世間普通
の批評を聞かうがそんな事はないと思つたのに、「恥しい」などと見る人は仰せられるから甚だ
不思議である。成程それも道理である。人のにくむのをよいと云ひ、人のほめるのを惡いと云
ふのは、其の人の眞意の程が推察せられる。たゞ此の草子が人が見られたのが殘念である。

二、あちさはふいもがめしばみやすてしきたへの枕もまかずかにばまきつくれる舟にまかちぬきわ

がこぎ來ればあはぢのぬじまもすぎいなみづまからにのしまの島のまゆわぎへをみればあをやまのそことも見えずしら雲もちへになりきぬこぎたむる浦のことごとゆきかくる島のささぎ〳〵まもおかずおもひぞわが來るたびのけながみ。

反　歌　三　首

たまもかるからにの島にあきりするうにしもあれや家もはざらむ。

しまがくりわがこぎ來ればともしかもやまとへのぼるまくまぬのふね。

風吹けばなみかたたむときもらふにつたの細江にうらがくれをり。

（遣新羅島山部宿禰赤人作家一首短歌）

【語　釋】自分の愛する妻にもしば〳〵あはず、又腕を枕として共に寢ることもせず、かば櫻の皮などを卷きつけて作つた丈夫な舟に乘つて、その舟の兩側には楫を具へつけて自分が漕いで來ると、早や波路の國の野島も過ぎてしまつた。さて辛荷の島の島影から自分の故里である大和の國の方を振顧つて見ると、青山が橫つてゐて、どのあたりかハツキリと見えず、たゞ一面に白雲が幾重にも重り合つて居るばかりである。

漕いで廻るこゝかしこの浦々、漕いで通つて行く島の崎々に於て、その行く先き先きでまがり

角々の多い樣に思ひ出すことである。何んとまあ自分の漕いで來る旅の日の長いことであるよ。

反　歌　三　首

（たまもかるの歌）海人が美しい藻を刈つてゐる辛荷の島で、鯛をあさつてゐる鵜の鳥にでもなりたいものである。そしたらこのやうに迄、我がなつかしい妻の居る家も思はないであらうに。

（しまがくりの歌）自分が島がくれにだん〳〵と舟を漕いで來ると、我がなつかしい故里の大和の方へ漕ぎ上つて行くまくはにの舟にあつた。アゝ美しいことであるよ。

（風吹けばの歌）風が强く吹くので、定めし波が高くなるであらうと思つて、つたの細江の港へ這入つて海上を伺ひ乍ら長つて待つてゐることである。

○「あぢさはふ」は「か」の、「しきたへ」は枕の、「いなみづま」は「から」にかゝる何れも枕詞。○かには　は櫻の皮、○けながみ　の「け」は氣で日のこと。○ともしかも　美ましいことであるわいの意。○さもらふに　浪を恐れうかゞふ意。

出所　萬葉集、卷六

一〇、昭和三年度（四九回）

一、長雨例の年よりもいたくして暗るゝ方なくつれづれなれば御方方繪物語等のすさびにて明し暮し給ふ。（中略）この頃幼き人の女房などに時々讀ますを立ち聞けば物よくいふものの書にあべきかな空言をよくしなれたる口つきよりぞ言ひ出すらむとおぼゆれどさしもあらじやと宣へばげに偽り飾れたる人やさまざまにさも酌み侍らむたゞいと誠とこそ思ひたまへられにけれとて硯をおしやり給へば骨なくも聞え貶しけるかな神代より世にあることを記し置きけるなり日本記などはただかたそばぞかしこれらにこそ道々しく委しきことはあらめとて笑ひたまふその人が上とてありのまゝに言ひ出づることこそなけれ善きも悪しきも世に經る人のありさまの見るにも飽かず聞くにもあまることを後の世にも言ひ傳へさまほしき節々を心に籠め難く言ひ置き始めたるなり善きさまに言ふとては善きことの限りをえり出で人に譏はむとてては又悪しきさまの珍しきことを取り集めたる皆かたがたにつけてこの書の外の事ならずかし人のみかどの才つくりやうかはれる同じやまとの國のことなれど昔今のに變るなるべし深き事淺き事の差別こそあらめひたすぶるに空言と言ひはてむもことの心違ひでなむありける佛のいとうるはしき心にて說き置きたまへる御法も方便と云ふことありてきとりなきものは此處彼處違ふ

業を置きつべくなむ方等經の中に多かれど言ひもて行けば一つ旨に當りて菩提と煩悩とのへだたりなむこの人の善き悪しきばかりのことは變りけるよく云へばすべて何事も空しからずなりぬやと物語をわざとのことに宣ひなしつ。（源氏物語）

以上傍線を施したる所のみを解釋せよ。

傍線の個所の解釋　「無骨にもご非難を遊ばれることでございますな。大昔の神代の時代から此の世にあることを記載して置いた所の日本記などゝ申す書物には、たゞホンの少しばかり書いてございます。それ故この物語等のやうに立派に委しく書いてあるものは恐らく他にはないでありませう」と仰せられてお笑ひになつた。「例へばその人の身の上でも事實をそのまゝに言ひ出すことはありません。すべて善いことでも又悪いことでも、世の中にある人の有様を見ても飽かず又聞いても餘ることを後の世の中へ言ひ傳へをさせたいと思ふ所々があると、それを作者の心に確かに記憶しておくことも六ケ敷しいものですから人に言つて置れたのが物語の始でございます。それ故善いやうに言つては、善いことのある限りを選び出して言ひ、又人の心に隨はうとしては悪いことの珍らしいことを取集めて言ふやうに、皆んな夫々につけて、此の世の中にあることを書いたもので御座います。そしてそれはたゞ人の才能が違ひ、有様の變つ

てゐる外國に於てゞばかりでなく、同じ此の我が國の事でも昔と今と變つてゐませう。それ故たとへ記載上に深い所や淺い所の差別がございませうが、一概にみな空言であると云つてしまうのも心違ひで御座います」。

出所　源氏物語、螢の卷

二、とりがなくあづまの國にいにしへにありけることと今までに絶えずいひくるかつしかの眞間のてこながあさぎぬにあをおびつけひたさををもにはをりきて髪だにもかきはけづらずくつをだにはかずゆけどもにしきあやのなかにつゝめるいはひごも妹にしかめや望月のたれるおもわに花のごとゑみてたてればなつむしのひにいるがごとみなというに舟こぐごとくよりかぐれ人の云ふときいくばもいけらぬものをなにすとかみをたなして浪のとのさわぐみなとのおくつきにいもがこやせる遠きよにありけることを昨日しも見けむがごともおもほゆる。

反　歌

かつしかのまゝのゐみれば立ちならしみづくましけむてこなしおもほゆ。

（萬葉集鉢勝鹿眞間娘子歌一首並短歌）

【解　釋】　吾妻の國に昔あつた事で、今までも絶えず言ひ傳へてゐる。かつしかの眞間の手兒奈が

庵の衣に青襟をつけ、荒い庭で織つた裳を着て、髪さへも梳ることをせず、草履さへも穿かずに歩いて行くけれども、錦や綾の中に包まれて大切にかしづかれる愛子も、この女には及ばない。滿月の樣に足りとゝのつてゐる面ざしに、花のやうに笑つて立つてゐると、夏虫が火に入つて來る樣に、又港へ入つて來る船が先きを爭ふやうに、人々が懸想して云ひ寄つて來た時、手兒奈の思ふには「自分は今後いくばくも生きられない生命であるのに何をしようか」と身をなきものにして、海邊の浪の立ち騷ぐ墓場に、かの妹は永遠の床に臥したのである。これは遠い昔にあつた事であるが、今來て見ると、恰も昨日あつたことのやうに思はれることである。

（かつしかの歌）　かつしかの眞間の井を見ると、昔このあたりに來て水を汲んでゐたてこなのことが思はれる。

○とりがなく　はあづまの、望月の　はたれる面輪の枕詞。

一一、昭和四年度　（五一回）

一、やまと歌はむかし天地ひらけはじめて人のしわざいまださだまらざりし時葦原の中の國のことのはとして稻田姫素盞嗚さとよりぞつたはれりけるしかありしよりこのかたその道さかりに起りそのながれ今に絶ゆる事なくして色にふけり心をのぶるなかだちとし世ををさめ民をやわ

らぐる道とせりかゝりければ代々の帝も之を捨てたまはずえらび置かれたる集ども家々のもて
あそび物として言の葉の殘れる木のもとかたく思の露もれたる草蔭れもあるべからずしかはあ
れども伊勢の海清き渚の玉は拾ふとも盡くる事なくいづみの山しげき宮木はひくともたゆべか
らず物皆かくの如し歌の道又同じかるべし。

【解　義】一體我が國の和歌は、昔、天地が開けたばかりで人のすることのまだはつきりと定ま
つてゐなかつた時に、我が國の言葉として素盞嗚尊がその夫人である稻田姫と、お住み給はん
とて出雲の國の素盞嗚と云ふ里に宮殿をお造り遊ばされた時、お詠みになつた

八雲立つ出雲八重垣妻ごみに
　八重垣つくるその八重垣を

と云ふ御歌から傳つて來たのである。その時からこちらへ和歌の道は盛んになり、その道が今
に至るまでも絶えることがなくて、或は情愛を通はせ、思ひを遂べる媒介者とし、或は天子樣
が世の中を治め、人民を和げる方便にもせられた。此の樣な効能があるので、和歌は御歷代の
天皇樣も和歌をお捨て遊ばされないで、勅撰集を御撰びになつて置かれたので、家臣の家々で
弄び物として立派の歌の殘つたものもなく、草葉のかげにかくれた露の樣に世に隱れた名歌も
ないであらう。
そうではあるが、伊勢の海の渚にある美しい玉は數限りなく澤山あつて、それがなくなると云
ふことがないやに、又和泉の槇山に澤山ある宮殿を造る木はいくら伐り出しても絶えてしまふ
ことがない。物事は大抵皆この通りである。それであるから和歌の道も亦之れと同じことであ
らう。

出所　新古今集序文

二、(イ)　あぶりほすひともあれやもいへびとのはるさめすらをまづかひにする。
　(ロ)　かゞみなすわがみしきみをあばのぬのはなたちばなのたまにひろひつ。
　(ハ)　をとめらがゆきあひのわせをかるときになりにけらしはぎの花さく。

【解　義】(イ)　此の樣に春雨が澤山に降るのは、自分のふるさとの家人が、自分を思ふ餘りに
此の春雨をさへ間使ひによこして降るのであらうか、さり乍ら自分の着てゐる着物が濡れて仕
方がない。ア、誰か自分の濡れてゐるこの着物を火にあぶつて乾せて呉れる人があればよいの
にの意。〇まづかひ　間使で、時々の消息を傳ふる使。

出所　萬葉集、卷九雜

（ロ）鏡のやうに大切に思つてゐた我が君を、思ひがけなくも失つてしまつて、今はアノあばの野の橘の實を取る樣に君の遺骨を捨つたことである。

出所　同、卷七挽歌

（ハ）ア、今年も早やをとめらがゆきあひの早稻を刈る時期が來たらしい。そして野山には美しい萩の花が咲いた。○ゆきあひ　行き合ふこと、夏秋の交に稻などのみのること。

出所　同、卷十秋雜

一二、昭和五年度（五三回）

一、近き所には播磨の明石の浦こそなほ殊に侍れ何のいたり深き隈はなけれど唯海の面を見渡したるほどなむ怪しくこと所に似ずゆほびかなる所に侍るかの國の前の守新發意の女かしづきたる家いといたしかし大臣の後にて出でたちもすべかりける人の世のひがものにて交らひもせず近衞の中將を捨てゝ申し給はれける司なれどかの國の人にも少し慢られて何の面目にてか又都にも還らむと言ひて頭もおろし侍りにけるを少し奥まりたる山住もせでさる海づらに出で居たるひが〳〵しきやうなれど實にかの國の中にさも人の籠り居ぬべき所々はありながら深き里は人ばなれ心すごく若き妻子の思ひ佗びぬべきによりかつは心を遣れる住居になむ侍るさいつ頃罷り下りて侍りし序に有樣見給へに寄りて侍りしかば京にてこそ所得ぬやうなりけれそこら遙かにいかめしうしめて造れる樣さはいへど國の司にてし置きける事なれば殘りの齡ゆたかに經べき心がまへもになくしたりけり後の世つとめもいとよくしてなか〳〵法師まさりしたる人になむ侍りけると申す。（源氏物語）

【解　釋】近い所では、播磨の國の明石の浦が尙格別でございます。何も別段氣の利いた趣きと云つてはございませんが、唯だ海上をズツト遙に見渡しました時の景色が、不思議にも他處とは異つて、ユツタリとした所でございます。そして以前の播磨の守新發意が、その娘（明石上）を養育致してゐる家は大層立派でございます。一體新發意と云ふ人は、大臣の子孫で出世もする筈の人でございましたが、世間に云ふ變屈物で、人と交際もせず、近衞中將の役を棄てて、自分から願ふて頂いた國司の役ではございましたが、播磨の國の人にも多少輕蔑されて、「どんな顏をしてか、又京都へ歸ることが出來やう」と云つて、頭を剃つてゐますが、その癖少し奥まつた山住みも致ませず、アノ樣な海岸に出てゐますのは、世間をすねた振舞の樣でございますが、播磨の國の中には、その樣な人の籠つて居りそうな所々はありますが、奥深い里は、人ばなれがして淋しく、その上若い妻子が辛らがるであらうと云ふので、それから今一つは新發意

自身が大得意になつてゐる所で御座います。此の間私が歸國致してゐました序でに、どんな所かと様子を見に參りました所が、彼は京都でこそ不仕合の様でありますが、そのあたりズツト嚴重に邸宅を構へてゐる様子は左様には申しますものゝ、國の司の威光を以て拵へて置きました事でございますから、餘生を呑氣に送るべき準備も十二分に致して居ります。そして後生の勤行も大層立派にして、却つて法師となつて器量をあげた人でございます。

出所　源氏物語、若菜

二、(イ)　さゝの葉にはだれふりおほひけなばかもわすれむといへばましておもほゆ。(萬葉集)

(ロ)　月讀のもたるをちみづえてしあらばしこの翁もまたをちなむか。(山齋集)

【解　釋】　(イ)　笹の葉の上へまばらに雪が降りかゝつた。そのはだれ雪は忽ち消えるであらうが、こう云ふ我が身も又その雪の消えるやうに失くなつてしまへばよいと思ふ。しかし我が身が死んだら忘れるであらうが、命のある限りは忘れないと妻が云ふにつけても、ます〳〵我が妻のことが思はれる。

○さゝのはにはだれふりおほひ　は序で雪の消るを身の失せるに言かけたものである。

出所　萬葉集十卷、多相聞、寄雪

(ロ)　お月様の持つてゐられると云ふ、若返る水をもしも取ることが出來たならば、この醜い翁も又若返ることが出來るであらうか。併し出來ないのはさて〳〵殘念なことである。

○をちみづ　は飲めば若返る水、「をつ」は元に返る意の動詞、之は契沖も云つてゐる様に佛教傳說から來てゐるものと思はれる。○しこ　はみにくいもの、或は惡むべきものに冠する語、こゝでは翁の卑稱に用ひたものである。

一三、昭和六年度　(五五回)

一、まことに世の中にいくそばく哀にもめでたくも興ありて承り見たまへ集めたる事の數知らずつもりて侍る翁どもとか人々思召すやんごとなくも又くだりてもまぢかくみすの中ばかりやおぼつかなさ殘りて侍らむそれなりともおのおの宮殿ばら次々の人の御あたりに人のうちきくばかりの事は女房わらはべ申しつたへ　ぬやうやは侍るさればそれも不意に傳へ承らずしも候はすされどそれをば何とかは語り申さむするたゞ世にとりて人の御耳とゞめさせ給ひぬべかりし昔の事ばかりをかくかたり申すだにいとをこがましげに御覽じおこする人もおはすめり今日はたゞ殿の珍しう興ありげにおぼしてあどをようたせたまふにはやされ奉りてかばかりも口あけそめて侍れば中々殘り多く又又申すべき事は期もなく侍るをもし眞に聞召し果てまほしくば

獣一疋をたまはせよはひ騎りて参り侍らむかつは又御やどりに参じて殿の御才學の程も承らまし う思ひたまふるやうはいまだ年ごろかばかりもさしいらへしたまふ人に對面たまはらぬに時々くはへさせたまふ御ことばの見奉るは翁らがやしは子の程にこそはと覺えさせたまふにこの知しめしげなることゝもは思ふにふるき御日記などを御覽するならむかしと心にくく下臈はさばかりの才はいかでか侍らむ見聞きたまへし事を心に思ひおきてかく賢しがり申すにこそあれまこと人にあひ奉りてはおぼし咎めたまふ事も侍らむと恥かしうおはしませば老の學問にも承り明さまほしうこそ侍れといへば繁樹も唯かうなりかうなりさらむ折はかならず告げたまふべきなり杖にかゝりても必ず参り合ひ申し侍らむとうなずきあはす。（大意）

【解　説】「本當に世の中で、澤山あはれにも又めでたくも興味がある事を聞き集めてゐる翁であるわいと人々は思召すであらうが、高貴の事も又下賤の事も、昔の事は勿論近代の事も、それから奥向のうちの事等、私の確に覺えてゐない事が殘つてゐませう。その世間に知れない奥向の事でも、宮達や殿ばら以下で、人々の聞いて面白いと思ふ程のことは、その宮達や殿ばらなどに仕へてゐる女房や、女の童に申し傳へない樣な事はございませうか、その樣な事はない筈はございます。それ故、その樣なことも不意に承らないことはございませんけれども、それをばこゝでは申上げません。唯だ世間にとつて人の御耳にとゞめて大事や珍しいと思はれる昔のことだけを申上げましても、大層馬鹿らしく御思ひになる事と存じます。しかるに今日はたゞあなたが珍しう面白そうに思はれて話の合槌をようお打ち遊ばされるのに氣にのつて、この樣に口を開いて語りつゞけたのでございますが、御話申上げることは殘りが多く、又いつまで語つてもつきる限りがありません故、若し本當に私の話を御聞きになつて御しまひ遊されるやうでございましたら、錦に馬を一疋を下さいませ。そう致しますれば、その馬に飛び乘つて參りませう。その上又御宿所に參つてあなた樣の御才學の程も承りたうございますのは、翁これまで多くの人にあひましたが、あなた樣の樣に應答なさる人に對面致しません。又時々加へられる御言葉にも當時のことをよく御存知遊ばされて、御年齡から申上げると、翁等の玄孫位でありになると御見受け申上げるのに、その御博識にお座しますことは、昔の御日記などを御覽になつてゐられるのであらうと、奥床しく翁等の如きはあなた樣の樣な才學はどうしてございませうか。たゞ長い間に見たり聞いたりした事を悉く記憶してゐて、そうしてこの樣に賢ぶり申すことでございます。本當に學問のある人に御目にかゝつては、翁等の誤談を御不審に思召されて御非難されるだらうとお恥しうございますから、老後の學問の爲にも承つて不明な點を

はつきりさせたいと思ひます」と世繼が云ふと、傍にゐる繁樹も「左樣、左樣、その樣の時は必ず知せて下さい。私も杖に取縋つてゞも參りませう」と、二人の翁が互にうなづきあつた。

二、（イ）葛城や一言ぬしの神のます森のさか木をうじものうなねつきしづはたの幣とり向けて
我が君のみ杖にとりきけふの日のみはぎの庭の庭雀うすすまりゐて百ちぢの言も何せむ萬代に
いませ我が君と一言まをさも一言まをさも
よき言を一言ぬしのおは神のさちはひなむ杖たてまつる。

（殿の御賀に御杖たてまつる歌、賀茂家集）

（ロ）くらおかみ雪をふらしめ立田彦あらしを吹かせ年月の暮れゆくはしにあらびてし神御心も春さればなごみますらしこの岡に若菜萌え出でかの山に霞きらへりいきの緒に我がもふ櫻花にさかぬか。（待花、袖珍詠草）

【解　義】（イ）大和の國の葛城山にお祀り申してある一言ぬしの神樣の森に生えてゐる賢木を、私はアノ鵜が飼を漁る時の樣に頸根を「いば」や「何か」の中へ差し入れて色々と苦心して、シヅハタ織で織つたみ幣を神樣に奉つて、そうして、我が君に差上げるこの杖を取つて參りました。さて私は今日の我が君の御誕日に當りまして、アノ御庭の先きに群れよつて、チュ〳〵と囀つてゐる庭雀のやうに、たとへ百千の御祝詞を申上げましても何にもなりませんから、「どうぞ我が君、千年も萬年も御長壽遊ばしませ」とたつた一言だけ申上げます。

（よき言の歌）　私は今日の我が君のお目出たい御誕日に當つて、大和の國の葛城山にゐます一言ぬしの神樣の森に生えてゐた賢木の杖、此の杖を持つ者は一言ぬしの大神が幸ひをお與へ下さると申す杖を差上げます、どうぞ此の杖に依て何時までも何時までも御長壽あられます樣に。〇よき言を一言ぬし　は「よき事」と「一事主」とにかけた。

（ロ）雪の神くらおかみが雪を降らせたり、嵐の神立田彦が嵐を吹かせたりして年月が暮れて行く端には、アンナに荒んでゐた神樣の御心も長閑な春が來ると靜かに和はらいだ樣である。そして此の岡には若菜な新芽をふき出し、かの山には霞がきら〳〵と棚引いた。さて自分が生命にもかけて待遠うしく思つてゐる。アノ見事な櫻の花はまだ咲かんのであらうか。ア、早く咲いてくればよいのに。

一四、昭和七年度　（五七回）

一、國醫院の御はての年皆人御服ぬぎなどしてあはれなる事をおほやけより始めて院の人も花の衣になどいひけむ世の御事など思ひ出づるに雨いたう降る日藤三位の局に養蠶のやうなる蟲の

大きなる木の白きに塗文をつけるこれ奉らんといひければいづこよりぞけふあす御物忌なれば御葛もまゐらぬぞとてしもは立てたる葛のかみより取り入れてさなどは聞かせ奉れど物忌なればえ見ずとてかみについさして置きたるをつとめて手洗ひてその巻数とこひいでて伏し拝みてあけたれば胡桃色といふ色紙の厚肥えたるをあやしと見てあけもてやけば老法師のいみじげなる手にて

これをだにかたみと思ふに都には葉がへやしつる椎柴の袖

と書きたりあさましくねたかりけるわざかな誰がしたるにかあらむ仁和寺の僧正のにやと思へどよもかゝることのたまはじなは誰ならむ藤大納言ぞかの院の別當におはせしかばそのしたまへる事なめりこれをうへの御前宮などにとう聞しめさせばやと思ふにいと心もとなけれどなほ恐ろしういひたる物忌をしはてむと念じくらして又のつとめて藤大納言の御もとにこの御返しをしてさしおかせたればすなはち又返事しておかせ給へりけり。

【解　説】　圓融院の御一周忌の年、人は皆裏服を脱いだりして、哀れな事を宮中を始めとして、院に仕へてゐる人も「みな人は花の衣になりぬなり苦の袂よかわきだにせよ」などゝ云つた昔の世の御事などを思ひ出すに、雨の大變降る日に、藤三位の局に、實盛のやうな子供が、大きな木の白いのに、立文をつけて「これを差上げませう」と言つたから「いづこからでございますか。今日明日は御物忌でございますから、御葛も上げませんぞ」と云つて、下は立てある葛の上から取り入れて、左樣には申上げだけれども「物忌であるから見ることは出來まい」と云つて、かみにさして置いたのを、朝早く手を洗つて「昨日の巻數を」と乞ひ出して、拝し伏んで開いて見た所が、胡桃色と云ふ色紙の厚いのを不思議であると見て開いて行くと、老法師の甚だ力なさそうな筆蹟で、

この裏服をでも故院のかたみと思つてゐるのに、都では早や裏服をは脱いで花の衣になつた事であるか。

と書いてある。「淺ましく憎らしかつたわざであるわい。誰がしたのであらうか。仁和寺の僧正ではないかと思ふけれども、よもやそのやうなことは仰せられまい。それでは誰であらう。藤大臣があの圓融院の別當でいらつしやつたから、その方がなされた事であらう。之を主上や中宮などに早く御聞かせ申上げやう」と思ふのに、甚だ氣がかりであるが、尚ほ大切に云つた物忌を果さうと我慢し暮して、又次の朝早く藤大納言の御許へ、此の御返事を差上げて置せるとて置かせなされた。

出所　枕草子、百十九段

二、(イ)　ひろせがはそでつくばかりあさきをやこころふかめてわがおもへらむ。

(ロ)　さつきやまうのはなづくよほとゝぎすきけどもあかずまたなかぬかも。

(ハ)　あしびきのやまだつくるこひですともなはだには へよもるとしるがね。

【解　釋】(イ)　廣瀬川の水に長く垂れた我が袖をつける様なソンナ淺い心ではなく、心深く自分を思はれるであらうとの意。

〇ひろせがはそでつくばり　はあさきの序である。廣瀬川は大和にある。

(ロ)　五月頃に卯の花が眞つ白に咲いてゐるのは恰度月夜の様に見える。その頃、時鳥の鳴いてゐるのはいくら聞いても飽かない。どうぞもつと鳴いてくれたらよいのにの意。

(ハ)　そこで山田を作つてゐる女の子は、今はまだ小さいけれども、今から夫があると思ふてしめなはでもはつてくれよ。將來我が妻としたいからの意。

〇あしびき　は山の枕詞。〇ひですとも　は稻にでないこと。〇なはだには へよ。その少女の父母が乳母かに對して、シメナハでもはつて我が夫とさせよの意。〇がね　接尾語がにの轉。

出所　(イ)萬葉集卷七、譬喩歌。寄レ河。(ロ)同上卷十、夏雜歌。詠レ鳥。(ハ)同上、秋雜歌、詠二水田一。

第四篇　文檢國語科試驗問題集（自第三八回・大正十二年度　至第五七回・昭和七年度）

一、大正十二年度第一次（三八回、後）

設　問

一、左の人々の著作に就いて所見を記せ。(圖一)……(頁數)

高山樗牛、德富蘇峰、有島武郎、芥川龍之介

二、左の文中の動詞・形容詞・助動詞を摘出し其の活用を法(段)に當てゝ示せ。(一)

あないみじとて雪打拂はせ給へりし御もてなしこそいとめでたかりしか御袍は黑きに御單衣は紅の花やかなるあはひに雪の色ももてはやされてえもいはずおはしましものかな。

三、左に就いて知れる所を記せ。(一圓〇)

(イ)　白居易、元　稹

(ロ)　近思錄、傳習錄

作　文（口語體）

初夏の田園

復　文（一六三）

千金ノ子ハ、以テ人ヲ貧シクスベク、以テ人ヲ富マスベシ。天ノ與フル所ニアラザレバ、人ヲ貧シクシ人ヲ富マスノ權ヲ以テ、一言ノ道ニ幾キヲ求ムト雖モ、得ベカラザルナリ。

（原文三十六字）

國語解釋（二一六）

一、左の文を解釋せよ。

一年入道殿（道長）の大井川の逍遙せさせ給ひしに作文の船管絃の船和歌の船とわかたせたまひてその道にたへたる人々をのせさせ給ひしに此の大納言（公任）のまゐりたまへるを入道殿かの大納言いづれの船にかのらるべきとのたまはすれば和歌の船にのり侍らんとのたまひてよみ給へるぞかし。

をぐら山あらしの風のさむければもみぢのにしききぬ人ぞなき。

申しうけ給へるかひありてあそばしたりな御みづからものたまふなるは作文の船にはのるべかりけるさてかばかりの詩をつくりたまひしかば名のあがらんこともまさりなましくちをしかりけるわざかなさても殿のいづれにとかおもふとのたまはせしになんわれながらこゝろおごりせられしとのたまふなる一事のすぐるゝだにあるにかくいづれの道にもぬけいで給ひけんは古も侍らぬ事なり。（大鏡）

二、左の歌を解釋せよ。

（イ）　まきあぐるしののすだれのさらさらにおもひもかけぬ今朝のはつゆき。（香川景樹）

（ロ）　一人あるたかきを求め走りきぬくみすることの空しきを知り。（與謝野寛）

三、左の文の要旨を記せ。

（勇士）私は人を殺したことは數限ないが、人から傷つけられたことは一度もない。（聖人）私は人から殺されたことはあるが、人を傷けたことはない。（勇士）あなたはいくぢなしだ。（聖人）私は幸福者だ。（勇士）私は萬人に恐れられた。（聖人）私は萬人に愛された。（勇士）あなたは愛されて殺されたのか。（聖人）殺されて愛された。（勇士）私は人を殺して尊敬された。（聖人）私は人に殺されて敬愛された。（勇士）私に手向ふ者は誰もゐなかつた。（聖人）私に手向ふものは私の精神を世界に輝かした。あなたは手に血をぬらなければ、あなたを生かすことは出來なかつた。私は手に血をぬらしては自分を生かすことの出來ない人間だつた。（勇士）一體お前と俺

とどつちが偉いのだ。一つ勝負をしよう。（聖人）私は勝負は嫌ひだ。打ちたければぶつがいゝし、殺したければ殺すがいゝ。（勇士）わしは勇士だ。亂暴者ではない。手向はないものをぶちはしない、おどろかないがいゝ。（聖人）私は少しもおどろかない。（勇士）これでもか。（切る眞似する）。（聖人）（おどろかない）殺されるのは殺すのではない。殺すことは恥ぢるが、殺されることは恥ぢない。（勇士）お前はお可笑しな奴だ。お前のやうな男に逢つたことはない。お前はどうして死がこはくないのだ。（聖人）死はこはくない。天命を知つてゐるものは死を恐れない。來るべき時に來るものを恐れない。（勇士）本當か。（聖人）私は私を守護してゐるものを知つてゐる。（勇士）それでもお前は殺された人間ちやないか、俺は何度死にかけたか知れないが、それでも不思議に働一つうけずに生きた人間だ。（聖人）しかしお前は死んだちやないか。（勇士）俺は天壽を保つて病氣で死んだのだ。（聖人）それをあなたは自慢にしてゐるのか。（勇士）だから俺の方が神に守護されてゐる人間だ。（聖人）よろしい。本當のことを見せてあげやう。死神出て來い。（死神）はつ。（出て來て聖人の前に跪く）。（聖人）お前はこの方とわしとどつちが本當に强い人間か知つてゐるか。（死神）（勇士を見くだし）お前は俺に手向ふことは出來ても、おれに勝つ事は出來ない男ちやないか。お前は俺の手さきにつかはれてゐる時だけ威張れるのぢやないか。俺はお前の主人であつて、お前は俺の奴隷ぢやない。（死神）それならかうすればどうだ。お前は俺の二本指にも叶はない人間だ。（勇士）この人だつてきうだ。（死神）大ちがひだ。私はこの方にも死んでいたゞく時があるが、その時はかうして俺がこの方の前に跪いて神の御命令でございます。お苦しいでせうが、人間のために暫くおしのび下さい。さうしてこの方の足にロづけするのだ。貴樣とはわけがちがう。貴樣は死んでも後光は出ない。この方が死ぬ時は、世界中に光がみちわたる。お前達の目には見えないかも知れないが。（勇士）この方は何とおつしやる方ですか。（死神）何かさゝやく。（勇士）（おどろいて聖人の前に跪く）。（勇士）あゝ、あなたでしたか。私はあなたの爲に働いてゐるつもりでをりました。（聖人）まあ立つがいゝ、私の數は地上では隨分歪にされてゐると聞いてゐる。しかし、わかる時はわかると思つてゐた。あなたも誤解してゐた一人だ。私に逢つて、私に氣がつかない一人だ。まあ氣にしないがいゝ。しかし人を殺したことを自慢にはしないがいゝ。（勇士）恐れ入りました。（一本の枝）

漢文讀方及解釋　（一七一）

一、子曰人皆曰予知譯而納諸罟擭陷阱之中而莫之知辟也人皆曰予知擇乎中庸而不能期月守也。

二、子游曰子夏之門人小子當洒掃應對進退則可矣抑來也本之則無如之何子夏聞之曰噫言游過矣君子之道孰先傳焉熟後倦焉譬諸草木區次別矣君子之道焉可誣也有始有卒者其惟聖人乎。（論語）（中庸）

三、夫陽子本以布衣隱於蓬蒿之下主上嘉其行誼擢在此位官以諫爲名誠宜有以奉其職使四方後代知朝廷有直言骨鯁之臣天子有不僭賞從諫如流之美庶巖穴之士聞而慕之束帶結髮願進於闕下而伸其辭說致吾君於堯舜熙鴻號於無窮也。（韓愈爭臣論）

四、客舍并州已十霜歸心日夜憶咸陽無端更渡桑乾水郤望并州是故鄉。（賈島度桑乾）

風勁角弓鳴將軍獵渭城艸枯鷹眼疾雪盡馬蹄輕忽過新豐市還歸細柳營回看射鵰處千里暮雲平。（王維觀獵）

同　本試驗

設　問

一、左の人々を評論せよ。（四三）

西行、兼行、芭蕉

二、左の諸項に就いて知れる所を記せ。（四五）

鉢の木、道中膝栗毛、小說神髓、浮雲。

三、左の文を文章法上より解剖せよ。（三）

世にあればこそ望もあれ望の叶はねばこそ恨もあれしかじうき世を厭ひ誠の道に入りなむには

作　文（文語體）

卒業式告辭（校長に代りて）

國語解釋（二五四）

一、職におはしますころ八月十日あまりの月あかき夜右近の內侍に琵琶彈かせて端近くおはしますこれかれ物言ひ笑ひなどするに廂の柱によりかゝりて物もいはでさぶらへばなどかう音もせぬものいへさうざうしきとおほせらるればたゞ秋の月のこゝろを見侍るなりと申せばさもいひつべしとおほせらる御方々君たちうへ人など御前に人のいと多くさぶらへば女房とものがたりして居たるに物を投げてたまはせたるあけて見れば思ふべしや否や第一ならずばいかがと書かせたまへり御前にて物語などするついでにもすべて人には一に思はれずば更に何にかせむたゞいみじう憎まれあしうせられてあらむ二三にては死ぬともあらず一にてをあらむなどいへば一乘の法なりと人々笑ふことのすぢなめり筆紙たまはりたれば九品蓮臺の中には下品といふとも

と書きてまゐらせたればむげに思ひくんじにけりいとわろしいひそめつることはさてこそあらめとのたまはすれば人にしたがひてこそと申すそれがわろきぞかし第一の人にまた一におもはれむとこそ思はめとおほせらるるもいとをかし。（枕草子）

二、しらくものたつたの山のつゆじもにいろづく時にうち越えて旅行く君は五百重山いゆきさくみあだ守る筑紫にいたり山のそき野のそきみよと伴のべを分ちつかはしやまびこのこたへむきはみたにぐくのさわたるきはみくにがたをみしたまひてふゆごもり春さりゆかばとぶとりのはやくきまさねたつだちのをかべのみちにつゝじのにほはむ時のさくらばな咲きなむ時にやまたづのむかへまゐでむ君が來まさば。

反　歌

ちよろづのいくさなりともことあげせずとりで來ぬべき壯夫とぞおもふ。

（萬葉集藤原宇合卿遣西海節度使之時高橋連橋蟲麻呂作歌）

二、大正十二年度第二次（三九回、豫）

設　問

一、語尾、語根、語幹に就きて說明せよ。（圖）

二、左の書籍に就きて知れる所を說明せよ。（圖七）（九圖）

國歌大觀、古事類苑、國文註釋全書、古今著聞集、東關紀行

三、左の文章の構造を說明し文中の用語の活用を表示せよ。（圖）

知らず生れ死ぬる人何方より來りて何方へか去る知らず假のやどり誰が爲に心を惱まし何によりてか目を悅ばしむる。

四、左に就きて知れる所を記せ。（一圖一）

賴襄の日本外史

張載の西銘

作　文（口語體）

震災の感想。

復　文（一六三）

詩ニ云フ、戎狄是レ膺チ、荊舒是レ懲ラス。卽チ我ニ敢テ承タルナシト。父無ク君無キハ、是レ周公ノ膺ツ所ナリ。我モ亦人心ヲ正ウシ、邪說ヲ息メ、詖行ヲ距ギ、淫辭ヲ放チ、以テ三聖者ニ承ガント欲ス。豈ニ辯ヲ好マンヤ。予已ムヲ得ザルナリ。（孟子、原文五十四字）

國語解釋（二二一）

一、左の文を解釋せよ。

花山院は風流者にさへおはしましけるこそ御所つくらせ給へりしさまなどよ御車やどりにはいたじきを奥は高くはしはさがりて大きなる妻戸をせさせ給へるゆゑは御車の裝束をさながらたてさせ給ひておのづからとみの事のをりにとりあへず戸おしひらかばから〳〵と人の手ふれぬさきにさしいだされんがれうとおもしろく思しめしたる事ぞかし御調度どもなどのけうらさこそえもいはず侍りけれ六宮のたえいり給へりし御誦經にせられたりし御硯の箱見給ひき海賦に蓬萊山手長足長などこがねしてまかせ給へりしこそかばかりの箱のうるしつき蒔繪のさまくちおかれたりしやうなどのいとめでたかりしなり。（大鏡）

二、左の批評の要旨を文中の和歌俳句に引當てて說明せよ。

春の野に菫つみにとこし我ぞ野をなつかしみ一夜ねにける。（赤人）

かきわけて折れば露こそこぼれけれ淺茅に交る撫子の花。（西行）

山路來て何やらゆかし菫草。（芭蕉）

赤人は自然の素樸な戀人であつて、自然との融合がおのづからできる。これが平安朝の感傷的な詩人ならば眠り得ないであらう。西行の愛は感傷的である。彼は愛の對象であるものを捉へようとするが、それは露のやうにこぼれてしまふ。その露も彼には涙として感じられる。美は彼の心を憧れしめ誘つて行くが、捉へ得るものでなく、いつまでも滿足を與へない。芭蕉の心は西行の抱いてゐた如き感傷的な愛の否定を經てきた。この否定は個物に對する執着の否定であつて愛そのものを殺したのではない。今彼の心には對象のない曉やかな愛が動いてゐる。彼は最早や菫を摘まうとも、撫子を折らうともせぬ。彼は菫を透して普遍を眺める。そして彼の愛は菫草の一刹那の間依存してゆかしさの漣波を起す。その漣波が俳句の表現である。（文學序說）

漢文讀方及解釋（一七三）

一、子曰不愼不啓不悱不發舉一隅不以三隅反則不復也。（論語）

二、子產聽鄭國之政以其乘輿濟人於溱洧孟子曰惠而不知爲政歲十一月徒杠成十二月輿梁成民未病涉也君子平其政行辟人可也焉得人人而濟之故爲政者每人而悅之日亦不足矣。（孟子）

三、下馬登鄴城城空復何見東風吹野火暮入飛霊殿城隅南對望陵臺漳水東流不復回武帝宮中人去盡年々春色爲誰來。（岑參登古鄴城）

四、趙孝成王徳公子之矯奪晉鄙兵而存趙乃與平原君計以五城封公子公子聞之意驕矜而有自功之色

客有說公子曰物有不可忘或有不可不忘夫人有德於公子公子不可忘也公子有德於人願公子忘之也且矯魏王令奪晉鄙兵以救趙於趙則有功矣於魏則未爲忠臣也公子乃自矯而功之竊爲公子不取也於是公子立自責似若無所容者。（史記信陵君列傳）

同　本試驗

設　問

一、近松門左衛門の藝の說と本居宣長の物語の說とに就きて述べよ。（四八）

二、形象文字と音標文字とに就きて說明せよ。（九四）

三、官職、服飾、武器に關する參考書を擧げよ。（一一一）

作　文（文語體）

わが經歷

國語解釋（二五八）

一、出雲の國の多藝志の小濱に天のみあらかをつくりて水戸の神のひこ櫛八玉の神を膳夫として天の御饗たてまつる時にねぎ申して櫛八玉の神鵜になりてわたの底に入りて底のはにをくひいでて天のやそびらかをつくりてめのからを刈りて燧臼につくりこものからを燧杵つくりて火を鑽りいでて申しけらくこのあが燧れる火は高天の原には神產巢日御祖の命のとだる天の新巢のすすの八拳たるまで燒きあげ地の下は底つ岩根に燒きこらして栲繩の千尋繩うちはへ釣らせる海人が大口の尾翼鱸さわさわにひきよせあげてさきたけのとををとをに天の眞魚咋たてまつらむと申しき。（古事記）

二、嵯峨の山千代の古道あととめてまた露わくる望月の駒。（後白河院栖霞におはしける駒引の引分の使にまゐりて）（藤原定家）

世の中の晴れゆく空に降る霜のうき身ばかりぞおきどころなき。（五十首歌奉りし時、雜圖）

みどり子のはひたもとほりあさよひにねのみぞわがなくきみなしにして。

（大納言大伴卿薨之時歌、金服軍）

三、大正十三年第一次（四〇回、豫）

設　問

一、左の人物及著作の時代を問ふ。（四九）

松永貞德、曾根好忠、玉　勝　間、四方赤良、頓　　阿、落窪物語、菟玖波集

正岡子規、大和物語、折焚柴の記、たけくらべ、日本永代藏、東條緣、性靈集

北村透谷

二、左の文中の動詞形容詞助動詞を摘出して其の活き方を法(段)に當てて示せ。(六)

凡保元平治より以來の亂りがはしさに賴朝と云ふ人もなく泰時といふ人もなからましかば日本國の人民いかゞなりなましこのいはれをよく知らぬ人は故もなく皇威の衰へ武備かちにけると思へるは誤なり。

三、左の事項に就きて知れる所を記せ。(一四二)

(イ)　魏の曹操父子の文學上に於ける事蹟。

(ロ)　知行合一。

四、左の文を鑑賞批評せよ。(一一六)

ジャン〳〵と放課の鐘が鳴る。今まで靜かだつた校舍內が俄に騷がしくなつて、彼方此方の敎室の戸が前後して慌たゞしくバツ〳〵と開く。と、その狹い口から、物の眞黒な塊がドツと廊下へ吐出され、崩れてばら〳〵の子供になり、我勝に玄關脇の昇降口を目がけて駈出しながら口々に何だか喚く。たゞもう校舍をゆすつてワーツと云ふ聲の中に、無數の圓い顏が默つて大きな口を開いて曝つてゐるやうで、何を喚いてゐるのか分らない。で、それが一旦昇降口へ吸込まれて此處で又ごた〳〵と入亂れ重なり合つて、腋の下から才槌頭がひよつと出たり、外套へ腕がぶつかつたり、靴の踵が生憎と霜燒の足を踏んだりして上を下へとこねかへした擧句にワツと門外へ押出して、東西へ散々になる。

仲善二人肩へ手をかけあつて行く前に、辨當箱をポンと抛り上げてはチヨイと受けて行くいたづらがある。その隣は往來の石塊を蹴飛ばし〳〵行く。誰だかあとで遊びに行くよと喚く。鞄を取りに行かないかと云ふ聲もする。君々と呼ぶ背後で、馬鹿野郎と誰かゞ罵る。あゝ痛たツ。何でい、ワーイ、といふ聲がガヤ〳〵と入れちがつて、友達は皆道草を喰つてゐる中を、私一人は駈脫けるやうにして側視もせずにせつせと歸つて來る。

家の橫町の角迄來て樣たいやうな心持になつて、竊とその方角を覗る。果してポチが門前へ迎へに出てゐる。私を見つけるや逸散に飛んで來て飛び付く。舐める。何だか『兄さん！』と言つたやうな氣がする。若し本包に、辨當箱に、草履袋で兩手が塞つてゐなかつたら、私は此時ポチを捉まへて何をやつたか分らないが、それがあるばかりで、どうする事も出來ない。據どころなく頭を撫でゝ遣るだけで不承して又步き出す。と、ポチも忽ち身をくねらせて、橫飛にヒヨイと飛んで駈出すかと思ふと、立止つて、私の面を看ておどけた目付ををする。追付くと

又逃げて又その目つきをする。かうしてふざけながら一緒に歸る。

玄關から大きな聲で「只今！」といひながら内へ駈込んで、いきなり本包を其處へ抛り出し、慌てゝ辨當箱を開けて今日のお菜の殘りと稱して、實は喫べたかつたのを我慢して半分殘して來た。それをポチに遣る。それでも足らないので、お八ツにお煎を三枚貰つたのを、せびつて五枚にして貰つて二枚は喫べて、三枚はスポチにお遣習をおしといふ。このお遣習程私の嫌ひな事はなかつたが、之をしないと、ちきポチを樂てると言はれるのが辛いので、渋々内へ入つて、形の如く本を取出し、少しばかりおんによこ〳〵とやる。それでお終だ。あんまり早いねと母がいふのを、空耳潰して、つと外へ出でゝ、ポチ來い、ポチ來い、と、呼びながら、近くの原へ一緒に遊びに行く。

それが私の日課で、ポチでなければ夜も日も明けなかつた。（平凡）

作　文（口語體）

五月初の感想。

復　文（一六題）

天下ニ達尊三アリ。爵一曰一德一、朝廷ハ爵ニ如クハ莫ク、鄕黨ニハ齒ニ如クハ莫ク、世ヲ輔ケ民ニ長タルハ德ニ如クハ莫シ。惡ンゾ一ヲ有シ、以テ其二ヲ慢ルコトヲ得ンヤ。

（孟子。離文三十九字）

國語解釋（二二題）

一、四月の末つ方より法皇（御宇多）御惱み重くならせ給へば天下のさわぎ思ひやるべし御門もいみじくおぼしなげき御修法どもいとこちたくまた〳〵はじめ加へさせ給へどしるしもなくて日々におもらせ給へば夜晝となくいかに〳〵ととぶらひ奉らせ給ふ若き上達部などは直衣に袴ばきみして夜中曉となく馳せありき給ふめり今はむげにたのみ少き御馬にて馳せありき給ふめり今はむげにたのみ少きよし聞こゆれば大覺寺殿へ御幸あり萬の事ども聞こえさせ給ふうへの一つ御腹の二品法親王性圓と聞こゆるをいとかなしきものに思ひ聞こえさせ給ひて此の大覺寺にそこらの御莊御牧などをよせ給ふ法のあるじとしておはしますべくおぼしおきてけりきやうの事など見給へざらむとうしろめたからぬさまなどぞ聞こえさせ給ひける。（榮華）

二、袖にふけさぞな旅ねのゆめもみじ思ふ方より通ふ浦風。（和歌所にてをのこども旅の歌つかうまつりしに）（藤原定家）

神なびの山をすぎゆく秋なればたつた川にぞぬさはたむくる。（神なびの山を過ぎて龍田川を渡りける時に紅葉の流れけるをみてよめる）（清原深養父）

漢文讀方及解釋（一七七）

一、小人間居爲不善無所不至見君子而后厭然揜其不善而著其善人之視己如見其肺肝然則何益矣此謂誠於中形於外故君子必愼其獨也。（大學）

二、廣土衆民君子欲之所樂不存焉中天下而立定四海之民君子樂之所性不存焉君子所性雖大行不加焉雖窮居不損焉分定故也君子所性仁義禮智根於心其生色也睟然見於面盎背施於四體不言而喩。（孟子、盡心上）

三、昔聞洞庭水今上岳陽樓吳楚東南坼乾坤日夜浮親朋無一字老病有孤舟戎馬關山北憑軒涕泗流。（杜甫、登岳陽樓）

四、古之聖王愛日以來求辨色而視朝荀少安焉而至於日出則終日爲之不給以少而言之一日而廢一事一月則可知也一歲則事之積者不可勝數矣欲事之無繁則必勞於始而逸於終戾興而晏罷「天子未退則宰相不敢歸安於私第宰相日昃而不退則百官莫不震慄盡力於王事而不敢宴游如此則纖悉靡微莫不舉矣」天子求治之勤過於先王議者不務王季之晏朝而稱舜之無爲不論文王之日昃而論始皇之量

書此何以率天下之至那臣敢曰議精某如自上率之則塞蔽決矣。（蘇軾決壅蔽）

國　本試驗

改　閱

一、改閱する國文學者の一を擧げて評論せよ。（五〇）

二、左の文章を文章法上より解釋せよ。（八〇）

昔は五たび繰りしあとをたづねて天日嗣の位にそなはり今は八隅知る名をのがれて藐姑射の山にすみかをしめたり。

漢　文（文語體）

夏季休業。

國語解釋（二六〇）

一、雲間もなく明け暮るゝ日數に添へて京の方もいとゞおぼつかなくかくながら身をはふらかしつるにやと心細うおぼせどかしらさし出づべくもあらぬ空のみだれにいでたちまゐる人もなし二條院よりぞあながちにあやしき姿にてそばち參れるみちかひにてだに人か何ぞとだに御覽じわくべくもあらずまづおひはらひつべき賤の男のあはれにむつまじう思さるゝも我ながちかた

じけなうくしにける心のほど思ひしらる御文には あさましくをやみなき頃の氣色にいとゞ空さへ閉づる心地してながめやる方なくなむ。

浦風やいかに吹くらむ思ひやる袖うちぬらす波間なきころ。

あはれに悲しきことゞもを書きあつめたまへりひきあくるよりいとゞみぎはまさりぬべくかきくらすこゝちしたまふ。（源氏物語、明石）

二、やすみしゝわがおほきみのたかしらすやまとの國はかみろぎの神のみよゝりしきませる國にしあればあれまさむ御子のつぎ〳〵天の下しらしまさむと八百萬千年をかねてさだめけむ平城のみやこはかぎろひの春にしなれば春日山御笠の野邊に櫻花このくれがくり貌鳥はまなくしば鳴き露霜の秋さりくればいこま山飛火が岡に萩の枝をしがらみ散らしさをしかは妻呼びとよめ山見れば山もみがほし里見れば里も住みよしものゝふの八十伴男のうちはへて里なみしけば天地のよりあひのきはみ高世に榮えゆかむと思ひにし大宮すらを恃めりしならの京を新世の事にしあればおほきみのひきのまにまに春花のうつろひかはりむら鳥のあさたちゆけば剣竹の大宮人のふみならし通ひし道は馬も行かず人も行かねば荒にけるかも。（萬葉集、巻卓集故京荒作歌）

（註、大正十三年度第二次（第一回、卷）

一、左の文の眞なる形式主義を例示せよ。（八）

二、左の文中の誤謬形容詞を抽出して其の若き方を法（段、卷）に書てて示せ。（九）

若し道のほとりに呼くも鳳輦を先立てゝ御族をあげられ臨幸の嚴重なる事も待らむに參りあへばその時の遲速いかゞ侍るべからむ。

三、左の文を鑑賞批評せよ（二一九）

水車よ、わき目もふらずに廻つてゐるおまへには今寺の森から流れて來た鐘の響が聞えなかつたか。あれ、まだ幽かな餘韻が顫うてゐるではないか。

母屋の軒を夕餉の煙がゆるやかに捲でるのも、納屋の隅で藁葺が頻りに叫び鋸がヒョ〳〵と鷹へながら塀につかうとしてゐるのも、晝と夜とを區分する鐘の響といふ假りの掟に進ふ毎日の行事なのだ。

萱葺の家、鍬を握つた若者、續いでゐた老媼、鳴き續けた蟬、赤く熱して行く林檎、一日の已の勤に疲れたそれ等は、今自然に惠まれた休養の夜に入るのだ。

水車よ、それだのにおまへばかりは、自然の懐に抱かれて均しく此の惠に浴することが出來ぬのだ。それでもおまへは些の泣言を漏らさずに「是が俺の勤だ。若し俺が怠けたなら杵はどう

なる。臼はどうなる。又その中の穀物はどうなる。俺の責任は身に餘るほど重いのだ」と云つた樣な、淸い床しい。そして男々しい心で、今夜も獨り深夜の靜寂の中を廻らうとするのだらう。

水車よ、曩の日私が「おまへは水の爲に廻るのだ、水の爲に强要されて、心にもない勞務に服するおまへは醜い弱者だ」と嘲つた時、おまへは悲しい樣な怨しい樣な聲をあげて、泣いて訴へた事があつた。あれは私の謬見であつた。今のおまへの美しい態度で、「おまへは水の爲に廻るのではない、人の爲、世の爲に廻るのだ。」といふ眞意がよく理解された。同時に苦しい奴隷の仕事を甘んじて受けてゐるおまへを男々しい勇者といひたい。

水車よ、私はおまへに心ゆくばかりの休養を與へたい。が、それは到底望まれない。——水の逆しまに流れぬ間は、潺々として限りなき水は、痛ましくもおまへを目がけて碎けよとばかりぶつかつてゐる。かうしてお前は次の日も次の日も、否來る年も、來る年も、撓まず屈せず勤め勵んで、そして前の車のやうに、苔むし朽ちて後、殪れるまで不斷の努力を續けるだらう。

問、左の事項に就きて知れる所を記せ。（一四四）

（イ）蒙求　（ロ）井田

作文（口語體）

わが時勢觀。

復文（一六四）

（イ）善政ハ善政ノ民ヲ得ルニ如カザルナリ。（十字）

（ロ）我レ官守ナク、我レ言責ナキナリ。卽チ吾ガ進退豈ニ綽々然トシテ餘裕アラザランヤ。（二十二字）

國語解釋（二二六）

一、或人いはく人の世にある習慣慢を先としてよく穩便なるは少しあるひは自由の方にておだやかならずこれは我が涯分をはからずさしもなき身をたかく思ひあげて主をもかろしめ傍輩をも下るなり或は偏執の方にてかたくなりこれは我が思ひたる事をいみじうして人のいふ事を用ひざるなり或は世にかはれるふるまひありこれは昔をのみいみじと思ひて今の世に從はぬなり或は折節に似ぬをこありこれは內々よくなれにしかばと思ひて晴に出でゝ人をならしもしはうちとけ遊ぶ所に交りて我は未だみだれぬまゝにことうるはしう紐さしかためて人をしらかし其の座をさますなり。

二、いく世しもあらじわが身をなぞもかく蜑のかるもに思ひみだるゝ。
なげきをばこりのみつみてあしびきの山のかひなくなりぬべらなり。
過ぎて行く秋のかたみにさをしかのおのが鳴く音も惜しくやあるらむ。

漢文解釋（一八一）

一、子貢曰如有博施於民而能濟衆如何可謂仁乎子曰何事於仁必也聖乎堯舜其猶病諸夫仁者已欲立而立人已欲達而達立人能近取譬可謂仁之方也而已。（論語雍也）

二、明道先生教人自致知至於知止誠意至於平天下灑掃應對至於窮理盡性循循有序病世之學者舍近而趨遠處下而闚高所以輕自大而卒無得也。（小學、善行）

三、避賢初罷相樂聖且銜杯爲問門前客今朝幾個來。（罷相作、李適之）

秦時明月漢時關萬里長征人未還但使龍城飛將在不教胡馬度陰山。（從軍行、王昌齡）

四、昔余少年從子瞻遊有山可登有水可浮子瞻未始不蹇裳先之有不得至爲之悵然移日至其翩然獨往逍遙泉石之上擷林卉拾澗實酌水而飲之見者以爲仙也蓋天下之樂無窮而以適意爲悅方其得意萬物無以易之及其既厭未有不洒然自笑者也譬諸飲食雜陳於前要之一飽而同委於臭腐夫孰知得失之所在惟其無愧於中無責於外而姑寓焉此子瞻之所以有樂於是也。（蘇轍、武昌九曲亭記）

問本試驗

一、江戸時代の歌論とその時代の歌との關係を述べよ。（五一）

二、左の書を說明せよ。（九六）（五四）

東　雅、詞の八衢、和訓栞、本朝文粹、新葉集

三、左の文を文章法上より解剖せよ。（一一）

やう〳〵天の下にもあぢきなう人のもの惱みぐさになりていとはしたなき事多かれど忝けなき御心ばえの類なきを頼りにて交らひたまふ。

作文（口語體）

我等の進むべき途。

國語解釋（二六三）

一、たまきはる、うちのかぎりは、平らけく、安くもあらむを、こともなく、もなくもあらむを世の中のうけくつらけく、いとのきて、痛き瘡には、からしほを、そゝぐちふが如く、ますますも、重き馬荷に、うはにうつと、いふことのごと、老いにてある、わがみの上に、病をら、加へてあれば、晝はも、歎かひくらし、夜はも、息づきあかし、年長く、病みしわたれば月か

さね、うれへさまよひ、こと〳〵は、死ななとおもへど、さばへなす、騒ぐこどもを、うつては、死には知らず、見つゝあれば、心はもえぬ、かにかくに思ひわづらひねのみしなかゆ。

（萬葉集、老身重病經年辛苦及思兒等歌）

二、月まち出でゝ出でたまふ御供にたゞ五六人ばかり下人もむつまじき限りして御馬にてぞおはすなる更なる事なれどありし世の御ありきに異なり皆いと悲しう思ふ中にかの御禊の日假の御隨身にて仕うまつりし右近の尉の藏人得べきかうぶりもほどすぎつるを終に御簡けづられてつかさも取られてはしたなければ御供に參るうちなり賀茂の下の御社をかれと見わたすほどふと思ひ出でられて御馬の口をとる。

ひきつれて葵かざししそのかみを思へばつらし賀茂のみづがき。

といふを實にいかゞ思ふらむ人よりけに花やかなりしものをと思すも心ぐるし君も御馬より下りたまひて御社の方を拜みたまふとて神に罷申したまふ。

浮世をば今ぞわかるゝとゞまらむ名をばたゞすの神にまかせて。（源氏物語）

五、大正十四年度第一次（四二回、豫）

一、左の學者の國語學上に於ける重要なる著書を擧げよ。（九七）

僧契沖、新井白石、富士谷成章、谷川士清、本居宣長

二、左の文章に就きて文の成分を說明し且文中の用言を拔出してその活用表を作れ。（一一）

行く川の流は絶えずしてしかももとの水にあらずよどみに浮ぶうたかたはかつ消えかつ結びて久しく止ることなし。

三、左の事項に就きて知れる所を記せ。（一四五）

（イ）三綱五常、（ロ）四六文

四、左の文を鑑賞批評せよ。（一二一）

四月ももう末になつた。窓の前の樹々の葉は日毎に濃厚な葉綠素を增して行く。日毎に芳烈な生々した色を現して行く。

私には木の葉が無意識に日光を吸收し、無造作に同化作用を營んで居るとは思はれない。ホラ、木の葉と木の葉とが觸れ合うて、あんなに美しい、華やかな音樂と色彩とを生んでゐるではないか。そして葉一枚が如何に巧妙に複雜に出來てゐるだらう。如何に統一的な有機的な作用を營み續けてゐるだらう。

植物は無生物だなんて、そんな馬鹿らしいことは信じられない。誰が木の葉の動くのを見てどうして人生の苦痛と小鳥の嗟嘆と、そしてかの野獸の悲哀とに似てゐることを否定することが出來ようぞ。

見なさい、ホラ、葉はお互に手を伸ばし足を擴げて、少しでも多くの日光の浴び、少しでも多く生長しようと努力してゐるぢやないか。人間社會にばかり生存競爭の悲劇があるのではない。人間にばかり發明と創造とがあるのではない。

彼等には言語は無いかも知れない。しかし、どうして彼等に意志が無いと斷言し得ようぞ。彼等は沈默の間に格闘を行ひ狙擊をやつてゐるのである。

彼等は努力といふ寶石をもつてゐる。そして向上と努力とは或程度まで隨伴するものだと知つてゐる。努力は常に清新を齎し變化を生むものだと思つてゐる。

不斷の努力に屈託せざる木の葉よ。

私はお前のひるがへるのを見てゐながら、お前がいつまでも人間と同じ事をやつてゐるのだと思つてゐる。（作文三十三講）

作　文（口語體）

新　緣。

復　文（一六五）

（イ）自暴ノ者ハ、與ニ言フアルベカラザルナリ。自棄ノ者ハ、與ニ爲スアルベカラザルナリ。言禮義ヲ非ル。之ヲ自暴ト謂フナリ。吾ガ身仁ニ居リ、義ニ由ル能ハズ。之ヲ自棄ト謂フナリ。（孟子離婁上、原文四十字）

（ロ）人其ノ田ヲ舍テヽ、人ノ田ヲ芸ルヲ病ム。人ニ求ムル所ノ者重クシテ、自ラ任ズル所以ノ者輕シ。（同、盡心下、原文二十三字）

國語解釋（二二八）

一、ついでなき事には侍れど物怪と人の申しゝ事どものさせる事なくてやみにしはさきの一條院の御卽位の日大極殿の御裝束すとて人々集りたるに高御座のうちに髮つきたるものゝ頭の血うちつきたるを見つけたりけるあさましくいかゞすべきと行事思ひあつかひてかばかりの事をかくすべきかはとて大入道殿にかゝる事なむ候ふと何がしのぬしゝて申させけるをいと眠たげなる御氣色にもてなさせ給ひて物も仰せられねばもし聞しめさぬにやとて又御氣色給はれどうちねぶらせ給ひてなほ御答なしいと怪しくさまでおほとのごもり入りたるとは見えさせ給はぬに

いかなればかくておはしますぞと思ひてとばかり御前に候ふにうち驚かせ給ふさまにて御裝束は果てぬるにやと仰せらるゝにきかせ給はぬやうにてあらむと思召しけるにこそと心得て立ちたまひにけりげにかばかりの祝の御事また今日になりてとまらむも忌々しきにやをらひきかくしてあるべかりける事をこゝろぎもなく申すものかなといかに思召しつらむと後にぞかの殿もいみじく悔やしがり給ひけるさる事なりしかな。（大鏡）

二、水の面におふるさつきの浮草のうきことあれや根を絶えて來ぬ。（友だちの久しうまうでござりけるもとによみて遣しける）（凡河内躬恒）

春深くたづねいるさの山の端にほの見し雲の色ぞのこれる。（百首の歌奉りし時）（藤原良經）

漢文讀方及解釋（一八四）

一、堯舜帥天下以仁而民從之桀紂帥天下以暴而民從之其所令反其所好而民不從是故君子有諸己而后求諸人無諸己而后非諸人所藏乎身不恕而能喩諸人者未之有也。（大學）

二、孟子曰覇者之民驩虞如也王者之民皞皞如也殺之而不怨利之而不庸民日遷善而不知爲之者夫君子所過者化所存者神上下與天地同流豈曰小補之哉。（孟子、盡心）

三、范文正公爲參知政事時告諸子曰吾貧時與「汝母養吾親汝母躬執爨而吾親甘旨未嘗充也今而得厚祿欲以養親親不在矣汝母亦已蚤世吾所最恨者忍令若曹享富貴之樂也」吾吳中宗族甚衆於吾固有親疎然吾祖宗視之均是子孫固無親疎也苟祖宗之意無親疎則饑寒者吾安得不恤也自祖宗來積德百餘年而始發於吾得至大官若獨享富貴而不恤宗族異日何以見祖宗於地下今何顏入家廟乎。（小學外篇、嘉言）

四、誰家玉笛暗飛聲散入春風滿洛城此夜曲中聲折抑何人不起故園情。（李白、春夜洛城聞笛）

獨在異鄕爲異客每逢佳節倍思親遙知兄弟登高處遍挿茱萸少一人。（王維、九月九日憶山東兄弟）

問　本試驗

設　問

一、源氏物語の文章の特色を述べよ。（五四）

二、平家物語、太平記を比較評論せよ。（五六）

三、國語のアクセントに就いて知る所を述べよ。（九八）

作　文（文語體）

わが國文研究の態度。（二六六）

國語解釋

一、宮に始めて參りたる頃物のはづかしき事數知らず誤も落ちぬべければ夜々まゐりて三尺の御
几帳のうしろにさゝらふに繪など取り出でゝ見せさせ給ふだに手も得さし出づまじうわりなし
これはとあうかれはかゝりなどのたまはするに高坏に參りたるおほとなぶらなれば髪のすちな
どもなか〳〵壺よりはけそうに見えてまばゆけれと念じて見などすいとつめたき頃なればさし
出だされ給へる御手のわづかに見ゆるがいみじうにほひたる薄紅色なるは限なくめでたしと見
知らぬさとび心地にはいかゞはかゝる人こそ世におはしましけれと驚かるまでぞまもり參らす
る間にはとくなど念がるゝ高城の神もしばしなど仰せらるゝをいかですちかひても御覽ぜられ
むとて風したれば御格子もまゐらず女官參りてこれはなたせ給へといふを女房聞きてはなつを
待てなど仰せらるれば笑ひてかへりぬ。（枕草子）

二、わがさかりまたをちめやもほとほとに寧樂のみやこを見ずかなりなむ。（師大伴卿五首の一）
家さかりいまさわぎそもとゝめかね山がくりつれ心どもなし。（繼繩未息更作歌五首の一）
大伴のなにおよゆきおびてよろづよにたのみし心いづくかよせむ。（十六年甲申春二月安積皇
子薨之時、内舍人大伴宿禰家持作歌六首の一）

六、大正十四年度第二次（高三用、理）

一、左の文章中の主語とそれに對する述語を指示し次に助詞を拔出してその活用表を作れ。（一三）
年頃思ひつる事果し侍りぬ聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれそも參りたる人毎に山へ登り
しは何事かありけひゆかしかりしかど神へ參ることこそ本意なれと思ひて山までは見ず。

二、平安時代の著名なる物語及日記の著名を記せ。（一四六）

三、左に擧きて知れる所を記せ。（五七）
（イ）　漱泊閑閑の學、（ロ）建安の七子。

四、左の文章に擧きて傍線を附したる語を說明し且つ文中に現はれたる芭蕉の心持を述べよ。（一二四）
二十五日に京都の清水にあつた臺德太子作の千手觀音を移して本尊にしたといふ新清水寺の茶
店にこの地の門人泥足の發起で俳諧を催した。こゝは高臺で難波の町を眼下に見て秋の澄んだ
氣は遠く淡路島をも望ませて泥足支考遊力之道車庸酒堂畦止惟然龜柳などすべて連衆は十二人
であつた。發句はもとより翁のでと云ふことであつた。芭蕉は、

　此道や行く人なしに秋の暮

と云ふ句をもつて居た。これは今の彼のそのまゝの胸中であつた。「此道」とは何ぞと問はれても

彼自らこれに答へる術を知らなかつた。「此道」と云ふより仕方がない句の表では薄の動いてる菊のほちほち咲いてる細い松の所々に噛いてる道ではある。しかし實は薄無き菊無き松無き土も無き空も無き一切無きそして又一切のある「此道」であるのだ。「此道」を自分はたつた一人進んで行くのだ。二千餘人の俳弟子それは今は自分と離れたものであつた。「此道」はもとよりもはや俳諧の道などいふ名を附けるべき道ではない寂を味つた寂に醉うた寂に遊んだ。しかし「此道」を獨り行く寂しさは味ふとか遊ぶとかいふものでは無かつた戰慄であつた。此道を行くことが大歡喜である境には芭蕉はまだ到らなかつた。この句を立句に出さうかとしたが芭蕉はこれを紙に書いて見て自らの句より噴く氷のやうな氣に耐へられなかつた。そして又人にも解されまいとも思つた。この句は秘すべき句で危險な句だと思つた。無理に引きおろして土道にしてそして通行人をあしらつて見た。さすがに通行人の姿をあしらひはしなかつた。

　人聲や此道歸る秋の暮

と云ふ句にして見た。これを立句に提供しようと思つたが、何だか細工から來た抜しさもあつた。試みに脇句出して見た。

「どちらが宜からうか」

と彼は近くに居た支考を見て云つた。

支考は小さいが鋭い目で暫く見詰めてた。

「此道の方で御座いますな獨歩この後に從ひまつる者は誰もありますまいな……」

此道や……行く人なしに……秋の暮」

支考は二三度なほ此の句を誦して見た。

わかつたかなと一旦は芭蕉も驚いたが、やはりわしの胸の通りにはわからぬのだと思つた。三十歳を一つ出たゞけの支考にまだこれはわからぬ筈。しかしそのうちにはわかるかも知れぬ。よしわからずとも支考もわからず一切の俳弟子にわからずとも後世にわかる人があらう。

「それでは此道の方にしよう」

かう云つて芭蕉はしばらく考へてこれに前書を付けて執筆に書かせた。前書は「所思」とあつた。芭蕉は後世を對象にした。後世の爲にこの二字を附けて解する者を地下に待つ心で居た。

「所思、此道や行く人なしに秋の暮」

と執筆は讀み上げた。

「峽の畠の木にかゝる蔦」

といふ泥足の脇が据ゑられた。かうして「此道」は薄の動いてる菊のほちほち咲いてる細い松の所々に雪いてる道にされてしまつた。芭蕉は豫定通りと云ふ感がした。

かうして歌仙は進んだ。釣瓶落しの秋の日は半歌仙より上に運ぶことを許されなかつた。水のやうな空気の一時夕日に燻つた中に遠く淡路島の浮上るけしきを芭蕉は縁に出て句案の疲を醫しつゝ眺めた。

作　文（口語體）

暁　秋。

復　文（一六五）

一、士ハ以テ弘毅ナラザルベカラズ。（論語、原文七字）

二、人能ク道ヲ弘ム。道人ヲ弘ムルニアラズ。（同上、原文八字）

三、富ト貴トハ是レ人ノ欲スル所ナリ。其ノ道ヲ以テ之ヲ得ザレバ處ラザルナリ。（同上、原文十八字）

國　語　解　釋（二三一）

一、おもそみめよく品高けれども怪しくいやしきが能あるに立ち並ぶをりはその品そのみめも必

ず思ひけたるゝものなりたとへば花のあたりのときは木はうち見るにたとしへなくさめたれども春の日數くれ峰の嵐過ぎたる後に緑ばかり殘りてかりの匂留まらざるが如しされば桃李は一旦の榮花なり松樹は千年の貞木なりといへりいみじくありて身の能なきなきが一人あるを見るだに能あるを思ひ出づるならひなり況や能に並ぶ折のけぢめをやいかに況や同じ様なるが一人は能ありて一人は能なきをや中にも世の中の變り行くさま昔よりは次第に衰へもて行くにつけつゝ道々の藝能も又父祖には及び難き習なれば藍よりも青からむことは誠に稀なりといへども形の如くなりとも箕裘の業をつがざらむくちをしかりぬべし。

二、すみよしと蟹はつぐともながるすなひとわすれ草生ふといふなり。（あひしれる人の住吉にまうでけるによみてつかはしける）（壬生忠岑）

あすか川ふちにもあらぬわがやどもせにかはりゆくものにぞありける。（家をうりてよめる）（伊勢）

漢文讀方及解釋（一八七）

一、（イ）子曰不患無位患所以立不患莫己知求爲可知也。（論語）

（ロ）子夏曰日知其所亡月無忘其所能可謂好學也已矣。（同上）

（八）　孟子曰教亦多術矣予不屑之教誨也者是亦教誨之而已矣。（孟子）

二、象犀珠玉怪玲之物有悅於人之耳目而不適於用金石草木絲麻五穀六材有適於用而用之則弊取之則竭悅人之耳目而適於用用之而不弊取之而不竭賢不肖之所得各因其才仁智之所見各々隨其分才分不同而求無不獲者惟書乎。（蘇軾、李氏山房藏書記）

三、子房未虎嘯破產不爲家滄海得壯士椎秦博浪沙報韓雖不成天地皆震動潛匿遊下邳豈曰非智勇我來圯橋上懷古欽英風唯見碧水流曾無黃石公嘆息此人去蕭條徐泗空。（李白、經下邳圯橋懷張子房）

問本試驗

設問

一、左の事項に就いて述べよ。（五八）

風俗歌、安曲、時代物、幸若舞、旋頭歌

二、德川文學に現はれたる武家精神に就いて述べよ。（六一）

三、現代文（文語體）の文法と中古文の文法との相違せる主要點を擧げよ。（一五）

作文（文語體）

運動競技についての感想。

國語第四篇（二六九）

一、廣陵といふ手をあるかぎり彈きすましたまへるにかの岡邊の家も松の響波の音にあひて心ばせある人は身にしみて思ふべかめり何とも聞きわくまじきこのもかのもしわぶる人どもゝすゞろはしくて濱風をひきありく入道もえ堪へで供養法たゆみて急ぎ參れりさらに背きにし世の中も取り返し思ひ出でぬべく侍る後の世に願ひ侍る所のありさまも思ひたまへらるゝよの有樣かなとなくなくめできこゆわが御心にも折々の御あそびその人かの人の琴笛もしは聲の出でしさま時々につけて世にめでられたまひしありさま帝よりはじめ奉りてもてかしづきあがめられ奉りたまひしを人の上もわが御身の有樣も思し出でられて夢のこゝちしたまふまゝにかき鳴らしたまへる聲も心すごくきこゆふる人は涙も留めあへず岡邊に琵琶箏の琴取りにやりて入道琵琶の法師になりていとをかしうめづらしき手一つ二つ彈き出でたり箏の御琴まゐりたれば彈きたまふもさま〴〵いみじうのみ思ひきこえたりいとさしもきこえぬ物の音だに折からこそはまさるものなるを遙々と物の滯なき海面なるになか〳〵春秋の花紅葉の盛なるよりはたゞそこはかとなうしげる陰どもなまめかしき水難のうちたゝきたるはたが門さしてと哀におぼゆ。（源氏物語）

二、たまきはるうちのかぎりは平らけく安くもあらむをこともなくもあらむをよの中の憂けくつ

らけくいとのきて痛き疵には鹹鹽を漬くちふが如くます〳〵も重き馬荷にうはにうつといふこ
とのごと老いにてあるわが身の上に病をら加へてあれば妻はも歎かひくらし夜はもいきづきあ
かし年長く病みにしわたれば月かさねうれへさまよひこと〳〵は死なゝとおもへどさばへなす
驕ぐこどもうつてゝは死にはしらず見つゝあれば心はもえぬかにかくに思ひわづらひねのみし
なかゆ。（萬葉集）

七、大正十五年度第一次（四四回、妻）

設問

一、「べレ」「なリ」「たリ」「なむ」「や」「か」の各種の用例を擧げその意味を說明せよ。（一六）

二、現代文（日露戰爭以後の文章）の特徵に就いて述べよ。（六一）

三、談林派、桂園派、明星派、アララギ派に就いて知れる所を記せ。（六二）

四、左の事項に就いて知れる所を記せ。（一五七）

（イ）三體詩、古文眞寶

（ロ）訓詁學と性理學

作文（口語體）

旅に出て。

漢文（一六五）

（イ）吾、夏ヲ用ヒテ夷ヲ變ズル者ヲ聞ク。未ダ夷ニ變ゼラルゝ者ヲ聞カザルナリ。
（孟子、原文十四字）

（ロ）陳良ハ楚ノ產ナリ。周公仲尼ノ道ヲ悅ビ、北中國ニ學ブ。北方ノ學者未ダ之ヨリ先ンズ
ルアル能ハザルナリ。（同上、原文二十八字）

國語解釋（二三三）

一、或人城外やし給へると云へば遠國にはまからず和泉の國にこそ貫之のぬしの御任に下りて侍
りしかありとほしをば思ふべしやはと詠まれたりし旅のともにも候ひき雨の降りしさまなど語
りしこそふる草子にあるを見れば程へたるこゝちし侍るに昔にあひたる心ちしておかしかりし
がこの侍もいみじう興じて紫樹が妻に女どもこそ今少しこまやかなることゝもは語られめと言
へばわれは京人にても侍らず高き宮仕などもし侍らず若くよりこの翁にそひて候ひにしかばは
かばかしき事をも見給へぬものをばといらふればいづれの國人ぞと問ふ陸奥の國安積の沼にぞ
侍りしといふいかで京には來しぞと問へばその人とはえ知り奉らず歌よみ給ひし北方おはせし

守の御任にぞのぼり侍りしといふに中務の君にこそと聞くもおかしくなりぬいといたきことかな北方をたれとか聞こえしよみ給ひけむ歌は覺ゆやといへばその方に心もえで覺え侍らずたゞのぼり給ひしに逢坂の關におはしてよみ給へりし歌こそ所々おぼえ侍れとて

都には待つらむものを逢坂の
關まで來ぬと告げややらまし

などいとたど〳〵しげに語るさままことに男にたとしへなし。

二、（イ）ひさかたのなかに生ひたる里なれば光をのみぞ頼むべらなる。（桂に侍るける時に七條中宮とはせ給へける御かへりごとに奉りける）（伊勢）

（ロ）松もひき若菜もつまずなりぬるをいつしかさくらはやも咲かなむ。（朱雀院の子日におはしましけるにさはる事侍りてえつかうまつらずして延光朝臣につかはしける）（左大臣）

（ハ）もしほくむ袖の月影おのづからよそにあかさぬ須磨の浦人。（和歌所の歌合に海邊月といふことを）（藤原定家）

漢文讀方及解釋（一九〇）

一、（イ）君子尊德性而道問學致廣大而盡精微極高明而道中庸溫故而知新敦厚以崇禮。（中庸）

（ロ）子曰不憤不啓不悱不發舉一隅不以三隅反則不復也。（論語）

二、滕文公爲世子將之楚過宋而見孟子孟子道性善言必稱堯舜世子自楚反復見孟子孟子曰世子疑吾言乎夫道一而已矣成覸謂齊景公曰彼丈夫也我丈夫也吾何畏彼哉顏淵曰舜何人也予何人也有爲者亦若是公明儀曰文王我師也周公豈欺吾哉。（孟子、滕文公上）

三、李沆爲相時王旦甫參政沆喜讀論語嘗曰爲宰相如論語中節用而愛人使民以時兩句尚不能行聖人之言終身誦之可也沆日取四方水旱盜賊奏之旦謂細事不足煩上聽也沆曰人主少年當使知人間疾苦不然血氣方剛不留意聲色犬馬則土木甲兵禱詞之事作矣吾老不及見此參政他日之憂也。（十八史略）

四、東郡趨庭日南樓縱目初浮雲連海岱平野入青徐孤嶂秦碑在荒城魯殿餘從來多古意臨眺獨躊躇。（杜甫、登兗州城樓）

日本試驗

設問

一、古今集より新古今集までの和歌の展開を略述せよ。（六四）

二、左の書に就きて知れる所を記せ。（九九）（六五）

和名類聚抄、濱松中納言、鉢かつぎ、椿說弓張月、冠辭考。

三、西洋文典の日本文法に及ぼしたる影響を略述せよ。（二〇）

作　文（文語體）

方丈記を讀む。

國解語釋（二七一）

一、その頃世に數まへられ給はぬ古宮おはしけり母方などもやむごとなくものし給ひて筋異なるべきおぼへなどおほしけるを時移りて世の中にはしたなめられ給ひけるまぎれになか〳〵いとなごりなく御後見などももの怨めしき心々にてかた〴〵につけて世を背き去りつゝ公私によりどころなくさし放たれ給へる樣なり北方も昔の大臣の御女なりける哀に心細く親だちのおぼしおきてたりし樣など思ひいで給ふにたとしへなきこと多かれど深き御契のふたつなきばかりを憂き世の慰めにてかたみにまたなく頼みかはし給へり。（源氏物語）

二、うぐひすのかひこの中にほとゝぎすひとりうまれてしがちゝに似てはなかずしがはゝに似ては鳴かず卯の花のさきたる野邊ゆ飛びかけり來なきとよもし橘の花をゐちらしひねもすになけどきゝよしまひはせむ遠くなゆきそわがやどの花橘にすみわたれ鳥。

反　歌

かきくらし雨のふる夜をほとゝぎす
なきてゆくなりあはれそのとり（萬葉集、詠霍公鳥並短歌）

八、大正十五年度第二次（四五回、豫）

設　問

一、左の文章に就き單文及び複文を指摘し且つ其の構造を說明せよ。（二一）

野分の又の日こそいみじう哀に覺ゆれ立蔀透垣などの亂れたるに前栽ども心苦しげなり大なる木ども倒れ枝など吹き折られたるが萩女郎花などの上によろぼひはひ伏せるいと思はずなり。

二、國學の興隆につきて略述せよ。（六七）

三、左につきて諸氏の說を批評せよ。（一二八）

渡し呼ぶ草のあなたの扇哉

紅綠氏曰く何だか言葉が顚倒してゐる樣だが要するにこつちの岸から向うの岸を見た句で向うの岸の草がくれに扇をあげて渡しを呼んでゐる者があるといふのである。

鳴雪碧梧桐兩氏曰く「草のあなた」と云ふのは草の向う側卽ち草がくれと云ふ意味ではない草

の生えてゐる向う岸といふ意味だらう草の生ひ茂つてゐる向う岸で人が扇をあげて渡舟を呼んで居ると云ふのである。

四方太虚子兩氏曰く單に「扇哉」と云つた處から見ると其人の體は殆ど草がくれになつて居て唯扇をあげて呼んでゐるのが草の上に見える樣な感じがする此の景色が向う岸である事は勿論だが草のあなたの「あなた」と云ふ字を向う岸と解するのは無理だらうと思ふ普通の意味で草の向う側即ち草を隔てゝ彼方と云ふ義であらう。

鳴雪氏曰く例へば山谷から向島の人を見て花のあなたの人と云ふと同じ事で草のあなたを草の向う岸と解するに不都合はあるまい。

虛子氏曰く花のあなたの人と云つたら櫻の木がくれに居る人と云ふやうに外解せられぬ。

碧梧桐氏附記「草のあなた」を「草の向う岸」と解して何等の無理は無いと思ふのみならず又「草の向うに」と云ふ解し方は甚だ其意を得ない元來扇は草の中から見えるので多少川幅も廣いとすれば此方の岸からは草に見えると云ふのみで詞は盡きてゐる筈だ何もこゝに限つて「草の向うに」と精密に敘する必要はない。（下略）

子規氏曰く草の向う側の說に贊成。

蕉村曰く（著者の假託言）「草のあなた」で大議論が起つた。面白い〳〵併し待ち給へ。私は其議論の解決は後廻しとして先づ舟の位置と呼ぶ人の位置とを極めて置いてから緩くり議論に取りかゝる事にしたいと思ふ。この句の場合を讀者が一齊に向ふ岸の景色と斷定してしまつたのが、私には分らない。これは私に云はせると向う岸でもよし、こちらの岸でもよし。東岸西岸南岸北岸更に選ぶ所はないものだ。先づ人が渡船を呼ぶ場合を考へて見るが早手廻しだらう。往來の少い田舍の渡し場などでは唯一艘の舟で人を對岸へ渡すが直ぐに對岸から乘る人が無ければ、其儘對岸に客待をして空船では此方へ戻つて來ない。そこへ又對岸へ渡るべき人が來るべき舟が無いから對岸に客待ちしてゐる船を呼ぶ。呼ばれゝば空舟でも戻つて來る。これは兩岸いづれでも同じ事だ。但しこの時は草のあなたなどから呼ぶ必要はない。川べりまで來て緩りと呼んで向岸から舟の漕ぎ戻るを煙草でも吹かして待つて居るのだ。又最も客の少い渡船場では舟を岸にもやつて置いて、船頭は客の來るまで小屋で晝寢をして居る處もある。この時も客が大聲で船頭を呼ぶのだが、以上の二つは此の發句の場合では無い。この發句の場合は、今舟が多少の人を乘せて此方の岸を離れんとする時、これに乘り後れまいと駈けつける人が一丁半丁の距離から扇を高く揭げ、オーイの聲を發して今乘るから待てと云ふ合圖をするのだ。若し川の附近が草

原であれば、其の人の妻は夏草に淚して高くさし上げた白扇と呼ぶ聲ばかりが耳と目に入るのだ。これが卽ち、「渡し呼ぶ草のあなたの扇かな」と云ふ景色だ。そこでこの場合は舟が對岸を離れる時は對岸に起り、こちらの岸を離れる時はこちらの岸に起る。私の句のどちらの岸ともきめてないのは、別に橫着といふ譯ではなくどちらの岸にもある事だから一方に極める必要を感じなかつたのさ。（木村架空著、蕪村夢物語）

問、左につき知れるところを記せ。（一問八）

（イ）　准南子及び文中子の著者

（ロ）　小學及び近思錄

作　文（口語文）

現今の世相に對する教育者の覺悟。

復　文（一六七）

（イ）　柳下惠ハ、三公ヲ以テ、其介ヲ易ヘズ。（孟子、離文十字）

（ロ）　人ノ學ベズシテ能クスルトコロノモノハ、其ノ良能ナリ。（同上、離文十二字）

國語解釋（二三六）

一、年のはに一とせのうち月ごとに上の弓張より居まちの頃まで空はれぬれば夜毎に心を業ましめ目を悅ばしむる事さらに數なしことさら三秋の間折々のいみじき光を年ごとに心にまかせて見る事まことに幸ひほき此世なりおよそ天が下の君はやすみをしろしめして天地は皆其領し給へる圖の內なれど賤しきわが輩まで天つみ空に唯ひとつかゝれる月を己がものとして恣にあふぎ見るもいともかしこく身にし餘りていみじき幸なり宿わかず賤しき巷をも同じく照らせるとめでたし年々に月と花とをあくまで見るはまことに思出ほき此世なりと云ふべしあたら夜の月なれば同じくは心知られん人と共に見んこそ本意なれ李白は今人は古時の月を見ずといへどむかし世々の人の眺め來しも此の月なれば古人のかたみとなれるも昔ほえて忍ばし古今の人の世をさり行くは流水のゆきてかへらざるが如し唯月の光のみ古今かはる事なきこそよなうめでたく貴べけれ月の梧桐の上にいたり風の楊柳の邊に來るは心を洗ひ興をもよほしてえもいはぬ快き折りふしなり四時とも思出ほき此世なれど取わき秋の月は見ざらん後の世の光までも思ひやられ侍る。

二、枕とていづれの草にちぎるらむ行くをかぎりの野べの夕ぐれ。（羈中夕といふことを）（鴨長明）

み吉野の山の彼方のあらましもかゝる憂世はかひなかりけり。（吉野の奥なる山ざとに住み

はべりける頃よみける）（前參議持躬）

漢文讀方及解釋　（一九三）

一、（イ）子曰二三子以我爲隱乎吾無隱乎爾吾無行而不與二三子者是丘也。（論語）

（ロ）子曰法語之言能無從乎改之爲貴巽與之言能無說乎繹之爲貴說而不繹從而不改吾未如之何也已矣。（同上）

二、蓼子曰「客亦知夫水與月乎逝者如斯而未嘗往也盈虛者如彼而卒莫消長也蓋將自其變者而觀之則天地曾不能以一瞬自其不變者而觀之則物與我者無盡也而又何羨乎」且夫天地之間物各々有主苟非吾之所有雖一毫而莫取惟江上之清風與山閒之明月耳得之而爲聲目遇之而成色取之無禁用之不竭是造物者之無盡藏也而吾與子之所共適。（蘇軾前赤壁賦）

三、昔者先王之爲天下必使天下欣然常有無窮之心力行不倦而無自棄之意夫惟自棄之人則其爲惡也甚卷而不可解是以聖人長之設爲高位重祿以待能者使天下皆得竭聲自奮拔擢而來其才之不逮力之不足是以經不能至於其間而非聖人棄其門絕其盤也夫然故一介之賦吏則閽之匹夫無不奔走於善至於老死而不知休息此聖人以術羈之也。（蘇軾無畏先生字說）

四、（イ）尙有鄙地賤隸老叔孫不知天下士爭作布衣看。（袁凱詠史）

（ロ）客舍并州已十霜歸心日夜憶汾陽無端更渡桑乾水却望并州是故鄉。（賈島渡桑乾）

國　　語

設　　問

一、左記に現はれたる物語を說明せよ。（九九）

二、能樂の藝術としての性質について述べよ。（九九）

三、假名遣の標準に於いて述べよ。（一〇一）

作　　文（文語體）

題　　目。

國語解釋（二七三）

一、出雲の國參詣志の小說に天のみあらかをつくりて水戸の神の琛楯八玉の神を膳夫として天の御饗奉る時に贈き白して楯八玉の神楯に化りて海の底に入りてそこの埴土を咋ひいでて天の八十毘良迦をつくりて海布のからをかりて燔臼につくり海藻のからを燧杵につくりて火を鑽りいでて申しけらくこの我が鑽れる火は高天原には神產巢日御祖命のとだる天の新巢の煤煙の八拳垂るまで燔きあげ地の下は底つ石根に燔き燬らして拷繩の千尋縄うち延へ釣らせる海人が大口

の尾翼鱸さわさわにひきよせ騰げてさきたけのとををとををに天の眞魚咋奉らむと申しき。（古事記）

二、春の日の霞める時に墨の江の岸にいでゐて釣船のとをらふみれば古への事ぞおもほゆる水の江の浦島の子が堅魚釣り鯛釣りほこり七日まで家にもこずてうなさかをすぎて漕ぎ行くに海若の神のをとめにたまさかにいこぎむかひてあひ誂ひことなりしかばかきむすびとこよにいたり海若の神の宮の内の隔の細なる殿に携はり二人入りゐて老いもせず死にもせずしてとこしへにありけるものを世のなかのしれたる人の吾妹兒に告りて語らく須臾は家に歸りて父母にことをものらひ明日のごとわれは來なむといひければ妹がいへらくとこよべにまたかへり來て今の如逢はむとならばこの篋ひらくなゆめとそこらくにかためしことを墨の江にかへり來りて家見れど家も見かねて里みれど里も見かねて恠しとそこにおもはく家ゆでゝ三歳のほどに墻もなく家失せめやと此の筥をひらきてみてばもとのごと家はあらむと玉篋すこし披くに白雲の箱よりいでゝとこよべにたなびきぬればたち走り叫び袖振りこいまろびあしずりしつゝたちまちに情消失せぬ若かゝりしはだも皺みぬ黒かりし髮も白けぬゆなゆなはいきさへたえて後遂にいのちしにける水の江の浦島の子が家どころ見ゆ。（萬葉集）

九、明和二年度（四七回、豫）

談話問題

一、左の歌につきて文の構成を說明し歌中に於ける用言につきて文語口語兩樣の活用表を作れ。（二二）

かたちこそみ山がくれのくちきなれ心は花になさばなりなむ。

ひさかたの月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな。

二、左の人々につきて知れる所を述べよ（一〇二）（七〇）

橘守部、小林一茶、石川雅望、荒木田麗女、松永貞德。

三、左の文を鑑賞批評せよ。（一三一）

小諸なる古城のほとり雲白く遊子かなしむみどりなすはこべはもえずわかくさもしくによしなししろがねのふすまのをかべ日にとけてあは雪流るあたゝかき光はあれどのにみつるかをりもしらずあさくのみ春はかすみてむぎの色僅かに青し旅人のむれはいくつか畠中の道を急ぎぬ暮れゆけばあさまも見えずうたかなし佐久の草笛千曲川いさよふ波の岸ちかきやどにのぼりつにごり酒にごれる飲みて草まくらしばしなぐさむ。

四、左に就きて知る所を記せ。（一四九）

（イ）格物致知、（ロ）呂氏春秋、文心彫龍。

作　文（口語體）

菅原道眞傳を讀む。

復　文（一六七）

始吾幼ニシテ且ツ少キトキ、文章ヲ爲ルニ辭ヲ以テ工ト爲ス。長ズルニ及ビテ、乃チ文ハ以テ道ヲ明カニスルコトヲ知ル。是レ固ヨリ苟モ采色ヲ務メ、聲音ニ誇ルヲ爲シテ、以テ能ト爲サザルナリ。（唐宋八家文、柳宋元、答韋中立論師道書、原文三十七字）

國語解釋（二三八）

一、やよひの十日あまりの頃同じ心なる友だちあまたいざなひて初瀬に詣りしついでによきたよりに寺めぐりせむとて大和のかたに旅ありき日ごろするに路遠くて日もあつければ木蔭に立ちよりて休むとて群れゐる程にみづはさしたる女の杖にかゝりたるがめのわらはの花がたみにわらび折りいれてひぢにかけたるひとり具してその木の下にいたりぬ遠き程にはあらねど苦しく成りて侍ればおはしあへる所はゞからしけれど都のかたよりものし給ふにやむかしも戀しければしばしもなづさひたてまつらむといふけしきもほすげみわなゝくやうなれど年よりたる程よりも昔おぼえてにくげもせず此のわたりにおはするにやなど問へばもとは都に百とせあまり侍りてその後山城の狛のわたりにいそぢばかり侍りきさて後おもひもかけぬ草のゆかりに春日野わたりに住み侍るなりすみかのとなりかくなりし侍るもあはれにといふに年のつもり聞くほどに皆驚きてあさましくなりぬ。

二、うき世には門させりとも見えなくになどかわが身のいでがてにする。（つかさとけて侍りける時よめる）

山里の霧のまがきのへだてずはをちかた人のそでもみてまし。

漢文讀方及解釋（一九六）

一、禹稷當平世三過其門而不入孔子賢之顏子當亂世居於陋巷一簞食一瓢飲人不堪其憂顏子不改其樂孔子賢之「孟子曰禹稷顏回同道禹思天下有溺者由已溺之也稷思天下有飢者由已飢之也是以如是其急也禹稷顏子易地則皆然今有同室之人鬪者救之雖被髮纓冠而救之可也鄉鄰有鬪者被髮纓冠而往救之則惑也雖閉戶可也。」（孟子離婁下）

二、陌囂遣馬援往成都觀公孫述援與述舊謂當握手歡如平生時述已稱帝四年矣援既至盛陳陛衛以延援援謂其屬曰「天下雌雄未定公孫不吐哺迎國士反修飾邊幅如偶人形此何足久稽天下士乎」因辭歸謂囂曰子陽井底蛙耳而妄自尊大不如專意東方。（十八史略光武帝）

三、雞鳴紫陌曙光寒鶯囀皇州春色闌金闕曉鐘開萬戸玉階仙仗擁千官花迎劔佩星初落柳拂旌旗露未乾獨有鳳凰池上客陽春一曲和皆難。（唐詩選半參和賈至舍人早朝明大明宮之作）

同　本試驗

設　問

一、平家物語に現れたる武士の精神につきて述べよ。（七二）

二、紀貫之、紫式部、藤原定家の閲歴につきて述べよ。（七三）

三、明治時代の口語文の發達につきて述べよ。（一〇四）

作　文（文語體）

昭和の御代と國民の覺悟。

國語解釋（二七六）

一、宮の御前に内の大臣の奉り給へりし御草子をこれに何を書かましうへの御前には史記といふ文を書かせ給へるなどのたまはせしを枕にこそはし侍らめと申しゝかばさば得よとて賜はせたりしをあやしきを故事や何やと盡きせずおほかる紙の數を書きつくさむとせしにいと物覺えぬことぞおほかるや大かたこれは世の中のをかしき事人のめでたしなど思ふべき事なほえり出でゝ歌などをも木草鳥蟲をもいひ出したらばこそ思ふほどよりはわろし心見つなりともそしらじめ只心ひとつにおのづから思ふことをたはぶれに書きつけたれば物に立ちまじり人なみなみなるべき耳をも聞くべきものかはと思ひしにはづかしなども見る人はのたまふなればいとめやすくぞあるやげにそれもことわり人のにくむをも善しといひ譽むるをも惡しといふは心のほどこそおし量らるれ只人に見えけむぞねたきや。

二、あぢさはふいもがめしばみずてしきたへの枕もまかずかにはまきつくれる舟にまかぢぬきわがこぎ來ればあはぢのぬじまもすぎいなみづまからにのしまの島のまゆわぎへをみればあをやまのそことも見えずしら雲もちへになりきぬこぎたむる浦のことごとゆきかくる島のさきざぎくまもおかずおもひぞわが來るたびのけながみ。

反歌三首

たまもかるからにの島にあさりするうにしもあれや家もはざらむ。

しまがくりわがこぎ來ればともしかもやまとへのぼるまくまぬのふね。

風吹けばなみかたたむとさもらふにつたの細江にうらがくれをり。

（過辛荷島山部宿彌赤人作家一首並短歌）

十、昭和三年度（四九回、豫）

設　問

一、左の語を例を擧げて說明せよ。（一一三）

緣語、序詞、懸詞、折句、枕詞。

二、左の歌の係結の關係を說明し歌中に於ける用言の活用表を作れ。（二四）

淡路島通ふ千鳥のなく聲にいくよねざめぬ須磨の關守。

ふる雪のみのしろごろもうちきつゝ春來にけりと驚かれぬる。

三、左の文の意義を實例を擧げ敷衍して說明せよ。（一三三）

徒然草はつれづれなるまゝにの第一段から八歲になつた時佛に就いて父と問答した最後の段に至るまでその說く所多方面に涉つてゐるその間に戀を說き解脫を說いて平安時代の情趣主義と室町時代の主情主義否定との間に一見矛盾がある樣であるが思ふに彼は長明や西行などゝ違つて解脫の境地から再び人間生活に立歸つて人生を見てゐるものゝやうである。さうして短い隨筆の連續する中に統一した作者の個性を眺める事は難くなく哲人としての兼好の面目の躍如してゐるのを覺える。

四、左の人物について知れる所を記せ。（一五二）

（イ）柳宋元、（ロ）新井白石。

作　文

思想善導に關する意見。

復　文（一六八）

衛キニハ身死スルガ爲メニシテ、而シテ受ケズ。今ハ識レル所ノ窮乏者ノ我ニ得ルガ爲メニシテ之ヲ爲ス。是レ亦以テ已ムベカラザルカ。（孟子告子上、原文二十六字）

國語解釋（二四一）

一、法皇（後白河）は城南の離宮にして冬も半過ごさせたまへば射山の嵐の音のみはげしくて寒庭の月ぞさやけき庭には雪降り積れども跡踏みつくる人もなく池にはつらゝとぢ重ねてむれゐし鳥も見えざりけり大寺の鐘の聲遺愛寺の聞を驚し西山の雪の色香爐峰の望を催す夜霜に寒けき砧のひゞきかすかに御枕につたひ曉氷をきしる車の跡遙の門前に橫たはれり巷を過ぐる行人征馬の忙がはしげなるけしきうき世をわたる有樣もおぼしめし知られてあはれなり宮門を守る蠻夷の夜晝警衛をつとむるも前の世のいかなる契にて今緣を結ぶらむと仰なりけるぞかたじけな

きおよそものに觸れ事に隨つて御心を傷ましめずといふ事なし。

二、（イ）われを君なにはのうらにありしかばうきめをみつのあまとなりにき。

（ロ）このせにも沈むときけば涙川ながれしよりもぬるゝ袖かな。

（遠き國に侍りける時おなじさまなるものどもことなりてのぼるときこえける時このうちにもれにけりと聞きて、都の人に遣はしける。）

漢文讀方及解釋（一九九）

一、子路問强子曰南方之强與北方之强與抑而强與寬柔以教不報無道南方之强也君子居之衽金革死而不厭北方之强也而强者居之故君子和而不流强哉矯中立而不倚强哉矯國有道不變塞焉强哉矯國無道至死不變强哉矯。（中庸）

二、微生畝謂孔子曰丘何爲是栖栖者與無乃爲佞乎孔子曰非敢爲佞也疾固也。（論語、憲問）

三、（イ）沅湘流不盡屈子怨何深日暮秋風起蕭蕭楓樹林。（唐詩選、載叔倫三閭廟）

（ロ）綠樹重陰蓋四隣青苔日厚自無塵科頭箕踞長松下自眼看他世上人。（唐詩選、王維與盧員外象過崔處士與宗林亭）

四、孝章皇帝權明帝察察後知人厭苛切事從寬厚文之以禮樂嘗議貢舉法章彪議曰國以簡賢爲務賢以孝行爲首求忠臣必於孝子之門上然之盧江毛義以行義稱張奉候之府檄適至以義守安陽令義捧檄入喜動顏色奉心賤之後義母死徵辟皆不至奉乃歎曰往日之喜爲親屈也上下詔褒寵之。（十八史略、東漢孝章紀）

同　本試驗

設　問

一、口語の文法と文語の文法との間に存する主なる差違に就いて述べよ。（二七）

二、平安朝の女流日記文學四種を擧げ簡明に解說せよ。（七五）

三、左の四種の文は如何なる文獻に用ひられたるものなるかを示し且つ漢字使用の異同について述べよ。（七六）

（イ）御門能御坐能稱辭竟奉皇神等能前爾白久櫛盤間門命豐磐間門命登御名者白氏辭竟奉者、四方能御門爾湯都磐村能如塞坐氏朝者御門開奉、夕者御門閉奉氏疎夫留物能自下往者下手守、自上往者上手夜能守日能守爾守奉故、皇御孫命能宇豆乃弊帛手稱辭竟奉久登宣。

（ロ）天皇大命爾坐西奏賜久掛卷畏伎飛鳥淨御原宮爾大八洲所知奭聖乃天皇命天下手治賜比平賜比氏所思坐久上下手齊倍和氣氏无動久靜加爾令有爾波禮等樂等二都並氏志平久長久可有登隨神毋所

思坐氏此乃鉾子始賜此徳賜此世等開食氏與天地共窮絶事無久御稽備受賜被利行幸物等之臣皇太子斯王爾學志頂令荷氏我皇天皇大前稱貢事矛奏。

（八）　沼名河之底奈流玉求而得之玉可毛拾而得之玉可毛安多良志吉君之老落惜毛。

（二）　四日壬子武衛等常陸國府給佐竹脊權現及境外郎從滿國中然者莫楚忽之義熱有計策可被加誅罰之由常胤廣常義澄實平已下宿老之類候群議先爲度彼撃之存案以緣者遣上總權介廣常被案內之處太郎義政者申即可參之由。

作　文（文語體）

御大禮に際して國民の覺悟を述よ。

國語解釋（二八〇）

一、長雨例の年よりもいたくして晴るゝ方なくつれづれなれば御方方繪物語等のすさびにて明し暮し給ふ。（中略）この頃幼き人の女房などに時々讀ますを立ち聞けば物よくいふものゝ世にあるべきかな空言をよくしなれたる口つきよりぞ言ひ出すらむとおぼゆれどさしもあらじやと宣へばげに偽り飾れたる人やさまざまにさも納み侍らひたゞいと誠とこそ思ひたまへられにけれとて硯をおしやり給へば實なくも聞え貶しけるかな神代より世にあることを記し置きけるなり日本紀などはたゞかたそばぞかしこれらにこそ通々しく委しきことはあらめとて笑ひたまふその人の上とてありのまゝに言ひ出づることこそなけれ善きも惡しきも世に經る人のありさまの見るにも儘かず聞くにもあまることを後の世にも言ひ傳へきまほしき節々を心に籠め難くて言ひ置き始めたるなり善きさまに言ふとては善きことの誤をえり出で人に隨はむとては又惡しきさまの珍らしきことを取り集めたる皆かたゝ〳〵につけてこの世の外の事ならずかし人のみかどの才つくりやうかはれる同じやまとの國のことなれど昔今のに變るなるべし深き事淺き事の差別こそあらめひたすらに空言と言ひはてむもことの心違ひてなむありける佛のいとうるはしき心にて說き置きたまへる御法も方便と云ふことありてさとりなきものは此處彼處違ふ疑を置きつゝなむ方等經の中に多かれど言ひもて行けば一つ旨に當りて菩提と煩悩とのへだゝりなひこの人の善き惡しきばかりのことは變りけるよと云へばすべて何事も空しからずなりぬやと物語をわざとのことに宜ひなしつ。（源氏物語）

（以上傍線を施したる所のみを解釋せよ。）

二、とりがなくあづまの國にいにしへにありけることゝ今までに絶えずいひくるかつしかの眞間のてこながあさまぬにあをおびつけひたさをゝもにはおりきて裳だにもかきはけづらずくつを

だにはかずゆけどもにしきあやのなかにつゝめるいはひごも妹にしかめやも望月のたれるおもわに花のごとゑみてたてればなつむしのひにいるがごとみなといりに舟こぐごとくよりかぐれ人の云ふときいくばくもいけらぬものをなにすとかみをたなしりて浪のとのさわぐみなとのおくつきにいもがこやせる遠きよにありけることを昨日しも見けむがごともおもほゆるかも。

反　歌

かつしかのまゝのゐみれば立ちならしみづくましけむてこなしおもほゆ。

（萬葉集、詠勝鹿眞間娘子歌一首並短歌）

一一、昭和四年度（五一回、巻）

設　問

一、和歌と連歌との關係を述べよ。（八一）

二、左に載きて「さび」の意義を說明せよ。（八〇）

野明曰、句のさびはいかなる物や。

去來曰、さびは句の色也閑寂なる句をいふにあらず、たとへば老人の甲冑を帶し戰場に働き錦繡をかざり御宴に侍りても老の姿あるが如し賑かなる句にも靜かなる句にもあるものなりた

とへば

花守や白きかしらをつきあはせ

先師曰、さび色よくあらはれたり。（去來抄）

三、左の文章に載きて文の構成を說明し且つ用言の活用表（口語ノミノ）を作れ。（三〇）

呉服屋の手代が大きなふろしきづゝみを石地藏の前におろして休みましたがよほど疲れてゐたものと見えていつの間にかぐつすり寢込んでしまひました。

問、左に載きて知れる所を記せ。（一五三）

（イ）孝經、（ロ）貞治通鑑、（ハ）文獻通考。

作　文

時勢に從ひて節約を人に勸む。

復　文（一六八）

湯三タビ往キテ之ヲ聘セシム。既ニシテ幡然トシテ改メテ曰ク、我畎畝ノ中ニ處リ、是ニ由リテ以テ堯舜ノ道ヲ樂マンヨリハ、吾豈是ノ君ヲシテ、堯舜ノ君タラシムルニ若カンヤ。

（孟子萬章上、原文三十九字）

國語解釋（二四三）

一、大將殿法師（西行）を見おこせ給ひて昔は藐姑射の山の御宮づかへせし人の世を儚きものに思ひしみて身は墨くやつしたれど月花の歎のほまれは物の心なき吾妻人さへ聞き知りたるぞ文字の數だに歌とのみ思ひしもかうさし向ひては武士の負けじ心もあらずなりぬるぞ八百日ゆく濱の眞砂の中には玉とて拾ひ收めたらむをかたりて聞ゆべく仰たうぶいみじくかしこまりて思ひかけず大樹の御蔭に參り侍ればいともかゞやかしきにぞたゞ夢路たどるやうに侍りて聞え奉るべきことも侍らずさとき御まなこに見現はされ侍るこそいともありがたけれ伊勢の海ちひろの濱におり立ちならひ侍れどかひあることもうち出で侍らぬにはこれとて捧げ奉るべくもあらず君にもかねて擧ばせ給ふとも漏り聞き奉る天の下まつりごち給ふ御うつはものゝ大いなるにおぼしよらせ給ふにはかけても及ぶまじきをさへ思ひ知り侍る大空に羽うちつけて飛ぶたづの聲霜枯の淺茅がもとの蟲の音いかで取りなめて聞ゆべきあなかしこしと申す。

二、月すめばよものうき雲空に消えてみ山がくれをゆくあらしかな。（新古今集）

大原やせがゐの水のにごりなき心をくまぬかみはあらじな。（神樂、柿園詠草）

漢文讀方及解釋（二〇一）

一、（イ）子在陳曰歸與歸與吾黨之小子狂簡斐然成章不知所以裁之。（論語、公治長）

（ロ）子曰君子不可小知而可大受也小人不可大受而可小知也。（同、衛靈公）

二、孟子曰伯夷聖之清者也伊尹聖之任者也柳下惠聖之和者也孔子聖之時者也孔子之謂集大成集大成也者金聲而玉振之也金聲也者始條理也玉振之也者終條理也始條理者智之事也終條理者聖人之事也智譬則力也由射於百步之外也其至爾力也其中非爾力也。（孟子、万章下）

三、八年曹彬圍金陵急李煜遣徐鉉入貢求緩兵鉉言煜以小事大子如事父其說累數百上曰爾謂父子爲兩家可乎鉉不能對還尋復至奏言江南無罪辭氣益厲上怒按劍不須多言江南亦有何罪但天下一家臥榻之側豈容他人鼾睡乎鉉惶恐而退。（十八史略、宋太祖紀）

四、（イ）西向輪臺萬里余也知鄕信曰應疎隴山鸚鵡能言語爲報家人數寄書。（唐詩選、岑參北庭度隴思家）

（ロ）霜落荊門江樹空布帆無恙挂秋風此行不爲鱸魚鱠自愛名山入剡中。（同李白秋下荊門）

同　本試驗

設　問

一、江戸時代に於ける歌論の中著しき數說を擧げよ。（五一）

二、本居宣長は何故に日本書紀よりも古事記に重きを置きしか。（八二）

三、萬葉集に現はれたる文法と古今集に現はれたる文法とに於ける主なる差異に就いて述べよ。（三二）

作　文（文語體）

我が讀書法。

國語解釋（二八三）

一、やまと歌はむかし天地ひらけはじめて人のしわざいまださだまらざりし時葦原の中つ國のことのはとして稻田姫素鵞のさとよりぞつたはれりけるしかありしよりこのかたその道さかりに起りそのながれ今に絶ゆる事なくして色にふけり心をのぶるなかだちとし世ををさめ民をやはらぐる道とせりかゝりければ代々の帝もこれを捨てたまはずえらび置かれたる集ども家々のもてあそび物として言の葉の花殘れる木のもとかたく思の露もれたる草隱れもあるべからずしかはあれども伊勢の海清き渚の玉は拾ふとも盡くる事なくいづみの柚しげき宮木はひくともたゆべからず物皆かくの如し歌の道また同じかるべし。

二、あぶりほすひともあれやもいへびとのはるさめすらをまづかひにする。
かゞみなすわがみしきみをあばのぬのはなたちばなのたまにひろひつ。
をとめちがゆきあひのわせをかるときになりにけらしもはぎのはなさく。

一二、昭和五年度（五三回、象）

設　問

一、浦島傳說羽衣傳說義經傳說を取扱ひたる文學的作品を擧げてその作者並に成立時代に就いて知れる限を記せ。（八二）

二、左の文中より主語を拔出してその性質を說明し又動詞形容詞及助動詞の活用表を作れ。（三四）
萬のことは月見るにこそ慰むものなれ或る人の月ばかり面白きものはあらじと言ひしに又一人露こそ哀なれと爭ひしこそをかしけれ。

三、左の詩を評論せよ。（一三五）
この泉を汲まうとするな
間の中で吃るやうな聲をして涌いて
あらゆる日の光あらゆる歡樂を
默つて中に藏してゐる泉だ。
此の泉の黃金なす水を
汲むことの出來る人は一人も無い。

只自分を性にして持つて往く人があつたら
この泉はそれを迎へて高く迸り出るだらう。

問、左に載きて知れる所を記せ。（一五五）

（甲）太極圖說、（乙）大日本史。

作　文（口語體）

我が國の詞文の將來に就いて。

復　文（一六九）

孟子曰ク、今無名ノ指屈シテ信ビザル有リ。疾痛事ニ害アルニ非ラザルナリ。如シ能ク之ヲ信バス者有アラバ、則チ秦楚ノ道モ遠シトセズ。指ノ人ニ若カザルガ爲ナリ。指人ニ若カザレバ則チ之ヲ惡ムコトヲ知ル。心人ニ若カザレバ、則チ惡ムコトヲ知ラズ。此レヲ之レ類ヲ知ラズト謂フナリ。（孟子告子上、原文六十二字）

國語解釋（二四六）

一、朱雀院も後におはしますとこそはいはれさせ給ひしかども將門が亂など出できて恐れ遁ぐさせおはしましゝ程にやがてかはらせたまひしにぞかしその程の事こそいと怪しう侍りけれ母后の御もとに行幸せさせたまへりしをかゝる御有樣の思ふやうにめでたく嬉しき事など奏せさせたまひて今は春宮ぞかくて見聞えさせまほしきと申させたまひけるを心もとなくいそぎ思召す事にこそありけれとて程もなく譯り聞えさせたまひけるに后の宮はさ思ひても申さゞりし事をたゞたゞ末の事をこそ思ひしかとていみじく歎かせたまひけりさておりさせたまひて後人々の歎きけるを御覽じて院より后宮に聞えさせたまへりし國譯の日

日の光いでそふ今日のしぐるゝはいづれの方の山邊なるらむ。

后の宮の御かへし

白雲のおりゐる方やしぐるらむおなじみ山のひかりながらに。

などぞ聞え侍りし。

二、こりずまに又もなき名は立ちぬべし人にくからぬよにしすまへば。（古今和歌集）

燈火の花をかぞへて少女子が明日のよきさがうらへつるかな。（萬葉集）

漢文讀方及解釋（二〇六）

一、曾子曰以能問於不能以多問於寡有若無實若虛犯而不校昔者吾友嘗從事於斯矣。（論語、泰伯）

二、孟子曰不仁者可與言哉安其危而利其菑樂其所以亡者不仁而可與言則何亡國敗家之有有孺子歌

曰滄浪之水清兮可以濯我纓滄浪之水濁兮可以濯我足孔子曰小子聽之清斯濯纓濁斯濯足矣自取之也夫人必自侮然後人侮之家必自毀而後人毀之國必自伐而後人伐之太甲曰天作孽猶可違自作孽不可活此之謂也。（孟子、離婁上）

三、唐莊宗皇帝名存勗沙陀人也父克用有勇略一目微眇號獨眼龍爲唐平黃巢立大功王于晉與朱氏爲仇暮年頗爲所蹙憂形於色存勗幼進言曰「朱氏窮凶極暴人怨神怒極將斃矣吾家世襲忠貞大人當遵養時晦以待其衰奈何輕爲沮喪使天下失望乎」克用說臨終立爲嗣謂其下曰此子志氣遠大必能成吾事年十七嗣晉王位即舉兵破梁解潞圍自是連勝梁祖歎曰生子當如李亞子吾兒豚犬耳。（十八史略、五代唐紀）

四、（イ）三戍漁陽再度遼辟弓在臂箭橫腰匈奴似欲知名姓休傍陰山更射鵰。（唐詩選、張仲素塞下曲）

（ロ）燕趙悲歌士相逢劇孟家寸心言不盡前路日將斜。（同上、錢起逢俠者）

同　本試驗

設　問

一、慣習的假名遣と歷史的假名遣とによりて口語の詞の活用に及ぼす異同について說明せよ。（三六）

二、浮世草子、讀本、合卷、滑稽本の性質を簡單に說明せよ。（八四）

三、左の人々の重なる著書の名を擧げよ。（一〇五）

契　沖、谷川士清、伊勢貞丈、平田篤胤、橘守部。

作　文（文語體）

我が國體。

國語解釋（二八六）

一、近き所には播磨の明石の浦こそなほ殊に侍れ何のいたり深き隈はなけれど唯海の面を見渡したる程なむ怪しくこと所に似ずゆほびかなる所に侍るかの國の前の守新發意の女かしづきたる家いといたしかし大臣の後にて出でたちもすべかりける人の世のひがものに交らひもせず近衞の中將を捨てゝ申し給はれける司なれどかの國の人にも少し慢られて何の面目にてか都にも還らむと言ひて頭もおろし侍りにけるを少し奥まりたる山住もせでさる海づらに出で居たるひがひがしきやうなれど實にかの國の中にさも人の籠り居ぬべき所々はありながら深き里は人ばなれ心すごく若き妻子の思ひ佗びぬべきによりかつは心を遣れる住居になむ侍るさいつ頃罷り下りて侍りし序に有樣見給へに寄りて侍りしかば京にてこそ所得ぬやうなりけれそこら遙かにい

かめしうしめて造れる樣さはいへど國の司にてし置きける事なれば殘りの齡ゆたかに經べき心がまへもになくしたりけり後の世もいとよくしてなか〳〵法師まさりしたる人になむ侍りけると申す。

二、さゝの葉にはだれふりおほひけなばかもわすれむといへばましておもほゆ。（萬葉集）

月讀のもたるをちみづえてしあらばしこの翁もまたをちなむか。（山齋集）

一三、昭和六年度（五五回、豫）

設　問

一、左の文法の問題につきて說明せよ。（三八）

（イ）過去の助動詞「き」は動詞に如何に結びつくか。

（ロ）左の文章を品詞に區分し用言の活用表をつくれ。

なんとも言へぬ美しいきれいな花が野原一面に咲いて居りました。

二、進行文の特色を擧げよ。（八七）

三、左の書につきて說明せよ。（一〇七）（八六）

詞の玉緒、古今要覽稿、小說神髓、古事類苑、貞丈雜記、和訓栞、稜威言別、

猿　蓑、歷朝詔勅解、新學異見。

四、左の二項につきて知れる所を記せ。（一五六）

（イ）伊藤仁齋、（ロ）唐宋八家。

作　文

秋の夜。

復　文（一六九）

孟子曰ク、事フルコト孰レヲカ大ナリト爲ス。親ニ事フルヲ大ナリト爲ス。守ルコト孰レヲカ大ナリト爲ス。身ヲ守ルヲ大ナリト爲ス。其ノ身ヲ失ハズシテ、能ク其ノ親ニ事フル者ハ、吾之ヲ聞ケリ。其ノ身ヲ失ヒテ、能ク其ノ親ニ事フル者ハ、吾未ダ之ヲ聞カザルナリ。

（孟子、原文四十七字）

國語解釋（二四八）

一、さる程に先帝は出雲の三尾の湊に十餘日御逗留あつて順風になりにければ船人纜を解いて御艤して兵船三百餘艘前後左右に漕ぎ並べて萬里の雲に泝る時滄海沈々として日西北の浪に沒し雲山迢々として月東南の天に出づれば漁船の歸る程見えて一燈柳岸に幽なり暮るれば蘆岸の煙

に船を繋ぎ明くれば松江の鳳に帆を揚げ淡路に日數を重ねれば都を御出であつて後二十六日と申すに御船讃岐の國に着きにけり佐々木隆清判官眞清國府の島と云ふ所に黒木の御所を作つて皇居とす玉殿に咫尺して召し仕はれける人とては六條少將忠綱頭大夫行房女房には三位殿の御局ばかりなり昔の王様金殿に引き替へて要き節茂き竹檜浪隔なき松の墻一夜を隔つる程も堪へ忍ぶべき御心ならず夷人謡を唱ふる聲普岡の武士のとのゐを傳ふ聲ばかり御枕の上に近ければ夜のおとゞに入らせたまひても露まどろませたまはず荻の戸の明くるを待ちし朝政なけれども謁ごとの御勤北辰の御幸も忘らず今年いかなる年なれば百官罪無うして愁の涙を配所の月に滿らし一人位を易へて宸襟を他郷の鳳に惱ましたまふらむ天地開闢より以來斯る不思議を聞かざれば天にかゝる日月も誰のために明らかなる事を恥ぢらむ心なき草木もこれを悲しみ花開く事を忘れつべし。

二、故里へ歸らむことは飛鳥川淵瀬たがふな。（初瀬に詣でゝ歸るさに飛鳥のほとりにやどりて侍りける夜よみ侍りける）（新古今和歌集）

河橋をひきしは遠き昔にて誰がぬ水を汲む世なりけり。（宇治川の水を汲むといふことを）（千々和歌集）

一、佛肹召子欲往子路曰昔者由也聞諸夫子曰親於其身爲不善者君子不入也佛肹以中牟畔子之往也如之何子曰然有是言也不曰堅乎磨而不磷不曰白乎涅而不緇吾豈匏瓜也哉焉能繫不食。（論語、陽貨）

二、孟子曰孔子登東山而小魯登太山而小天下故觀於海者難爲水遊於聖人之門者難爲言觀水有術必觀其瀾日月有明容光必照焉流水之爲物也不盈科不行君子之志於道也不成章不達。（孟子盡心上）

三、太史公曰傳曰其身正不令而行其身不正雖令不從其李將軍之謂也余諸李將軍悛悛如鄙人口不能道辭及死之日天下知與不知皆爲盡哀被其忠實心誠信於士大夫也諺曰桃李不言下自成蹊此言雖小可以譬大也。（史記、李將軍列傳贊）

四、（イ）玉帛朝回望帝鄉烏孫歸去不稱王天涯靜處無征戰兵氣銷爲日月光。（唐詩選、常建塞下曲）

（ロ）二十餘年別帝京重聞天樂不勝情舊人唯有何戡在更與殷勤唱渭城。

（同上、劉禹錫聽李凖何戡）

同本試驗

假問

一、國風文學の文學史上の地位に就きて記せ。（七三）